

頼山陽資料

特別
イ4
1919
662



特
14
1919
49
卷

八分七段

上序言 讀本の概二題す

一 系譜 林谷と石を説す

一 自刻印題後二

一 木米陶器と題す

一 田舎と岩中語野馬浮田 兼 大山陽書状

一 有柳川家との関係

一 茶山の隠修書状

一 山陽段後未交の書状

一 岩菴島書

一 春水書局印譜と題す

一 山陽詩話忠行古文書

一 浙西六家詩評と題す

- 二 雲華に具ふる祝養鑑
- 二 米尾忠尚とぬり果さる
- 二 大概子準に具ふる漢文尺牘
- 二 同 隱史五種
- 二 山陽題跋と後ハ題中ナシ
- 一 續八家文序作爲一書也
- 二 八木亮雅尚
- 一 高克山陽志牒
- 二 秋月と八家文
- 一 童叟の命名
- 二 山陽の港説のり記
- 二 岸駒の竹に對する詩

隱史五種

最初の設計——大概忠尚在任

其(高市簡引) 初の量

氏(後徳川を以て)武元亮の

終焉(千代共) 論考(後の

米尾の媒(忠尚) 田内

集五十種 白紙頂戴 梨

を祭り又 帆足の子ハ 品

貴作文の序(75P)

外史勝手少の序本下り 出

就(毛) 鳥肌 四支(五支)

山陽忠尚(内) 族中(宮)

日本外史

緒言

外史の位置

外史

米尾忠尚

外史

一 二百
一 二百
一 二百

通海の
手記

國民的

5P

10P

一 印と山陽

喜ぶの印齋と云々、一族に
去るあり、山陽の印火を免る

竹田、自刻印を遺す、林と
山陽、蘇氏印略叙

一 勅命後文に云々

一 田母宛

御勅命氣希免、喜ぶの
p. 68 三十四才 文化十年

一 勅命後文に云々

一 山陽の勅命天下に獨あり

一 山陽の勅命天下に獨あり

一 山陽の勅命天下に獨あり

一 後長治の勅命天下に獨あり

一 山陽の勅命天下に獨あり

一 喜ぶの山陽を免る

一 勅命後文に云々

一 喜ぶの山陽を免る

一 喜ぶの山陽を免る

一 喜ぶの山陽を免る

一 山陽の肺病 山陽の肺病 山陽の肺病

二 夢野二鶴子 夢野二鶴子 夢野二鶴子

三 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

四 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

五 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

六 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

七 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

八 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

九 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十一 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十二 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

一 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

二 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

三 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

四 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

五 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

六 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

七 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

八 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

九 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十一 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十二 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十三 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十四 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十五 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十六 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十七 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十八 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

十九 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

二十 山陽と豊後 山陽と豊後 山陽と豊後

彦七の歌を記すに云ふは
松合の面を能くしるす

一 国民面の山陽 彦七の文章は 彦七の文章は

一 船細衛 東坂の画傳 船家遺家

一 竹外詩稿

~~山陽と長崎~~

一 耶馬溪画彦七の 雲巻に道ある如し

安東の怪き物語

一 山陽瑣々録 (大)

一 山陽の行一説一言 (大)

一 岸野の作

一 山陽の平話 十二

一 備中の 山陽談 (大)

一 近畿南海の山陽談 (大)

一 京都の親氏をゆふ (大)

一 牧野抄高談

一 福地日先人と山陽の天竺の記 夕流中

一 島原雲井令伝圖 輪ちんや 養花梅

一 林谷徳物の為の印を刻す 是夜

一 日本外史の俗語

一 古賢教書也祭多成文

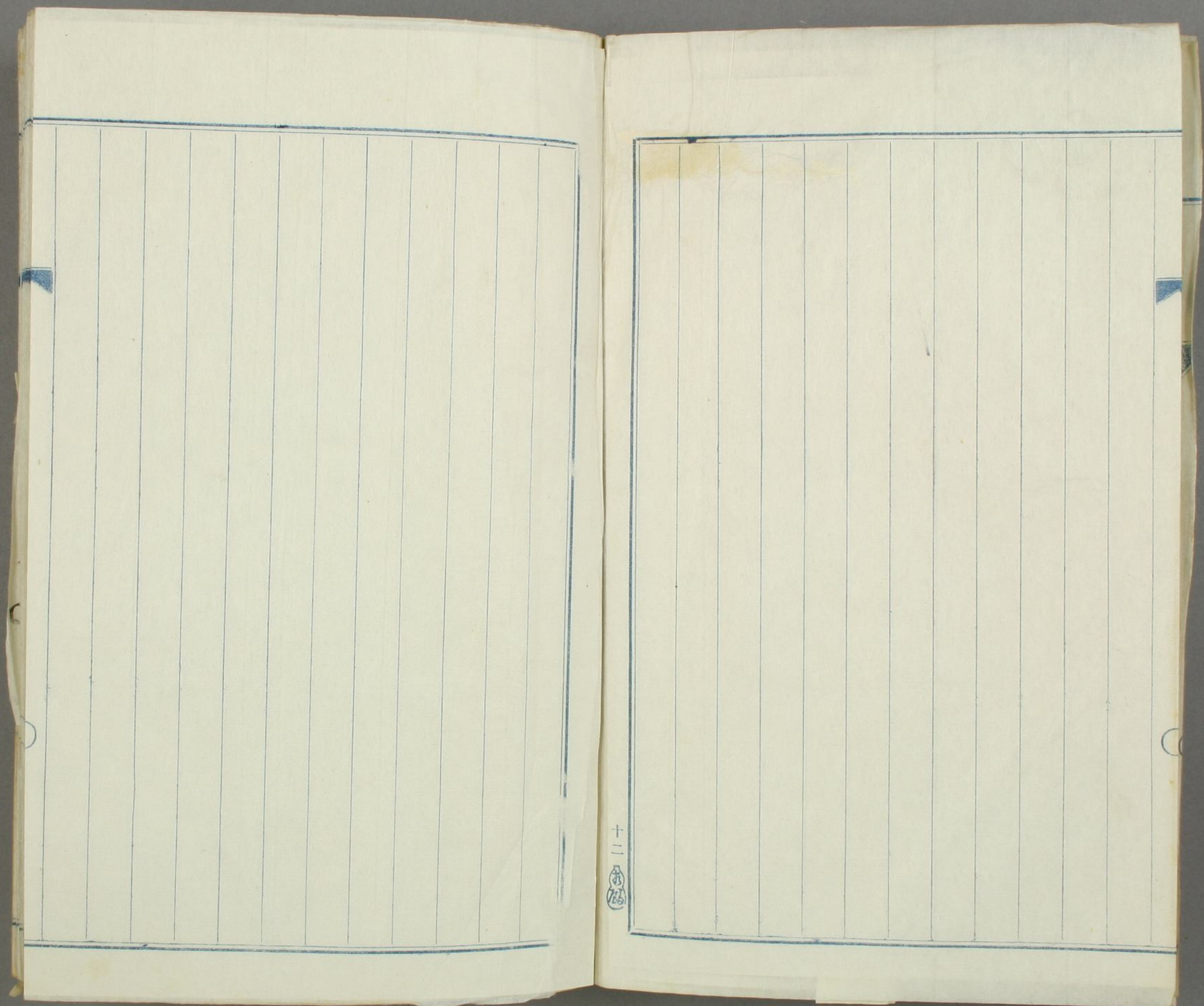
一 教本耶馬溪岩路

一 以て以て畫心を許し以て画

一 滋龍梅島

一 余の耶馬溪評

口 款三木之申ありて年茶典の形印刷配布する
小倉将軍の邸に依りていふにいふぬるをよ



十二



○室原早尾に遺物を掘りて後、物と山陽の文海
あり、山陽の文海を物と、山陽の文海の材料、山陽の文海
と云ふ事

從山陽先生相傳於三樹皮

園未全鋤宅未移、來ぬある酒、山陽先生
餘後、山陽先生の徳也、把著、山陽先生、山陽先生

山陽三樹皮を云ふ事、山陽先生の時、山陽先生、山陽先生
の云々、山陽先生の先を嘗て、山陽先生、山陽先生
著、山陽先生、山陽先生

書曰、同元玄、山陽先生、山陽先生

江雪故所、山陽先生、山陽先生、山陽先生、山陽先生
節、山陽先生、山陽先生、山陽先生、山陽先生
無事、山陽先生、山陽先生、山陽先生、山陽先生
不思、山陽先生、山陽先生、山陽先生、山陽先生
身、山陽先生、山陽先生、山陽先生、山陽先生
滿襟、山陽先生、山陽先生、山陽先生、山陽先生

橋是之夫之傷後之桂けり山陽の傷留不し此唱和
の時山陽旅中と見えたり 時從蘇縣仙雪裡候
とあるを以て足んば前〇元支方へ各し等ら
し、節庵山陽を蘇東後へ比す、當時在彼と
比し、節庵のいさゝ節庵のよまあそむる歎
節庵之山陽へ陪し、中五筋を越り、
見え左の敷留を其傍息を傳ふよまそむる
途上河東の唱和を以て味あり

十月上潮從山陽先生赴廣島途上

句二首

雨歇泥終滑山陽先生 霜深葉老黃 雁影隔
林犬吠山宅傍 與長、熟語程長 先生

曉松のつる葉赤葉、思の行未終 此 櫻樹也斜
陽先生

山路喜逢坦 此 帰心慶得時 峰巒如有行
先生 洞水似隨人 夕日の打衣 此 人煙簇海
城 為知素梓 此 先生 昔聊受差 輕此
宛ハ然 河東合心之畫 途上の光景 見ると如

舟泊猫四つ岡山陽先生お歌也

柔梅且停猫子関 帰心此 此 覺差 河東
潮衣帆程 此 氣儘指 此 帆入 此 山

送先生東上屯神道途中一聯句

醉中揮毫者 先生 慈理程 行壯衣 程遠 預隨

轡の伴別常共臺、柳枯提較、生漢
合の偏卡斜照、驛亭、吹烟横、茶蒼
生

皆山陽、瀬如、道中、記、とうらぶ

是山陽、生、内、跋、み、心

柳亭、送、別、獨、行、何、歎、林、梢、口、已、傾、雨、亦、印
他、高、瀬、水、毎、々、お、嘆、所、流、都、う

山陽の、何、ん、行、く、と、ま、う、ん、を、お、う、す、柳、亭、と
伏、石、の、物、志、し

山陽、生、宅、堂、木、屏

秋、入、東、園、在、粟、貴、侍、君、沿、側、比、祿、能、十、年
治、産、高、松、石、向、我、仍、分、四、古、香

その、山、陽、の、庭、に、某、葉、の、木、屏、あ、る
と、知、り、得、た、る、去、年、某、ん、山、陽、の、あ、る、を、終、り、て、終、り、共
の、庭、に、記、す、而、し、と、葉、を、樹、木、に、着、く、る、所、の
さ、ら、り、し、木、屏、や、某、葉、や、皆、庭、中、の、よ、う、と、地
の、福、を、と、受、け、る

節、毫、七、山、陽、日、に、何、る、し、一、年、某、の、算、を、ま、う、算、首
何、年、礼、と、出、う、け、せ、に、福、を、受、け、ら、し、時、の、時、あり

戊子元、侍、在、山、陽、生

鏡、鏡、陪、君、の、あ、敷、算、升、君、堂、辛、盤、陪、君、在
房、蘇、陪、君、の、あ、敷、算、升、君、堂、辛、盤、陪、君、在
之、念、を、香、獨、有、如、陟、岵、章、何、知、千、里、の
亦、如、在、家、心、用、五、齊、兄、弟、以、恩、如、親、長、國、祭

相笑娛、昔嘗聞之、案傍、家中、若少、此、離、安、可、忘、此、記、有、可、尺、也、寄、河、原、
昂、尾、之、山、陽、宅、に、内、子、格、を、し、富、を、下、り、し、使、者、
備、し、流、石、に、陰、夜、も、毛、の、こ、し、け、を、と、見、る、ま、然、る、ま、
似、多、い、保、し、流、石、に、陰、夜、も、物、を、許、さ、て、山、陽、方、に、右、
し、り、と、之、内、の、山、陽、と、家、故、の、人、に、似、す、由、実、に、
マ、リ、居、る、と、出、生、を、家、に、思、ひ、こ、ま、ら、し、か、如、し、川、水、
中、の、内、子、の、（？）と、家、を、危、く、あ、る、ま、を、誰、か、
に、余、未、以、致、へ、す、実、を、研、究、つ、の、題、と、す、

守歳於三樹家宛

四、頭、重、海、志、重、く、難、忘、仰、同、臘、臘、漢、家、
園、空、寒、清、三、益、栢、實、山、才、動、五、更、鐘、氣、

游、每、無、火、久、隔、海、長、去、憑、以、友、空、結、語、誰、語、
獨、守、歲、多、君、一、夕、許、陪、從、

節、夜、何、に、陪、し、し、西、鶴、旅、を、共、し、一、掃、未、旅、中、の、夕、
と、言、ふ、前、の、旅、巾、の、福、の、終、に、報、ふ、べ、し、

既晴有感

吾、の、侍、與、也、誘、我、に、何、輝、上、路、殊、不、忘、東、風、
未、未、移、先、夕、殘、雪、舌、既、香、晚、梅、枝、脩、
程、多、古、迹、具、已、入、秋、懷、日、斜、波、氣、鬱、暮、雨、
晴、田、村、祠、陪、の、村、衣、酒、傳、亦、途、上、の、詞、子、
不、憚、炊、飯、杖、不、替、離、双、鞋、脚、力、健、句、餘、
出、不、夜、侍、生、伴、帳、下、不、如、行、從、の、妮、如、銀、
藥、功、未、必、試、戶、時、

山陽の舞あつしつてあつたにまきりつて道に
原七つさう雅義を感しにむかひつて
親友の原の跡をたゞるに
七つさうさうさうに
時客をたし七つさうに
あつたに
山陽の舞あつしつてあつたに

春架居士 蕉池菅石跋
睡庵主人 家有一盆栽名曰蕉池菅石
注及次及予凡此類多矣余不甚解
并教予馬也副其意之語乎因謂友人
先河頼翁 當同好者之辭 極為妙音 後合

あ在 僅綴片言復字多矣裁増矣
あ在 僅綴片言復字多矣裁増矣
あ在 僅綴片言復字多矣裁増矣
あ在 僅綴片言復字多矣裁増矣
あ在 僅綴片言復字多矣裁増矣

山陽の舞あつしつてあつたに
原七つさう雅義を感しにむかひつて
親友の原の跡をたゞるに
七つさうさうさうに
時客をたし七つさうに
あつたに
山陽の舞あつしつてあつたに

小原氏招紙見所又盤世一小念、念者為元
河山易先生、字不曉、因有懷四語、偶作以
似合初支、奉先一案、見此、日、十月十日
下柏是、會、秋、味、新、憶、陪、高、士、飽、炮、燭、草
香、柿、熟、霜、深、候、我、及、未、游、朱、在、却

山陽の山紫、亦、如、霞、福、井、の、醫、術、其、の、手、に、帰、し
庭、園、母、屋、撰、抄、夏、日、り、山、陽、乃、位、の、時、を、同、し、
く、唯、此、修、史、の、二、三、卷、屋、に、傳、り、喜、を、面、目、を
受、め、ず、即、是、也、と、詠、の、一、句、に、云、く

九月念の夜、飲、于、安、房、氏、三、柑、亦、喜、う、係
先、河、田、宅、余、亦、當、宿、此、塾、亦、及
夜、水、瀧、渡、山、月、影、停、杯、追、思、空、無、因、此、事、

比、景、今、如、昔、只、欠、前、年、舊、主人
節、庵、山、陽、の、人、中、、即、是、也、の、殿、を、一、、人、、廿、七、大、四
二、訣、一、、八、十、、算、を、、迎、へ、、と、、漸、く、、乃、ち、、山、陽、、延、後、、亦、十
三、年、間、存、余、も、、一、、也、、當、り、、と、、房、、乃、、に、、頼、氏、を、、訪
ふ、其、抄、を、一、、悦、、し、、山、海、の、、心、、を、、長、、辰、、一、、人、、の、、當
つ、と、、河、、に、、注、、つ、、と、、三、十、年、前、、此、家、を、、訪、、し、、る、を、、追、、憶、
と、思、

壬子臘月初九、入、訪、房、乃、頼、氏、令、大、儒、人、梅
颯、君、忌、辰、忽、憶、余、陪、先、河、至、曾、蒙、其
優、待、臨、今、如、三、十、年、矣、先、河、其、言、皆、已
不在、不、勝、今、昔、之、感、賦、一、絶
沽、酒、罄、飲、陶、母、筵、論、文、促、膝、大、蘇、前、回、顧、不

佐野の如雪、感田巳後三十年

市中の大蔵と其の在りし也

弟尾の遺行の如く、三十四年刊すも亦也
首巻に冒頭、三行と代く山陽に尺牘
と指す

代名

龍淵沼の如く、大と上りし
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、

名、龍字、五湖、
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、

表

其の如く

其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、
其の如く、抑も其の如く、



案内された。様子を見ると如何にも敷奇を極めてある。我輩は未だ昔山陽先生の住んだ宅は知らないが、恐く此家には勝る程のものでなからうと想像した。

○それから我輩は、貴君の先代（支峰、龍三氏は養子）は嘗て我郷國へ遊に來られたとがあつたが、其際には自分の宅にも暫く淹留されて、自分の父の若い時分敷を受けたと杯もあると話した處が、向ふても開傳へられて居たと見え、自分も兼々承知して居つたと云ふ様な譯で、それから新は山陽の舊居山紫水明莊に移つた。我輩は嘗て其山紫水明莊が、久く或醫師の手に落ちて居ると聞いて居たので、アレは今猶他の手にありますかと尋ねた處が、主人は、イヤ幸にして近頃買戻しましたと

の答であつた。我輩は之を聞いて、恰も自分の家を買戻したかの如く、喜び禁ずる能はず、幾度か頼家の爲めに祝した。之は我輩平素の持論として、山陽の故宅は是非頼家の手に歸せしむべきものだと思ふて居たので、實に誠意を以て祝した譯である。そこで熱々思ふに、是位の家に住んで居る人だから、有福と見へる、買戻す力がある筈だと會得した。

○山陽先生の筆になつたものやら、舊い遺什杯を見たいと云つた處が、主人の曰く、實は何も御覽に入れものがない、維新の際禁裏近く住居をして居たので、蛤御門の騒に兵隊に罹つて、殆ど全部を焚いて終つた。山陽の日本外史の草稿を初め其他の書物杯は、養父が大切に纏めて唐櫃の中へ入れてあつたのに、夫を取出す暇もなく纏めた儘で焚いて終つたから、猶更残念だ。後に至り却て纏めずに置いたら多

少残つて居たかも知れぬと思ふた位である。ソレで今在る僅かものは、其以前に他に貸せてあつたのを、災後返したと云ふ様なものと二三點に過ぎない、との挨拶であつた。が、其ても種々のものを示された。

○見せられた中に最も貴いと思はれたものは、八大家の龍頭に山陽が評點を入れた原本で、之は久しく秋月種樹氏の珍蔵に係つて居たものを、支峰か生前切に懇望して貰つたと云ふとてある。此本を見ると各冊に「大舍」と云ふ印が捺してある。大舍は本願寺の坊さんで、山陽と親交があつた雲華上人である。それで版オには略してあるが、その評點の由来は巻尾に朱書で書いて



雙魚堂主人談



雙魚堂主人談

我輩は山陽翁を有て居るから、從來でも非々話したが、此頃偶々京都へ行き、多年の志にて今迄果すとを得ざりし山陽先生の跡、即ち頼支峰の宅を尋ねた。其宅は小堀袋町と云ふ處にある。現今の主人は頼龍三と謂ひ、年の頃五十五六位で、小柄で、あるけれども仲々立派な人だ。自分は前に申込んであつた爲め、向ふも待構へて居つた様子で、イキナリ座敷へ

ある。其仔細は斯うだ。或時大合が何處かへ旅行をするとして山陽の處へやつて来て、扱他は是から旅行をするが、そうすると暫くは歸つて来ない、就ては前も酒計り飲んで居ずに、此本に思當つたとしても一寸いゝ書いて見なさい、と云つた様のとて、放り出して去つたのが此八大家である。ソコで山陽は、其後夜分眠られぬ折なすに之を讀みながら、興到る毎に龍頭に書きつけたのがソモソの發端で、終に巻尾に迄達し、世に公にされるに至つたものである。即ち原本には此山陽が書いてあり、且つ大合の取持の書であつたことが明かであるから、感興措く能はざるものである。更に龍頭の評語を見るに、或は朱或は墨にて縦横に書いてあるが、塗抹とか書加へとか云ふ様な尾は一つもない、流石に偉いものだ。



○それから種々のものを書抜いた雑抄例へば『正續文章軌範』、『唐宋文抄』、『清朝雜抄』の如き類のものが凡そ千枚計りある。何れも山陽の青年時代の筆と見ゆるが、驚いたのは紙の裏表に殆ど餘白のない程書いてあるとだ。山陽の如き豪放の人でも、學窓時代には斯う云ふとも努めたものだと思はれる。○それに矢張十六七歳の、極若い時分に書いたものと異しく太宰の『經濟錄』、徂徠の『政談』等の評を書いたものもある。之等の書は當時の流行物であつたと見え、白紙に本文を略して上部の處へ一寸いゝ評が書いてある、兎に角斯んな若い時分に既に經世の考へ

があつたとも疑はれて面白う。○また『宋詩抄』、『版本孟子』もあつたが、之が山陽の手澤本で何々の書入がある。山陽著『古文典』は四冊あるが幸に之は無事で、其用の原稿の儘で残して居るのが嬉しい。○次に山陽の家に限つてあるべきもので、非常に貴くまた面白く感じたものがあつた。それは『論孟加奈書』と云ふ袋である。此袋の上書は支峰が若い時分書いたもので、其傍に『母上啓制手書』と書いてある。袋の中は判紙を横に折つた帳面が七八冊で、原文一致休て論語孟子の講義が筆記してある。之は山陽先生が兒童を集めて講義をしたのを、次の間て妻君が筆記したもので、後で小兒にものを問はれた時に、分らぬては困ると云ふ處から夫の講義を餘所ながら書留めた譯である。山陽の室は『りる』と云ひ、其筆の跡は山陽の母の梅鹿の

開

妨離題 余唯々畧不經意而已而燈下醉時餘時出解誦或有會心欣然授筆下數卷之後不覺成蟻聚赬桌是以前中疎於後々未又加業丁前使粗相偏蓋自庚辰之冬至癸未之春竣焉雖不速之贊敢月旦古作者不免僭妄之笑乎如後人觀場後人嗟嘆者經此中日苦者自能知之

山陽外史

ある。銅器のまは一尺七寸の刻字がある。之は長崎から歸し來り愛玩した物の蛤御門の兵隊に罹り支有に歸した時に、幸に灰のされたもの、既に半分程で居るので、二代藏六に其た。處が藏六が受こんだ儘ぬ。遂に二十年目に漸く出が現在のものである。それで見ると藏六は之を補修すの苦心をなし、十數年を費したとのとである。兎に角董の存するは、唯此一あや々大切なものだ。山陽の遺印。之は世上に印、我々の眼にも熟して居際のものを見ると、また

ある。其仔細は斯うだ。或時大舎が何處かへ旅行をするとして山陽の處へやつて来て、扱扱は是から旅行をするが、そうすると暫くは歸つて来ない、就てはお前も酒計り飲んで居ずに、此本に思當つたとも一寸いゝ書いて見なさい、と云つた様のとて、放り出して去つたのが此八大家である。ソコで山陽は、其後夜分眠られぬ折なすに之を讀みながら、興到る毎に龍頭に書きつけたのがソモソの發端で、終に巻尾に迄達し、世に公にされるに至つたものである。即ち原本には此山陽が書いてあり、且つ大舎の取持の書であつたとが明かであるから、感興措く能はざるものである。更に龍頭の評語を見るに、或は宋或は墨にて縦横に書いてあるが、塗抹とか書加へとか云ふ様な見は一つもない、流行と云ふ



雙魚堂主人談
 ◎それから種々のものを書かれた雑抄例へば「正續文章軌範」、「唐宋文抄」、「清朝雜抄」の如き類のものが凡そ千枚計りある。何れも山陽の青年時代の筆と見るが、驚いたのは紙の裏表に殆ど餘白のない程書いてあるとだ。山陽の如き豪放の人でも、學窓時代には斯う云ふとも努めたものだと思ひ感じた。◎それに矢張十六七歳の、極若い時に書いたものと異しく太宰の「經濟錄」、徂徠の「政談」等の評を書いたものもある。之等の書は當時の流行物であつたと見え、白紙に本文を略して上部

があつたとも疑はれて面白。◎また「宋詩抄」、「版本孟子」もあつたが、之が山陽の手澤本で種々の書入がある。山陽著「古文典義」は四冊あるが幸に之は無事で、其用の原稿の儘で残して居るのが嬉しい。◎次に山陽の家に限つてあるべきもので、非常に貴くまた面白く感じたものがあつた。それは「論孟加添書」と云ふ袋である。此袋の上書は支峰が若い時分書いたもので、其傍に「母上啓御手書」と書いてある。袋の中は判紙を横に折つた帳面が七八冊で、原文一致休て論語孟子の講義が筆記してある。之は山陽先生が兒童を集めて講釋をしたのを、次の間で妻君が筆記したもので、後で小兒にものを問はれた時に、分らぬでは困ると云ふ處から夫の講釋を餘所ながら書附めを尋ねてある。山陽の梅鹿の

上従子翻々聞々々々之次有所見不妨離題余唯々畧不經意而已而燈下解讀餘時出爾誦或有會心欣然授筆數卷之後不覺成蟻聚赬集是以前疎於後々未又加業丁前使粗相偏蓋自庚辰之冬至癸未之春竣焉雖不逮之贊敢月旦古作者不免僭妄之笑乎如矮人觀場後人嗟嘆者經此中甘苦者自然知之

山陽外史

てある。銅器のまは一尺のオ體を龍が取巻いたもの「結七年」の刻字がある。之は長崎から齋し來り愛玩した例の蛤御門の兵隊に罹り支出されたもの、既に半分程して居るので、二代藏六に其した。處が藏六が受こんだ儘さぬ。遂に二十年目に漸く出のが現在のものである。それ

同時代の古錢を蒐め、之をしたとのとである。兎に角骨董の存するは、唯此一あ仲々大切なものだ。山陽の遺印、之は世上に印て、我々の眼にも熟して居實際のものを見ると、また

ある。其行細は斯うだ。或時大舎が何處かへ旅行をするとして山陽の處へやつて来て、扱は是から旅行をするが、そうすると暫くは歸つて来ない、就てはお前も酒計り飲んで居ずに、此本に思當つたとも一寸いゝ書いて見なさい、と云つた様のとて、放り出して去つたのが此八大家である。ソコで山陽は、其後夜分眠られぬ折なすに之を讀みながら、興到る毎に龍頭に書きつけたのがソモソの發端で、終に巻尾に迄達し、世に公にされるに至つたものである。即ち原本には此山陽が書いたとあり、且つ大舎の取持の書であつたことが明かであるから、感興措く能はざるものである。更に龍頭の評語を見るに、或は宋或は墨にて縦横に書いてあるが、塗抹とか書加へとか云ふ様な見は一つもない、流石に偉いものだ。



趣味談叢

雙魚堂主人談
○それから種々のものを書かれた雑抄例へば「正續文章軌範」、「唐宋文抄」、「清朝雜抄」の如き類のものが凡そ千枚計りある。何れも山陽の青年時代の筆と見るが、驚いたのは紙の裏表に殆ど餘白のない程書いてあるとだ。山陽の如き豪放の人でも、學窓時代には斯う云ふとも努めたものだと思ふ。感ぜられた。○それに矢張十六七歳の、極若い時に書いたものと異しく太宰の「經濟錄」、徂徠の「政談」等の評を書いたものもある。之等の書は當時の流行物であつたと見え、白紙に本文を略して上部の處へ一寸いゝ評が書いてある、兎に角斯んな若い時分に既に經世の考へ

併し如何にも達者なもので兎に角論議の凡てに亘つて書いて置く處が感ずべきである。何分列卒の間で詳く讀んで見なかつたが、若之と熟讀したら、山陽の言葉遣ひ杯も分らうと思ふ。兎に角頼家には大切なものである。○それから山陽の書いた手本が二つある。一つは「日本國畫」で、美濃紙を縦にして二字宛大字を書いてあるが、如何にも美事に出来て居る。之は三樹に書いてやつたものと見えて「子春」の印がボツ／＼捺してある。三樹の葉であらうが、中に人形杯をかくてあつたりまた六ヶ敷い處などには、焦つたがつて墨を塗探つた處も見えたりして頗る面白い。今一つは、いろはの假名の手本で、支峰に與へたものらしい。之は横巻になつて居る。

趣味談叢

雙魚堂主人談
○最後に見た中で、我輩が涎を流して堪へられぬと思つたは、山陽先生の草稿を蒐めて大巻としたもので、大抵縦一尺計りの一定の唐紙に書いたもので凡そ十四五枚計りもある。之は何れも立派なもので、特に先生が力を注いだものだ。即ち
節女阿正傳。續八大家支讀本序。象隱記。茶山遺稿序。春水先生遺稿序。經典殺名考序。星巖西征詩序。續米庵墨談序。羽二重評書犬飼翁序。等が重なるものだ、それで見ると、縦横に改竄の跡が見えて、如何にも苦心された處が偲ばれる。此巻け今に於ても恍然眼にあるやうだ。○山陽の文房具、骨董杯に遺つて居るものがないかと思ふたが、矢張火災の時焚かれて終つて、残るは僅かに遺

があつたとも思はれて面白い。○また「宋詩抄」、「版本孟子」もあつたが、之が山陽の手澤本で何々の書入がある。山陽著「古文典義」は四冊あるが幸に之は無事で、其用の原稿の儘で残つて居るのが嬉しい。○次に山陽の家に限つてあるべきもので、非常に貴くまた面白く感じたものがあつた。それは「論孟加添書」と云ふ袋である。此袋の上書は支峰が若い時分書いたもので、其傍に「母上御手書」と書いてある。袋の中は判紙を横に折つた帳面が七八冊で、原文一致休て論語孟子の訓義が筆記してある。之は山陽先生が兒童を集めて講釋をしたのを、次の間で妻君が筆記したもので、後で小兒にもを問はれた時に、分らぬでは困ると云ふ處から夫の講釋を餘所ながら書留めた譯である。山陽の室は「り多」と云ひ、其筆の跡は山陽の母の梅屋の

開

懷抱一尊酒傾論
談方與海宇生東蓬
果幸在坊美東玉石肥
自

右牽連 市河本因共
鴨河詩款

昔情病魔去句佳也
系正取吳宵寐法常也日
斜 佳篇猶平錦負
供際以也 無奈茲分手

逢期方進

右送 市河本因共
任酒款

甲子重九 原又轉遠

一段の興味があつて、殊に一顧も減せずして在る處が嬉しい。印箋は唐物で三段箱となり、中に七八十顆を収めてある。それで印材の如きも、當時の常態として古備前無紐のものが多くにも拘はらず、山陽は文房の趣味か饒かであつた爲め、円な粗材はなく、流石に時代相應に良いものを集めてある。○以上は只匆卒の瞥見に過ぎぬが、兎も角是にて宿昔の希望を果し、半日の情興を盡した。(録味記)

よしや錯雜して居ても直に見付かる。東京の如き大都會に於ては之れが緊要の問題である。現在大なる都會でも追々膨大になり行く事は知れ切つた事であるから矢張將來は藩地改良の運命に接する。◎此問題は獨、東京にのみ限るべき問題に非ずして、苟しも大都會である處は、追々此改良の必要を待たねばならぬやうになる。(完、在京記者)

蟹泡録 (續)

市島謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽 (一)

此頃一ヶ月ばかり關西の方を旅行して來て、再び近々に旅行に出掛けるわけ、其咄嗟の間だから、格別の話も無いが、折角來られたのだから、遊んで居る間に聊か見聞した位の事をお話して、責を塞がう。

▲子の私淑せる頼山陽
▲自分は幼少の時から、多少頼山陽に私

淑して居るので、聊か山陽の事跡を調べたし、其詩文集に就て、興味を以て研究したことがあつた。今に及んでも時々頼山陽の事に耳を傾けたり、足を運んで其遺物を見る氣が起るのである。
▲で何時か一遍は頼山陽が非常に親しくして、親類同然の關係を結んで居た小野家を訪ねて見て、山陽の殘した物や、其他の事蹟を見たり、聞いたたりし度いものであると考へて居た。

▲所が今回の關西旅行に就て、岡山縣迄幸ひ出掛けたから、此序に何か折があるならば、小野家を訪ねる機會を得たいものであると思ふて居た。

▲するに幸ひにも小野家の有る村へ出掛ける事になつた。實は小野は備中の人と聞いて居たが、備中の何村であるかは知らないのである。其れが偶然用が有つて、其村に行つたのは奇遇と云つて宜しい。

▲詩人田邊碧堂氏

▲岡山驛から庭瀬(犬養木堂の郷里)倉敷の二驛を経て、玉島の驛に下りて、十町ばかり歩くと、長尾と云ふ村がある。其

處には以前自分が衆議院に居た時代の同僚である田邊碧堂(爲三郎)氏が居る。自分分は其れを訪問する事になつた。此人は岡山縣の有名な詩人である。
▲碧堂氏は折悪しく不在であつた。止むを得ず數時間待合せねばならぬ。其間自分分はあちらこちらを徘徊すると、田邊家を去る事四五十間の距離に大きな立派な豪家があり、しかも其豪家が二軒とも並べて「小野」家の表札である。一つの家の表札は婦人の名である。一つの家の表札には「小野映太郎」としてある。自分分は其家の前に立ち止つて、之れが自分が嘗て訪ねたいと思つて居た小野家では無いかしらと考へた。

▲頼山陽と小野家
▲頼山陽の屢々往來して居た、小野家は「小野泉藏」と云ふ人であるが、此兩家の小野の何れかど、其「泉藏」の家に違ひ無

からう。豫ねて其村を知らなかつた自分が偶然に碧堂を訪ねて、其れが同村で有つたと云ふ事は甚だ意外で、又愉快に感じた。(東京特派員記)

蟹泡録

市島謙吉氏談

(續)

備中に於ける

頼山陽

(二)

▲どうせ一度は小野家を訪問して、頼山陽の遺跡遺墨を見たいものであると思つて居た自分は、小野家を訪ねるには誰かの紹介を得なければならぬと考へて居たのであるから、若し其れが他村であれば、紹介を得るにも多少の困難があるべきだのに、田邊碧堂氏と同村であるので其紹介を得るにも亦容易であるを知つて自分は非常に其好都合なのを悦んだ。

備中に於ける

頼山陽

(三)

▲凡そ一郷の中で、二つの豪家が並び立つと、兎角互に拮抗の態度を取るものである。片方の悦ぶ所は、片方の悦ばぬ所である。況んや小野家と田邊家とは文武其趣味を異にして居るので、従つて頼山陽は茶山の系統を延いて、小野家に頼つた譯である。つまり同じ長尾村へ山陽は來ても、始終小野家に宿泊して、田邊家には交際が疎であつた。

▲勿論田邊家も山陽の學問を崇拜して居たには違ひは無い。田邊家に映碧堂と云ふ山陽の書いた額がある。(今の主人爲三郎氏が號を碧堂と云ふのも、此映碧堂の下の字を取つたわけである) 其時の主人が山陽に頼んで、堂號を撰んで貰つた時の額である。之れを見ても田邊家でも山陽を崇敬して居たことが明白。

と自分が云ふと、碧堂曰く、

「小野家の當主人映太郎と云ふ者は、私と同窓の友で、しかも同年である。子供の時から兄弟もたゞならざる交際さへあり、極めて懇親の仲であるから、紹介なきは極めて容易な事だ」

と直に受け込んで呉れた。其れから猶ほ碧堂は語つて云ふには、

「全体玉島村は(川田壺江の起つた村)昔から小野家と田邊家が互に豪家を以て争つた所で、田邊家は山陽時代に於ける先代と云ふ者は武の趣味を以て立つた者で、學問は朱子學をやつた。其れだから極めて嚴肅な人である。之れに反して小野家と云ふのは文を専らにして、山陽時代の小野家の主人本太郎と云ふ人は、(務も云ふ歴史趣味)を持つて居り、研究も深かつた。漢學の力も有つたが、寧ろ國語の方に造詣が深かつて、歌を能くした。小野泉藏と云ふ人は即ち其本太郎の叔父さんに當る……」

▲所が山陽は磊落豪放な人であつて、小野家に来て居ても、非常の美酒で、酔後椽側に出て放水する、或は下婢に戯むると云ふやうな山陽特色の振舞がある爲に傍に目にし耳にした田邊は其失態を咎めて、幾ら學問があつても、あんな行狀のある人の書は珍にするに足らない」と瓜彈きをして、あまり書かせなかつた云ふことで、山陽は田邊家とは遠かる、従つて田邊家には山陽の物は残つて居らないのである。

▲所が田邊碧堂氏は語をついで、「妙なもので、時代は一變して、私は文を専らにし、小野映太郎君は獸獵なんぎをやる。文をたしなんだ家の者が武を専らにし、武を専らにした家の私に幼少の時分から文を専らにして居る。昔と今日とでは小野家と田邊家とは轉倒をして居る」

と語られた。▲序に猶ほ木下幸文は隠れも無い歌詠で國學者であるが、其人の話も出た。其人

云ふ記文を書いて、其れに開いて居る人である。「招月亭」云ふのは、山陽遺稿の中の名文である。

「……叔父の泉藏は小野家と別にして家を建てた。此處だ……」

と田邊碧堂君は指をさされた。丁度田邊家の向である。

▲碧堂氏は猶ほ語を繼いで、

「全体小野本太郎と云ふ人は昔茶山の門に入つた事がある。其處で山陽は云ふまでも無く茶山の塾頭をして居たので其因縁からして、山陽は小野家に接近する譯になつたのだ。も一つは小野は歴史趣味を以て居る處から、山陽の史才を愛でた」(東京特派員記)



蟹泡録

市島謙吉氏談

は自分は備中の人であることだけは知つて居たが、何れの人かは知らなかつた。所が碧堂君の語るには、木下こそは小野家の番頭の息子であつて、幼少の頃から歌を詠むの天才があつたので、其處で「此子教ふべし」と云ふところから、香川景樹の門に入らせて、遂に一家をなさしむるに到つたのである。

「其家が即ち其處である」

と碧堂君は指された。丁度碧堂の家の筋向であるが、其家は既に亡びて終つて、其跡だけが今猶ほ存じて居る。

蟹泡録

市島謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽

(四)

▲招月亭と秦川

(附、山陽の潤筆料策)

▲彼れ是れ話をして居る間に、兩小野家へ遣はした使が歸つて来て云ふには、「お向の小野さん(泉蔵氏の跡、今の主人節は支學の才あり、殊に歌を能く讀む)はお留守です」と、御本家の方は矢張御主人は留守だが、奥さんが何か御覧に入れる物を御指定下さらば私が出しますから、御出で下さい」と云ふ特別の挨拶である。是れでも碧堂氏と小野家との懇親なのが分明る。主人が不在でも訪ふ事の出来るのを自分は深く悦んだ。

▲碧堂君は「サー参りませう」と云ふので連れ立って先づ其門を出ると、「ムー、兎も角も是れを御覧なさい」と小野泉蔵の家の側に在る空地に案内した、自分は案内されるに任せて行く、と家の裏に川が流れて居る。其川に臨んだ座敷を碧堂君は指して、「此處が招月亭で御座います」と云ふ。見るに、未だ昔一度も火災にも罹らない、昔其儘になつて居る。川を隔て一望千里の山水を眺める有様は、山陽記文の通り、見晴の好い所であるが

其招月亭と云ふのは、山陽の文章の飾の如く立派の物では爲くして、誠に丈の低い質朴な普通の座敷にして過ぎない。文章の美と實物の質朴とが甚しく懸隔のあるのには一驚を吃した。▲頼山陽の文章の内に引いてある「秦川と云ふ川は即ち其亭の前を流れる川を云ふのである。文章で見ると大變偉さうだが、實は幅の三間か四間位の、飛べば飛び越されさうな川で、本名は「烟川」である。つまり細の用水ぐらゐると云ふことである。兎に角文章に書いてあるものと實物を見るには、始終想像に反する事が幾らもある。併し乍ら其處に面白味がある」と云ふものだ。

▲碧堂君の語すには、「今日は此處の主人が居ないから、甚だ残念だ。實は此川に臨んだ座敷には、山陽の揮毫にかゝる招月亭の記の額が懸つて居るし、其他山陽の書いた色々墨蹟が傳つて居て、君に示したいものもなか／＼澤山ある。中に書面の類に殊に面白い物がある。山陽の死んだ

時に、山陽の細君の梨影が覺束ない假名文で、非常に精細に病中の事を通信致した手紙の如きは、殊は参考となるべきもので、なか／＼面白い。主人が不在の爲に甚だ遺憾である」と

蟹泡録

市島謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽

(附、山陽の潤筆料策)

▲更に連れ立って本家を訪ふた。本家は婦人の名で、今は未亡人が二人居る。映太郎と云ふのは隣家であるが、是れは分家である。併し乍ら本家の方が全く男の絶れた爲め、映太郎と云ふ人が萬端の差配をして居るのである。と云ふやうな譯で自分等は本家へ行つた。

▲碧堂君は幼少の頃から、自分の家の如くにして居るので、自分で案内して本座敷に私を通した。先づ目に觸れたのは山陽の文章の額である。其れには「移山亭の記」と云ふのが書いてある。此記の山陽遺稿の中にある名文である。記憶する。

▲借て移山亭と云ふ事は何う云ふ理由から来たのか、私は記憶して居ない。碧堂君にたゞすゝ、碧堂君は、「先づ是れを見給へ」と云つて、坐敷の戸を開けた。すると古く寂れた庭が現はれ出で、其小高い所に天然石の富士山の恰好に能く似た石が乗つて居る。之れが如何にも人造であるかの如く、如何にも能く富士山に似て居る石である。私は之れを見ながら、成程と感した。碧堂君の云ふには、「此石を主人が得た爲に、山陽に亭名を選ばせて、即ち移山亭と云ふ額が出来たのだ」と云つた。そして猶ほ碧堂君は私の立つて居る椽側を指して、

「此處が恐らく山陽の放尿した所だから」と一笑した。此家も無論火災を経た事のない家である。即ち山陽の遊びに來た其儘である。此家で酒を飲み、此部屋で古今を談じ、大氣焔を吐いたのだらうと想像を浮べると、なか／＼感懐を禁じ得ない趣きがある。

▲兎角來歴のある家に来ると、其坐敷の構造とか、庭の泉石などに就て、其趣味がなか／＼深く感ぜられる。殊に一種故人に就ての聯想の起るものであつて、甚だ面白いものである。▲此移山亭の額を讀んで見ると、此移山亭の主人であつた本太郎の親の櫛翁と云ふ人が近郊を遊んで、此富士に似たる一大石を得たので、是れを非常に愛し、其處で其名を此場所に移し來つて、移山亭の名を附し、山陽に其記を囑したのである。山陽は、「勝石の奇は既に諸名士の題泳備り居れり、余又何をか云はん」と通常の書きぶしを避けた。翁も亦歴史家であるから、

蟹泡録

市島謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽

(附、山陽の潤筆料策)

▲其處で山陽は、古より英雄豪傑が屢々富山を訪ふて、之れを賞観した例を引きて、「此通り皆富士山を賞観して居る、是等の英雄豪傑は禍亂を平け、群雄を鏑する事は誠に意の如く、即ち數國を掃蕩して抜き難き事山の如き者ですら之れに置き代へる事恰も奕棋の如しである。彼等既に此名山を愛する以上は、自分の屋敷に其れを遷し度いと云ふ情がある。

つたに相違無い。しかも其れが出来ないで、千里を歩湯して其處に行き、其れを觀なければならぬ。然るに翁は是等豪傑の爲し能はざるものを、之れを屋敷の中に引き來つて、朝夕坐臥其娛玩を縱にす。云ふやうな具合に、流石は歴史家が歴史家の爲に書た記文だけであつて、例を凡て歴史から取て居る所が面白い。▲自分は幼少の時分に屢々山陽遺稿を讀んだが、其時は格別に興感を感じさなかつたが此文章は今實況に臨み、其故人を追憶して讀んで見ると、始めて其妙味を感ずる。之れが其境にあつて、其れに關係する詩文を讀んで、一種の趣味を感ずる所以である。

を愛したが、其普通俗人等が爲すことと違つて、金の有るに任せて、無暗に御馳走するやうな事はせずに、酒食あるにまかせて、只終日對談して、屢々坐起せず山陽殿に就くの後、五鼓に眠より醒むれば、翁も亦燭を照し、摸索して來り、山陽の枕側に就きて前話を次ぐ。言ふ所凡俗に涉らず、獨和漢の興廢、忠孝節義の跡に於ては、慷慨憐むことを知らず。而して時に難ゆるに諧謔を以てす。翁諱は方、綽號は仲直、通稱は猶吉一である。▲斯様な人である。此傳によつて其人を案するに極めて濃厚質料であつた事が略推はかる事が出来る。此人が放縱なる山陽を迎へて、之れに親しんだと云ふのは益し其才を愛したので有らう。で翁は此行狀書によつても儉素な人で有つた事がわかる。山陽を對遇するにも、必ず有合せの肴で賄つた位のもので有らう。山陽が酔つて亂暴をしたら、或は飲み過ぎたりなさするのを、此氣質の翁が咎めせず、其爲すに任せて、始終陰日向なく親しんだのは能く其才を愛したものと見る。

早稲田大學圖書印

▲其處で全体探翁と云ふ人は如何なる人であるか、此探翁と云ふのは泉藏の兄であつて、山陽が初めに泉藏と同じく親しんだは此人である、此人の傳は矢張山陽遺稿の中に墓碣加一編載つて居る。其れに行狀が書いてある。其れに依ると、「翁は備中の大備西山拙齋の教を受けしもので、相當の學問があつて、非常に客

蟹泡錄

市島謙吉氏談

備中に於ける 賴山陽 (七)

如才なき山陽

▲探翁は、山陽が父の春水を失つた少し前に歿したので、山陽は其後は其嗣子たる本太郎並に探翁の弟たる泉藏と往來を續けたものである。それで探翁と親しん

だ山陽であるから、本太郎と云ふ者に對しては年輩も大分に違つて居たに相違ない。だから恰も門弟に對するが如く隨分我儘を云ふた事であらう。▲斯様な關係から山陽が書き残した所の書畫詩文の類は此家にも泉藏の家にも、無論澤山残つて居る筈であつて、自分は嘗て大坂に於て山陽遺墨の陳列會のあつた節に數百點を見たことがあるが、一番良いものと思つた物は、総て此小野家から出た物であつた。今度は汽車の時間が切迫して居ると、主人の不在と云ふわけで有るから、餘り多くを見る事が出来なかつたが、併し流石に十點ばかり見た物は悉く逸品で迎も他に於て見る事が出来ない物であつた。▲何うしても斯様の親密の關係があつて何か或特別の場合に興到り、感興に乗つて書いたものは實に言ふに云はれない趣があるものである。潤筆料なんぞ取つて書いたものとは同日に論ずる事は出来ない。自分は隨分山陽の作を多く見て居る

蟹泡録

市島謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽

(附、山陽の潤筆料策)

山陽の手紙

其手紙に依るに、何時もの如く奔放の筆を以て、例の大見識を振り廻す文體であるが、流石に此家に與へたものは、其奔放の筆を時々曲けて、大層偉さうの事を一行書くに、直ぐに折れて「これは他人に云ふことにて、貴家に對しては……」云々と避ける云ふ如き筆致で、如何にも如才なく、人をそらさない書き振りは中々其豪放の學者なんぞの遠く爲し得ない所である。

前にも云つた通り、樗翁云ふ人は儉素質朴の人で、山陽に向つて「酒をつしめよ」と始終勸告もしたで有う「無駄に錢を使ふな」と意見もなしたで有らう「潤筆はなるだけ自分にお預けなさい。さすれば自分が利殖して上げる」なご云ふことも言つたで有らう。其れが皆山陽の手紙に残つて居る。

近頃は酒を一切やめて、何處かへ遊びに行く時なごも酒を携へる代りに、茶籠を携へて行き、又祇園なごへも行かず、近來はタマ主義である。なんごもやつて居る所もある。(ナニ嘘の皮サ)潤筆料の利殖なごの事も明に書いてある。樗翁の病氣の保養をすゝめる件にも、「ごうぞ御自愛を願ふ。獨貴家の爲に之れを願ふのみに非ず、裏の爲にも之れを願ふ」云ふやうな事をも書いたり、なか／＼先生、先きの呼吸を飲み込んで、其歡心を失はないやうに、其氣をそらさないやうである。

つもりであるが、先づ面白いと感ずるものは、何うしても此家の遺品を第一流に置かねばならぬと思ふ。

是等の遺品を見て、初めて山陽の人となりがわかる。是れが丁度産れた家を訪ふて、初めて其人を知ると同じやうな趣がある。特に山陽を知るの材料云ふものは、其家に傳はつて居る口碑並に其家に與へた手紙に依つて判することが出来るのである。不幸にして主人が不在の爲に山陽に就て傳はつて居る事蹟は聞くことが出来なかつたが、其存して居る手紙を見ると山陽の人となり如何にも明々地とわかる。

世間では山陽を豪放一點派の學者と見るものが多いが、全体夫れは間違つて居るのであつて、中々世才に富んだ小心の人であつた事が、幾通かの手紙に依つて見ることが出来る。其證據となる手紙は遂ひ時間が無くて、一通も寫すことが出来なかつたので、其だ残念に思つたが、先づ一通り書いてある調子を云ふと、斯うである。

うに筆を廻して居るなごは、迎も隅には置けない代物である事がわかる。山陽を研究するには此邊に存在する手紙を材料とせねば、其面目は分明らないと云ふ事を感じた。

一体昔の文人云ふ者は潤筆の収入を以て糊口するもので有ることは論を待たない。其處を表面は偉さうな事を云ふて居るのであるが、けれども實は此爲に始終苦心をして居るものである。山陽も亦之れが爲に大に苦心して居た。しかもなか／＼利口の案を立てた跡が見ゆるのである。

蟹泡録

市島謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽

(附、山陽の潤筆料策)

潤筆料の苦心

備中は茶山の塾のある所で、山陽には縁故の深い國だが、實は此邊を屢々漫遊したのは、一つは郷里廣島へ歸る途中でもあるからだけれども、實は實は潤筆料を得るの此邊がステーションで有つたに違ひない。さうしても文人が潤筆を得るには足溜を澤山拵はなければならぬ。其處で山陽は備中に遊んで小野家を足溜にした。又備後に於ては今も榮えて居る橋本云ふ家を足溜にしたのである。

勿論小野家は農家で有つたから、然らざるを得なかつたに違ひ無い。之れに反して備後の尾の道の橋本家に到つては、之れは商家であるから、餘程小野家は違つて、盛んに潤筆料を出して、盛んに山陽に書かせたものだ。又山陽の放縱無頼を制するどころか、寧ろ放縱を爲すにまかせた云ふやうな行き振りであつたのである。だから何方から云へば、山陽は金を得る側からは寧ろ橋本に重きを措いたかも知れない。

併しながら文學の友としては無論小野の方であつた。斯様な次第であるから、小野の方は偶然に書いたものが多く残つて居る、あまり目ほしいものは無い。之に反して橋本家に残つて居る物は、自

分は未だ見ないが、山陽一代の傑作とも云ふ部類の物が多くある。

蟹泡録

市島 謙吉氏談

備中に於ける

頼山陽

(十)

附、山陽の潤筆料策

潤筆料の運動者

▲小田の岡云ふ家にも、山陽は暫く停つて居たから、書いたものが一時は随分澤山あつた。所が其相續人が何か感ずるところがあつた見えて、山陽の遺墨を一括して火中に投じた云ふことで、今は何んにも残つて居らない云ふことである。兎に角斯様なわけで、山陽はなかく利口に其人を撰び、代理店を定めたものである。

▲ところが猶ほ其れに加へて、山陽は一

種の潤筆料を得る運動者とも云ふべき者を設けて居た。其れは名高い書家であつて、浦上春琴云ふのである。是れも備中の人であるが、山陽は非常に此人を愛した。愛した云ふのが潤筆料を得る運動者に利用せんが爲なんだらう。

▲其人の詩文なんぞは、山陽は餘程能く骨を折つて直してやつた。つまり春琴と山陽とは此點に於て師弟の關係が結ばれて居たわけである。所で春琴は畫家としては附近に名の知られた男であるから、春琴が山陽の廣告に振れ廻れば、澤山の潤筆料を得られる云ふ次第で、山陽は此人を使つて、大に提灯を持たせ、潤筆料の收入を計つたに相違ない。

菅茶山の廉塾

▲終りに臨んで附け加へることは、山陽が廣嶋を出奔して身を寄せて居た菅茶山の廉塾は矢張備中で、神邊云ふところに在る。之れは自分は訪ふ暇が無かつたが、友人の角田浩々が先頃訪ふた云ふ其話を聞くに、土城の廻してある立派な家で、中に這入つて見ると、家も昔のま

いで、塾に母家とが別に建つて居る。山陽の居た室や茶山の書齋なき云ふものは其まゝに残つて居る。

▲今の菅云ふ人は門田村齊と人ふ學者の血統を受けて居る人であるさうだが、大分偏屈な人で、世と交はらないさうである。しかし家は年々六百俵ばかりの上りがある云ふ不自由の無い家である云ふことを聞いた。山陽の話の序に之れを述べて置く。

早稲田大藏圖書院

山陽を中心として

諸家の逸話

(中)

○廣島に頼春水の遺居を訪問の折、春水の遺物や點を示さる、中に日記數十冊あり皆哀然たる大冊にて例の細筆もて堪能に日々の事を記しあり。主人よりこれを見られよと云はるゝに任せ一讀すれば某月某日の條に、此日大樽事あり襄狂病發し家を出づ云々とありて例の山陽逐電の事を記せり。又屏風の反故張りの内より出たりとて示されたる一片紙を見れば春水より夫人に與へたる書狀にて、長男に名を襲字子成と

命する由を認め、兒に禮服を着けさせ命名を受けしむべしとあり。又襲の字には「ミノル」ナリ、ミノルニアラズと特に注しあり、此の書翰は江戸に在る春水より浪華にある梅腮に與へたるものと思はる。襲を「ミノル」と訓ますにより子成の字配合の妙を覺ふ。

○頼襄の先妻離別に關して曰く、其の頃藩の法にて上去と云ふ事あり、藩より命して妻を離別せしむるを云ふ也。良人逐電などの場合或は妻に不貞の行ひあり良人之れを知らざる場合などに云ふ(南洲翁曰く吾藩には上去りと云へり廣嶋も同じ事ならん) 頼襄の妻も良人逐電の爲上去りにあひたる也と。

○頼襄は外史や政記に半生の心血を瀝きたれば、勿論經書など研究の暇あるべからず、事實山陽は經書に暗らかりし。然るに其集中三禮義疏其他の經書に序跋を作りしかの如く文章の存し居るは實に皆個敬所などより聞き

を我もの顔に書き綴り自身經學に通じ居ることく粧ほひたる也。
○猪飼敬所は心學者の手續堵庵に學び又國史略の著者岩垣松苗の父に學びたる者也。經學は少し出來たれど人格はく、自分の高きを示さんとて、漫りに人を罵言し陋行少からず、指彈すべき人物也。山陽之を知らざるにあらず、唯だ時々物を聞くに調法なりとて常に往來せり。敬所が嘗て門人を智恩院に會し壽筵を張りたる時の如き、敬所傍若無人の大氣儀にて、盛んに一世を罵り己れを揚ぐる演說中、山陽も後ればせに會に臨みたるが、わざと氣を利かせ別室に潜ひて演說の了るを待ち、出て敬所に挨拶に及びたり。敬所曰く君の來る遅し今少し早かりせば余の得意の議論を聴聞に入れたらんと誇り顔に云ふを、山陽打消し實は先刻より隣室に在りて悉く聴聞せり、中途席に連り君の大氣儀を挫かんも心なき業と

それを知るやと反問せしに、いつも鬮網の外に下物なき家なりと語りたり云々、伊丹の醇にあらざれば吞まず、琵琶湖の鮮にあらざれば食はずと云ふ山陽の文も、實は誇張にて事實にあらざりしか。
○先頃歿したる鹿田静七(大阪に於ける有名の書肆)の遺稿もと篠崎小竹の家仕へたる婦人なり、之れも平素山陽の鄙吝を云へり。山陽が祖園の祭禮のある都度大坂なる篠崎家に詣りて來觀を促すこと毎年の例なり。或る年小竹の妻招きに應じて行きしに饗應に冷やし素麵を出す、素麵の上魚の煮たる切り身幾片が浮かせあり、箸をつけて食はんと擬すればコワ如何に魚類は腐敗しありて臭氣鼻を撲つばかり、眞逆に即座に吐き出すともならず、篠崎の奥様も此時ほど困られた事は無かつたとは隨從せる鹿田老母の實話也。
○小竹は山陽の臺所を助くる一友人た

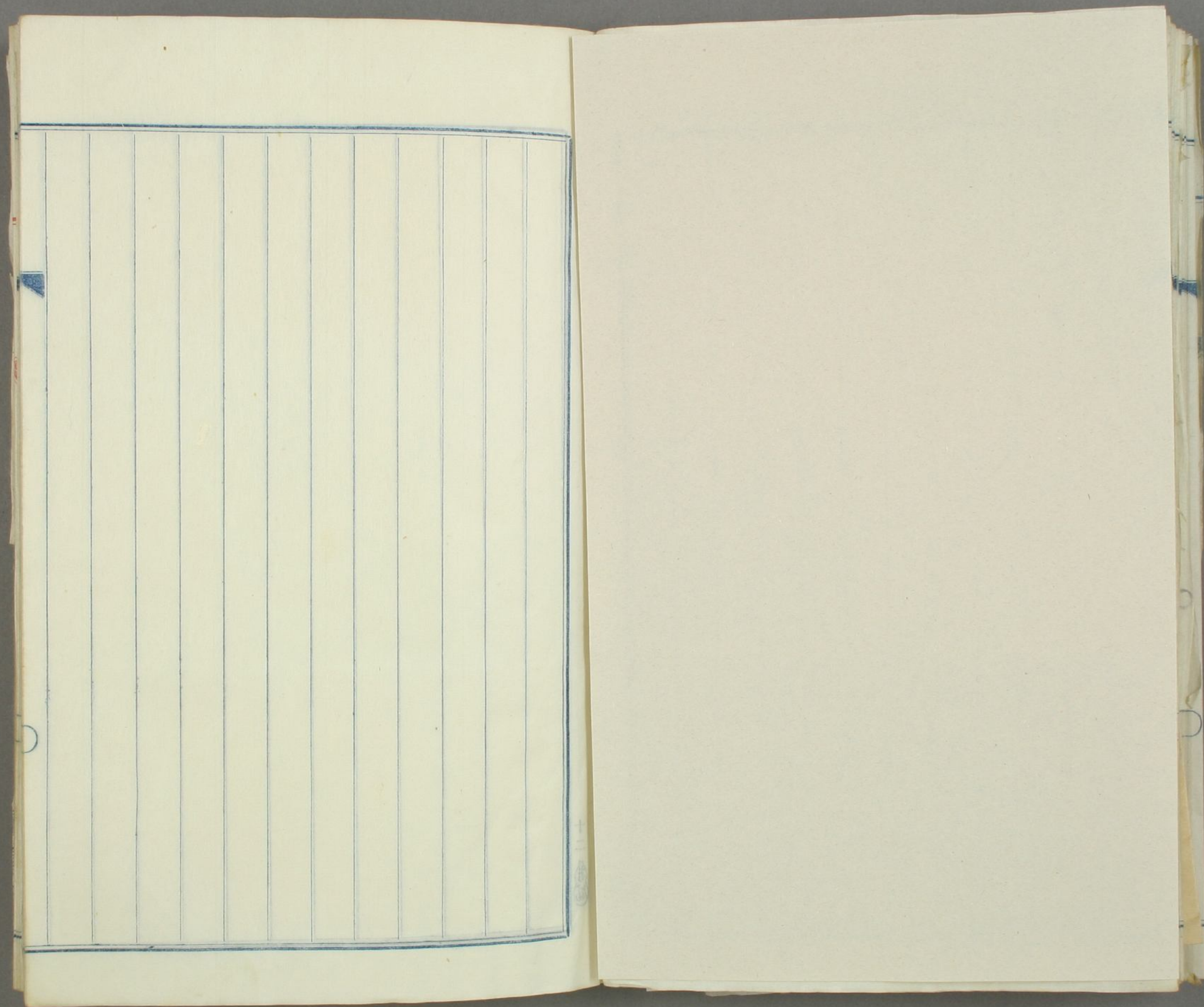
故ら遠慮せりと云ふ、敬所カラノと笑ひ君は流石に余を知るものと云々、此逸事は敬所の嗣子が親の事跡を筆記したるものに明かに載せあり。
○山陽敬所の爲めに壽序を作る。文中敬所を江州の人と爲す、敬所詰つて曰く、余の京師人なると君の知る所、何故江州の出と爲すや、山陽曰くそれを知らざるにあらず、實は江州と書く方文章味あるが故にかくなしたるのみと。山陽は文章の都合により往々事實を狂げたり。
雙魚堂主人談
山陽を中心として
諸家の逸話(下)
○鹿田静七(二洲)は源太の子也、年少にして親を扶けて漁網をのみ、終日倦

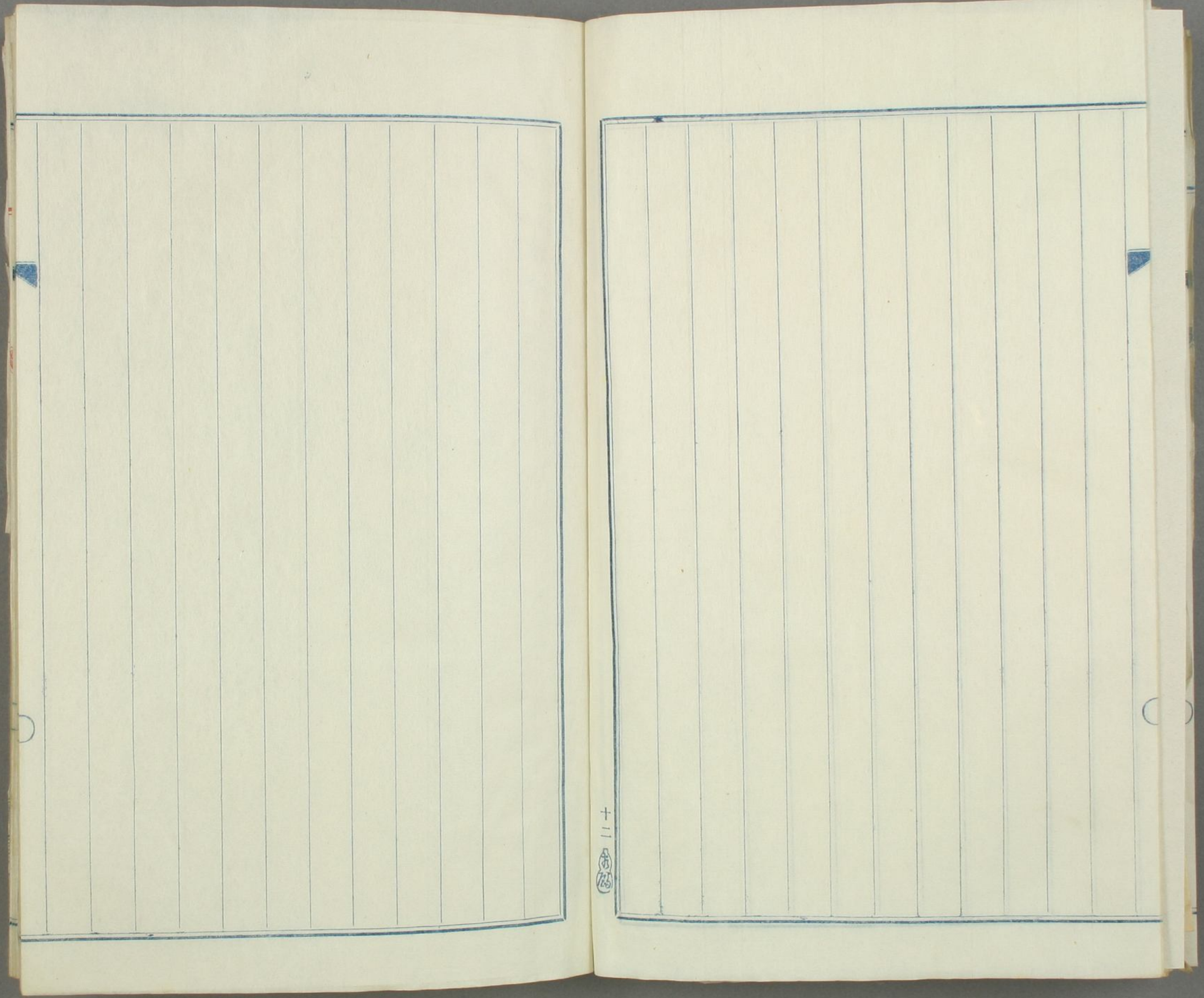


りしこと篠崎家に存する山陽の書簡が多く金銀の事に關するにても知らる。小竹は山陽の爲めに多くの場合に於て潤筆依頼者より謝金の相談を受け、小竹は友人の爲めいつも其書を殺めをやし、是はなかく骨を折つて書いた、謝金は奮發したがよからうと、常に太鼓を打つたと云ふ。
○山陽は潤筆料に就ては仲々矢ヶ釜しかりし様子にて、半切一枚金一分特に詩作の依頼を受け且つるれを書する時には、二分と云ふか如き規定なりし。或人山陽に壽詩を請ひ、贈るに謝金一分を以てす、山陽規定に背くの故を以て受けず、依頼人曰く、この詩は特に自分のために作られたるにあらず曾て某家に此詩を見たり、故に謝金一分を呈す、敢て規定を侵すにあらずと、山陽益々怒り依頼者も屈せず、依頼者は終に謝物を納め書を棄て去りたる逸事ありと云ふ。

ます、父感し、曰く、汝の如き氣根のよきもの學問に志せば必らず大成せんと、これより學に就かしむと云ふ。
○二洲の妻は春水の妻と姉妹也、二洲史談を好む、山陽時に訪ふて深更史論を試む、二洲も亦喜こひて聽く、襄のさばさまたる二洲の妻、座に來つて山陽を叱して曰く、お前のおしやべりには困る早くおやすみなさいと、山陽はじめて罷む。
○山陽の書肆なりしこと諸方面より聞か所也。山陽を知る某諸伯の子、嘗て語る、山陽杯を舉ると必らず門を閉ち客を謝す、俗客を忌むと云ふは表面の遁辭にて實は吝高の故也、ある時余の父山陽に招かれ不思議にも酒の饗を受く、歸路山陽を知る者と途上に會す、告ぐるに山陽方に酒の饗を受けたるとを以てす、其人笑つて曰く然らば下物は必らず鬮網なりしならんと云ひしが、果して其通りなりしにぞ、何故

十二





十二
①

酒

○三枝花筒

才十九号

ハサカ

白石海路

才二十号

樂島のシワシボウ

才二十一号

島三山

酒の心

才二十六号

相模の酒

才三十一号

酒原

三十二号

美酒の天酒 一酒と跡

三十三号

酒と釣

三十七号

竹田の金屋

四十一号

頼の剣を公のまじ

五十四号

利子の物

の

○武元天皇... 舟君立と... 山岳を... 史
 體と海... 山陽に交り...
 関係を引... 山陽外史...
 の元初... 大槓子... 似多... 山陽外史...

○山陽の... 出... 關係... 山陽外史...

一病と校方か、何ぞうのツテと此を行きさる
例の騰字をさしなすも此のつらうお希(希)身
原方日を初めを漸く見、日言ぬるも三言も
漢文一千言をせしし兵原を大先生とおび
せんも兵原七術守り論り字の處を許せし
西兵原の机の抽子と申す處と盗みし
者、机をのこし、らんをとお傳するも自分名を
さめりま秘しくらんをさすして三言り、その者
机と一千言り此(原方)に安る兵原のふね不
そとと云千便一境一境と云ふ
○播磨の日原ありし中井後飯の八松葉とい
ふ人の著る夢のしら」と和文にちきなる也

りうのしつゝ後をさるるも海布を
山陽のふ(徹)を巧見えを漢文に秘し
ちのし人多く氣のつとす、江(原)書をも
此(わ)るるも入るも何人七後らことをいし
○日本外史と本相(道)鑑をやきりし
不ろとまじし、海布を脱胎したるも
其の割に秘をさるるも徳川に列
祖氏語のせい(海)に
○江戸細書(海)の波舟の家のつと山陽の細書に
七言も机多く丁寧に秘存(あり)あり、その
あつたは、秘書を秘蔵し、終るものなり
可人として何なり秘するものを秘するは

へに示すやと怪しむしは其のあらうこと
 ○山陽と教本の交わりを山陽の記に出る時
 に此書を教本と山陽とを氣味に授けり教本
 けりし本の同底の蓮花に似せりしことか
 教本と山陽時に「狹斜」の卷に「是をの文を
 たることもあらし」教本の授けりし
 教本を他の文人と在るに丹をせしこととてその
 一時に「度場」を思ひ立ちたる由「杜」の「女」の
 旨くは「和」の上に出るるるめを「度場」せし
 得るをらししと云ふ
 ○山陽のあり「ち」なきと「不」の年以代故
 あり「ち」なき「度」れと云ふこと「度」りし

偉くは「梁山」の「翰」を「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 ○日本外史の或る部を「傳」せり「下」の
 一の「女」の「ち」に「依」る「人」の「永」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと
 人の「永」の「大」の「度」りしこと

況に元元を云ひしことあり、今何れにあややを
とす

○山陽尾張の山陽秦必法浪を呼し尾張
をせきせ原遊宮典にお抱えあつ流石と大
岸ありいふふて皮肉にことありあつ一人
あ原の治しと云ふ山陽を尾張に別り
ことありしを云説をたすことありあつ
る事あり秦ありも一應を交りしこと也一説
あり七推ありしを云ふ

○龜山夢研と云ふもの山陽に後あり尾張に
高き橋本と一時日ハ印を執り、杏ほる此人の父の
めめ、墓記をたすなり、林田のちる云、前より男の用

うけを昨家をゆりしを云ふ、喜有者あつたし
出入りか書山南に古池と云ふものあり、北家の出也
山陽の北家と出くすも、北に徴するもの、甲馬尾の
書し橋本え丸のたつ、梓治しなる、及し然る
感付せりし、一のり重家お抗し、
此よりありし、たを、夢研、其弟七書山南に
述あり、あかの飛龍を云ひ、
あん、龜山の家、
陽●との関係を示すものあり

○山陽米を、印する、既、米の幅を、刻、
す米を、頼と、し、作の、幅を、獲ん、
其るを、米を、し、し、物に、後、保、
持、こと、あり、之

れと似物と云ふ。出度りもせしむる来比米座三割言
てたりし山湯古六似物と云はせり。可なり。山湯の後
年米を座三割言えんはことと違憶し思ひ記せ
ハ今ある物懐ちて言をぬる。此の況言存る
未尾著て言せりと傳ふ。真贋のつき文の用ひ
話もあるが。未尾言物をえんが

○山陽の墓誌を於に刻する碑誌を彫
えり。秋磨りよけりある。撰文と云ふ。こようて成
る。まゝい何れも彫えさしや。何れの人詞に
いふ。後論をせしむるや。七作の文の
ら誰の許す未。或を云く。七作の解の後
藤城とある。おの人物もいふ。評判ありし

と、或をまゝ著りぬる。七思の

○書意に懐憶や。東考の古文書を
又、行とし。ことと云ふ。向中あり

○路石と山湯

○秋細考。江馬山陽史生。細考の細文

山湯の細考。其の考の胃。一日の秋

○三原の西の村。四ッを。梅河。柱。山湯の題

杏林山陽吟如こゆ

杏林
三三三

梅魁 源平義経の

江馬細香 娘

山陽文真 湯子 唐崎藩士 清国通(其の)

山陽段後 末元人の玉状 (大親九七九) 七の氏

山陽先妻 梅魁の

梅魁の 大親

宋真 杏林出男

杏林 源平

杏林 源平

此音書也。友松子春舊物。自錄法元此年
訪。重坐外行立心徒焉。一日不離其乃。子春
歿後。相傳落岡井香山香山沒後。乃采藤
女史所獲。今復顯之於村山本殿山。考乎。
此書猶存。而子春香山。不可復見。物之存
沒如此。不可思議也。披展數遍。感慨久之。

歲在戊寅 留子自 天工 次 戲

相傳時。向。今。何。祥。如。然。之。之。

法方。古。物。在。煩。夫。之。何。也。始。下。有。時。也。

亡。子。子。春。送。物。會。英。一。物。示。之。示。之。也。

訪。之。錄。以。揮。承。之。也。以。本。小。子。也。見。之。也。

有。之。物。之。清。然。之。也。不。堪。ナ。ニ。塗。土。

鴉鴉の信廿三回と： 魂 ~~魂~~の

中の一信あり風邪頭痛困外診依

全快子にお認の中ハの事ハくるハ

本國の由は郵社ハ難有存在、只今ハ

名茶二枝蒙託贈之程推辭玉心也

方ハ難有お肩はれの中ハ了事ハ始

十二月十七日

十二
〇〇

山賢堂

お願

返

ハ浙西六家訪録。天保辛卯之冬。

山陽翁西觀行管匡所齋。相外

批評。皆係翁手筆。蓋出於
寒暄。柳河之餘耳。而懷貲
確。亦於此暢。所謂巨又摩天於
此。丹乎見焉。柏磅九向君。空會
特厚。因宜矣。

十二
十二

大正甲寅春。後一日。於濶。有欲。

吾三子を得ず、山陽の母大敵と隨國と徳とあり
ありま、隨の跡に好し山陽の抗爭に屈せざる
七の六なりしともあり、小作なり

山陽評法入道又、有抑有揚、正於隨の子、
則抑之殊甚、余察其意、死惡隨の子也、
為隨國也、隨國才高能、歴古の女、
若くは、志況陳腐、出人言表、凌轢古今、
自成一家、觀者爽然、莫之敢櫻、失山陽
以為子才、實才子、然亦大做境、固亦不、
瑕指摘不遺、使隨國不得專權、蓋圓
乃移史筆於詩詞、其新章、托咏懐、自成
一家、一時仰之、近世之隨國也、
崇高欲名

世者、不可無隨國山陽之志、然亦須先自
量其才、其才不足、任氣勇往、其不
盡、而類狗者、或亦一也

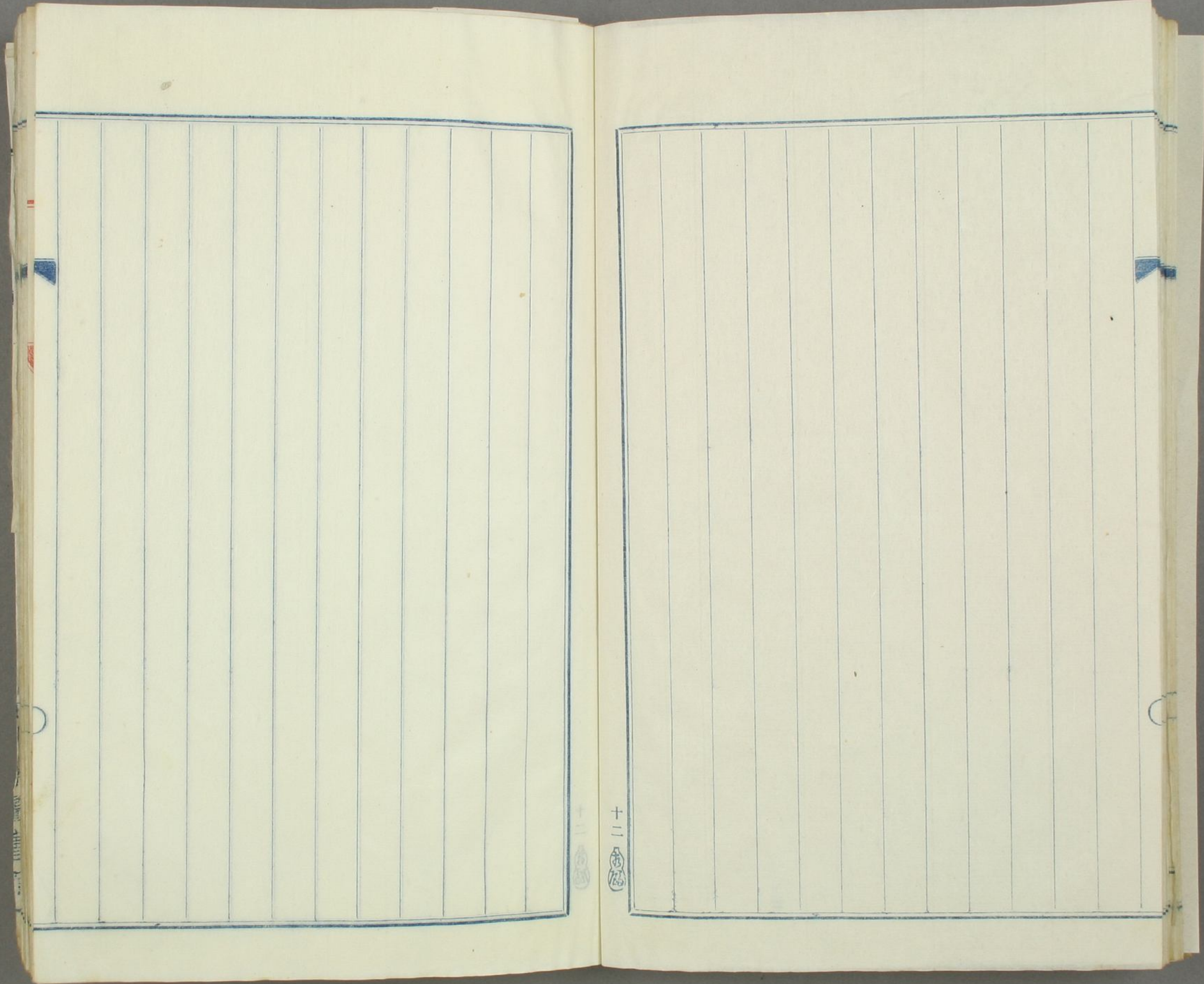
△印
入心

次雙道店

一、衣穿友道、教多、
頃、畏虎、莫、度、
背、丙、皆、平、生、
北、為、
流、況、
宿、片、
我、宮、

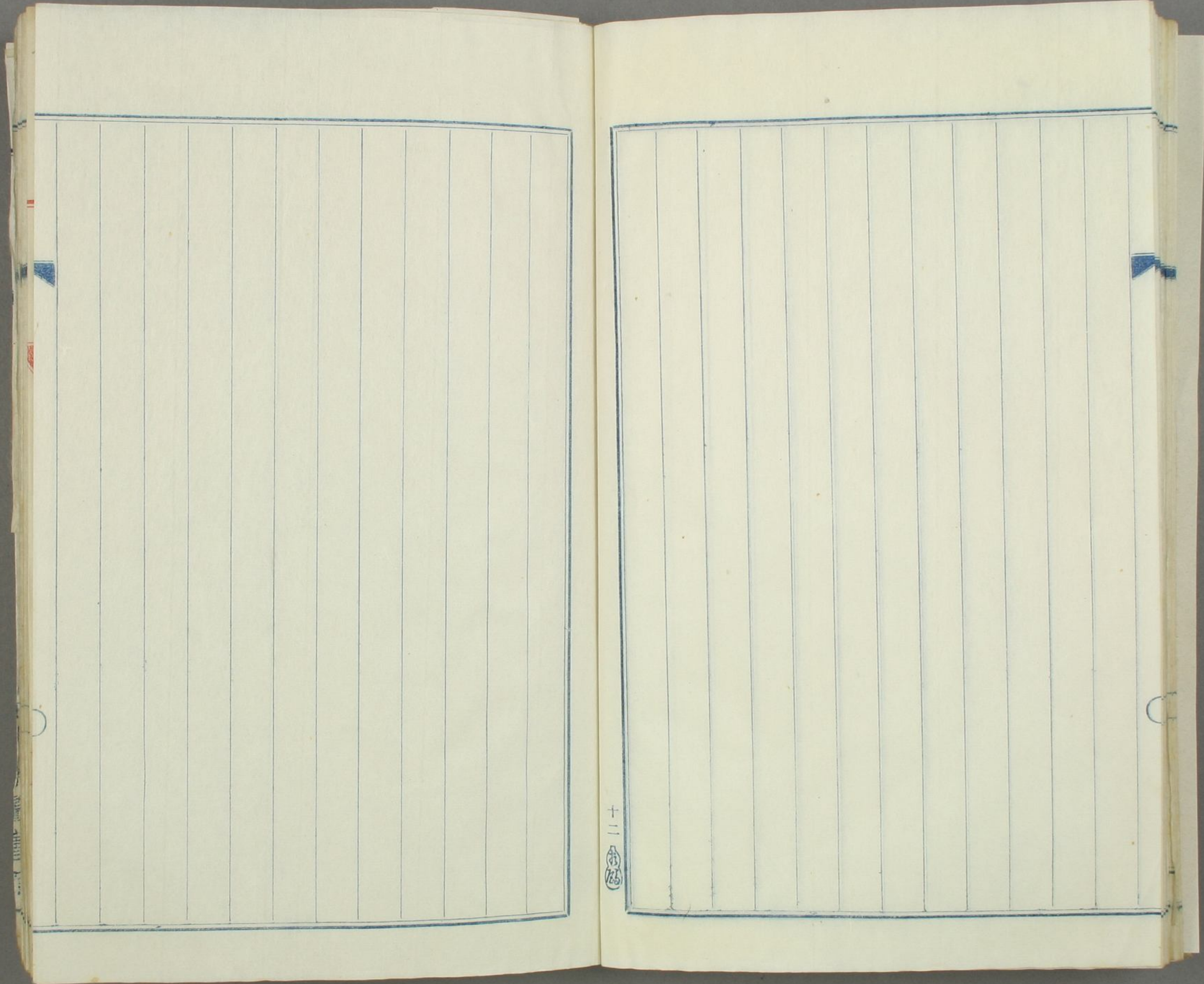
流況、
宿片、
我宮、

物名を以て流次相次英二の如くして獲たり其山物部
山物の堅幅の如くあり其物名を左の如く記す
山物部山物部山物部山物部山物部山物部
と化すその如く山物部の如くあり其物名を左の如く記す
の物名を以て描き、重き善く其物名を以て記す此次也
不幸ありし此物名を以て回祿の災に罹りて其物名を
天の如く存存せり其物名を以て記す此物名を
描き其後十年を経て其物名を以て記す此物名を
免い其物名を以て記す其物名を以て記す此物名を
山物部の如く記す其物名を以て記す此物名を
山物の尺牘とを得たり其物名を以て記す此物名を
山物の尺牘とを得たり其物名を以て記す此物名を



十二

十二



禮卿之墓山
也

東遊旅行日記

裏

寬政九年三月十二日

自廣鴻至竹原

十三日

墓祭

十四日

墓祭

十五日

自竹原赴丹

但風雨

十六日

朝雨

自志海上陸至尾道森仙助

未洗

十七日

晴

自尾道川尻河漲不得陸行

故舟而至今津至津色禮卿之墓

姫井子と三石
姫井子仲の御旗
源信前より信長
の御旗あり

十八日

朝 兵長脇氏合矣

十九日

自神志七日市川至矢掛船宿逆旅
自矢掛至岡山

謁姫井子及教子於赤穂屋墨助

家

二十日

自岡山至三石

二十一日

自三石至姫路

二十二日

自姫路至大久保 大風

二十三日

自大久保至兵庫

小雨晝晴家々古誌逆旅也

二十四日

自兵庫至郡山

自西宮取道於山崎也故不遇大坂

二十五日

雨 自郡山往伏見至大津至伏見

御控于針倉九郎家

二十六日

自大津至武佐

相武佐至柏原 新時針倉景任

二十七日

自柏原至洲股尾岡之原古蹟

二十八日

自洲股至宮 又名藤原熱田社

二十九日

自宮至赤坂 小雨

四月初日

自赤坂至舞坂入京并関

二日

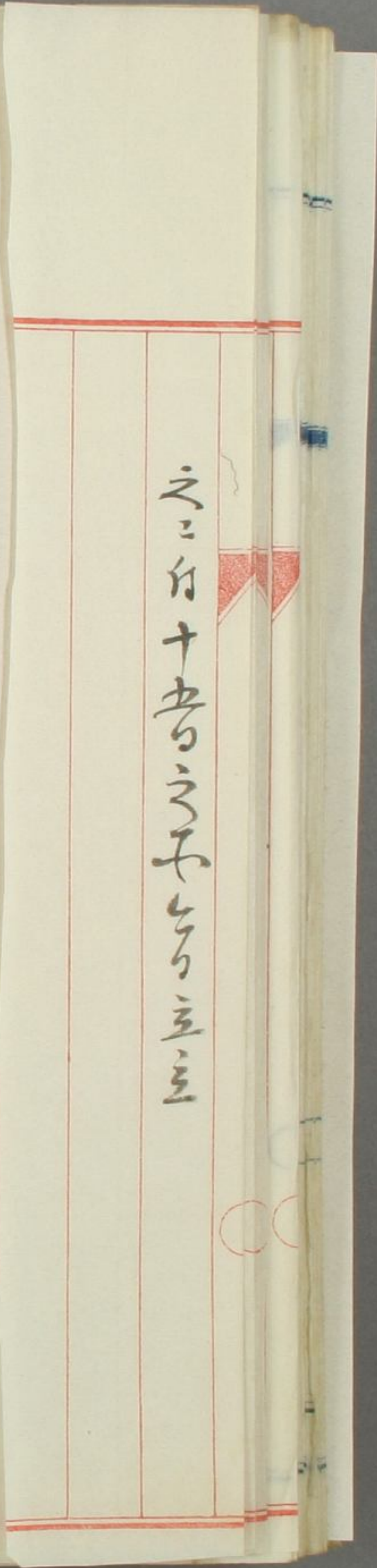
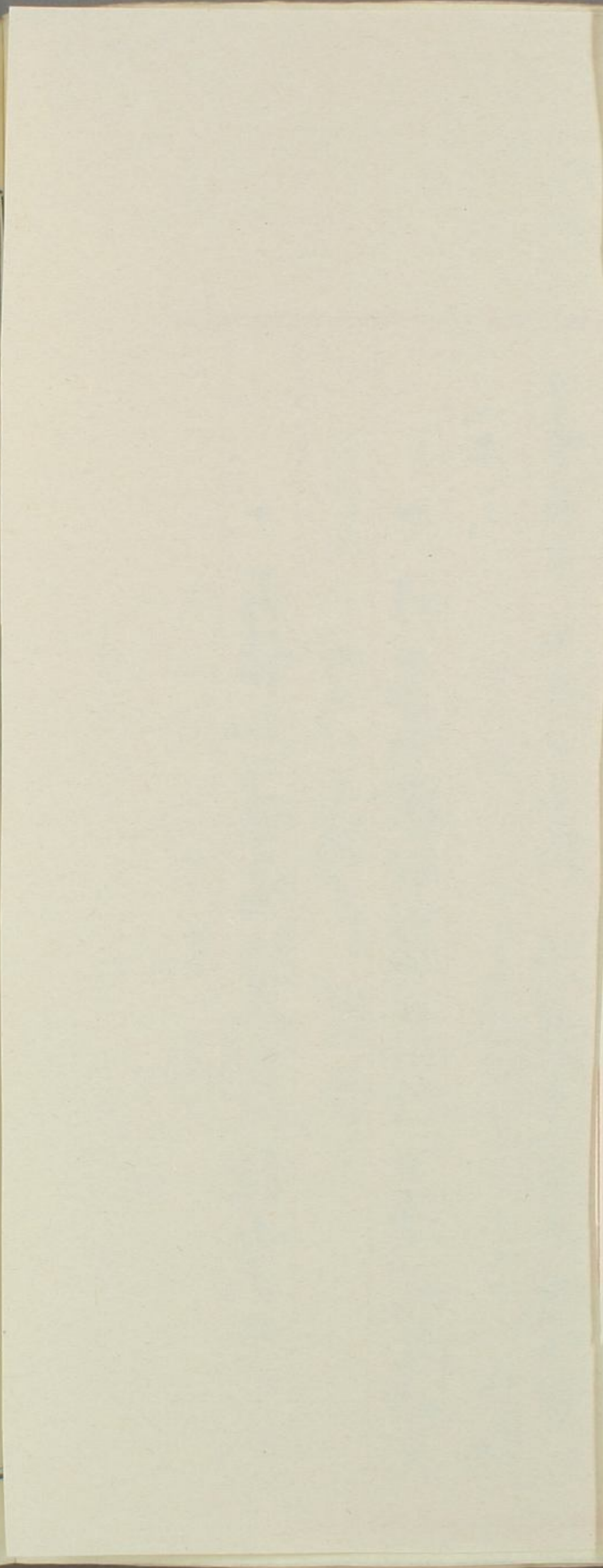
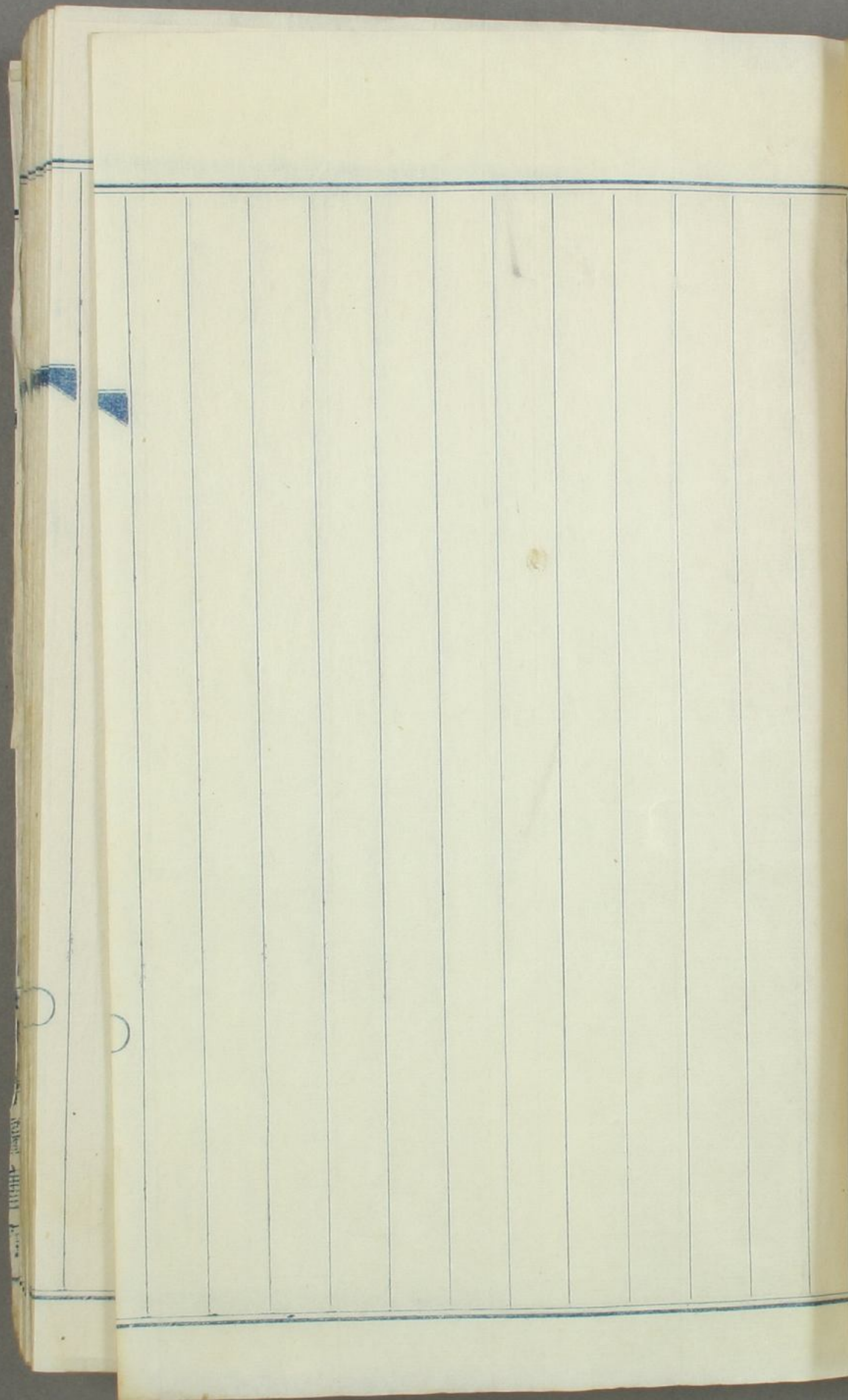
自舞坂至代官并海天龙川大井川

漲程行而宿也
 高留代井
 畫後聞大井川稍穩為代井至
 金谷宿
 自金谷至丸子曉過大井川連日陰
 今日初快晴望岳
 自丸子至蒲原 海出川薩嶺
 景壯
 自蒲原至三島 泊市士川金谷
 望尤壯
 自三島至十四原 越箱根関日

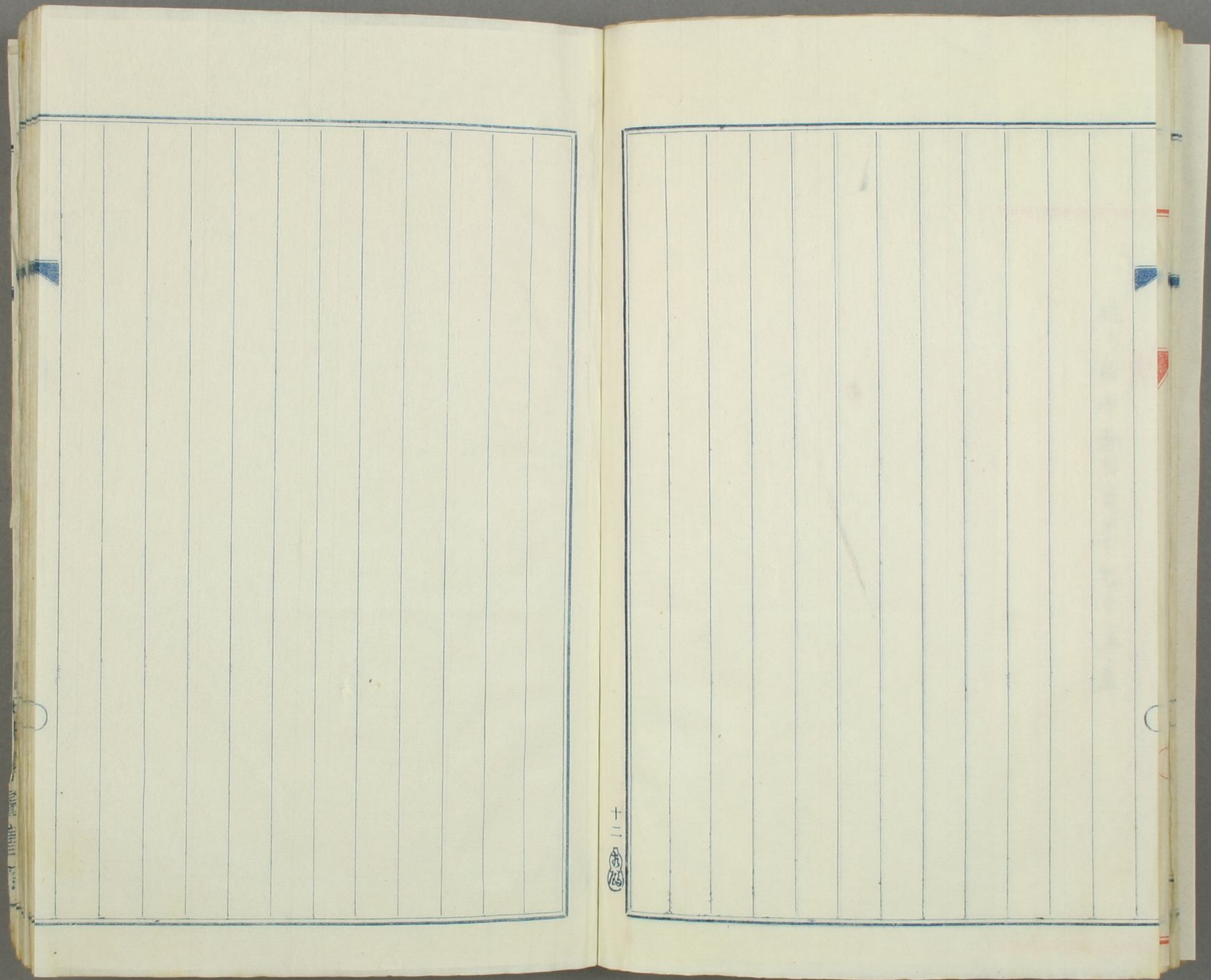
里子居
 常士里水祀本
 字子居通稱
 登内号白茅
 高内江上命主

九日 雨 自蒲原至藤原泊海河川
 十日 尚雨 自藤原至川崎野合宿
 給華 夜馳書于黑子居
 自川崎入江戸於大木戸思歡二程
 赤羽茶店之東大人則至本邸與
 長服二子也使裏隨立轎入西
 印堀大塚氏歡迎里子居致馬
 喜而至須臾大人至堀子之邸舍
 酒食既訖町野氏掘山勘花
 至

十一日



之三白十書之十子之五三三



東都茶會記(卅九)

香山茶話補遺(中)

賴山陽逸事

陶庵侯の所藏に賴山陽の尺牘二十通を貼り附けたる一巻あり其尺牘は悉く有栖川宮家の用人に宛てたる者にして其文面に依て推察するに有栖川宮家と山陽とは非常に懇親の關係にして用人を通じて宮殿下へも文士風の氣隨氣儘を遺言なく申し出でたるもの如し從來山陽の逸事を記したる者は故森田思軒其他數輩ありしやうなれども余の識り得たる所にては嘗て宮家と山陽との關係に言ひ及びたる者なきが如し因つて此義を陶庵侯に質問したるに侯は答へて

書道を學ばれ山陽より毎々御手本を差上げたる次第なれば其父君たる時の親王殿下にも折々拜謁の事ありしは尺牘の文中、明かに之を想察することを得べし云々
と語られたり抑も山陽が藝州を出で、京都に寓し史筆を以て勤王の微志を發揮したるは學者の本領固より然るべきならんとも雖も日野亞相公と云ひ其他諸紳の間に眷顧を得て或は歴史の材料を借覽し又は古典古記等を究問して詩酒徵逐、議論上下の際に一層勤王の念を深うしたるや疑ひを容れず然るに今有栖川宮家と斯の如き親密の關係ありと云へば當時の事とて思ふが儘に其懷抱を述ぶること能はざりしならんと雖も山陽が推理的以外更に人情的に於て熱烈なる勤王論者たりし次第を知るべきなり因つて此尺牘を通讀するに宮家用人との應酬なれば山陽が其文思を馳するの餘地もなく多くは恩賜の答禮等に過ぎざれども其中自ら彼れが氣象を顯はし又當時の状態を示す者なきに非ざれば左に其二三を紹介すべし先づ第一に

此間は御來賁、奉、存候、爾來、寒威日加候、御上念、御清泰、老大御清健、奉、賀、此雄雉一隻、東寺邊より網獲、由にて到來候、私此節少々不快にて、絶肉居候故、無、呈進候程、過候、若し簡様之旨、御有合之時、又々御分惠被下候様、仕度、例之自由御笑、雷可被下候、呵々
霜月廿五日
内藤老丈
裏頼首

情、周旋至今、今乃如此、則閑雲野鶴、何天不飛何必勉已所不能、俯學都人士之、爲天下高人所鄙笑哉、とありしを見、て處士文人傲岸の狀を想像せし事ありしが此書に於ても自分の喰ひ得ざる時には進上して都合の好き時にお代り頂戴などは随分虫の好き話にして一方には當時斯くの如き氣隨の文士を優遇せし貴顯の頗る雅量に富みたるを見る可きなり又其次の一書は
御手本、調置可申候先日二帖差上置一は草一は行書にて同詩を字體兩様に御習試被遊候も却て御慰みにも可相成と存じ候故に御座候得供ヤハリ相變り候方、宣被、思、召候は、別段に認可申候今日にても後刻御箱爲御持、可被下候不乙
臘月初三
小倉様
頼

にして是れ又宮家の用人に宛たる者なるが蓋し宮家の姫君に習字帖を差上げたる場合の書面なるべく大切の御得意先とて山陽先生も今度は精々勉強したる様見え可笑し

○閑を得る格を事をゆゑの者も人余と示する山物
毎千津の古歌を示す若くは銀と毒鳳卵と
云ふ一巻を得る法家の歌謡あり衆扱めて物
執あり而して余も古歌と山物の中津の草履
を喜こぶ余も指動く而して終に後う能く
善し此歌國と格を事と式の物山物のあり
刻も後六格を物すまの者も能くするもの
也又別と一巻を出し日示す回くこれ姉妹衆
も形状大小毒鳳卵と似たり頼摩山経年

銀と銀と格い毒鳳卵と云ふ余歌視する
詢に歌似す唯は古き歌の口寸延び坐て置
り歎するの安あり宛んも元津時氏印つと山
物の毒物と傳ふるものあり兼終に之れを贈
へる、東京と見らするの日記在山物と格の
一巻を得るのうらやうして六之れを得る事
と謂ふへき歌山物毒物、活のうき古
くも習記支峰の物字あり山物格を
書くは古詞あり格を事とて如くは衆を
さんす折垂延の格を叙し人、事すの
との約をとりぬ、少花に見せざることを云す
め、古山人の格直入衆の國來らば、頼摩

才の題詞を載す、吾方の赤鳳印の鑑り山
功方と聊う白し、いさ印を據し、あるを名模翻
讀ち、いさう世々々々山功の手に入る前何人か
いさう鑑と云し

余の手に入らる赤鳳印の鑑蓋は頼游の題詞
ハ左の如し

物なきを多く花一古、余曰赤鳳印原係山功先生
受取、頃り又購獲一形、似る名曰赤鳳
卯云余が就曰鳳凰瑞應鳥也、推曰鳳雛
曰鳳令也、併云雛推二、和尚が云瑞也、花
大雲路云、入あり把杯、未對物、自自得也
余所不能記也

丙午之八月 頼游題匣并誌

余改て赤鳳印を得、予前、得る一、瓢ハ山功手
澤一の存る所、呼し、とて赤鳳印と云ふ、七好ハ
無き、似たり、後、匣と名を、まゝの、日北、鏡を、古
せん、歎

Handwritten text in vertical columns at the top of the page.

Handwritten text in vertical columns on the left side of the page.



三七 雲華印山陽書小幅 巾 一尺〇三分 六寸四分

Handwritten text in vertical columns at the bottom of the page.

辛卯孟夏初三日為林石人刻一印忽記
德洲雅軒六見託我篆遂用此款為
魯殿揮斧真可笑也此時林石傍
觀微晒而已

三十六峰外史惠然識



此物舶來粗品亦能發墨此物
雪黃河足以及文字矣
方外友人惠印

賴

子成

二款白文

昨夜刻成未補刀今刻者係未
能取思借之者通是名由思底如
以璞示
牛房一乘近歲不用之物故欲
佳觀

二月廿日

袁德修

昨宵行半江望之亦忘在夢也

無息信新獲一悔与嘉譽元
 俱者以崖評品未及定論於
 幸江沙河被仰三无而定之也
 近父来哲是市
 僕出花書已終紀林水三子
 之目而來父
 曰无一管者亦出廣展開未不
 何口为可
 表又必
 以上小通人版

號五]

桃石在佛手柑鈕

賴

子成

二龍白文

雲華冰貽余以佳凍而毅不忍
 附之俗工秋篋底五年今臘尾
 無事與到逐自利成雅拙或
 免俗年洞之龍梅三不若也同
 質於
 師海云何

己丑嘉平月二十七日

襄

此印笑在諸君台景城氏以飛帖

[行十四話字廿

十二

笠山作月亭其園於載也其
 為柔其亦生於也而亦其
 為達而不成其探深其任為
 石之陶若若露之時為多此
 梅子如也
 山陽遂誤
 識字信女一瓜其造字之
 也而不作
 河使懺悔
 若瓶亦來心之蓮花之陽也
 此文
 瓶在湖石園紙中修梅

十一

▲頼山陽と嚴嶋
 頼山陽と云へば誰も非常な豪傑であ
 ると直ぐに感ずるか此人も若い頃は

戸であつた息子の三郎三郎の
 後前に依るに親父は若い時に酒を嗜
 ち解か大荷物であつたと云ふことを
 云ふて居た、之も意外の事であるが
 こゝに又意外とすべきは山陽が嚴島
 のつひ鼻先にある嚴嶋を死に際近く
 まで知らなかつたと云ふ事である此
 嶋は風景の上から歴史の上から實
 に一大名勝の地であり且つ安藝藩の
 制度として遊興地は凡て嚴嶋に預い
 たものであるから、遊樂も酒樓も、
 悉く此地にあつた譯である、然る
 に若い時分、故郷の名を博し愛に勤
 奮まで受けた山陽が、此の嚴嶋へ足
 踏せなかつたと云ふことは意外とし
 ざるを得ぬ、山陽の時に據つて察す
 るに、二歳の時母に抱かれて行つた
 とがあるより、其後五年を離れて五十
 二歳の折今度は母を連れて行つた云
 ふことか詩に據つて分るのである、
 所謂の燈臺に暗し、と云ふべき者か
 其詩に云く
 秦母遊嚴嶋、開家生甫二歲、二
 親學之省大父、遂詣此
 嚴回嚴嶋在江城、仙鶴唯看黛色橫、
 松瀨則唯沙中瀨、維舟今日接親行
 抱我無嫌下浦船、當時強負拜儀明、
 白頭母子重來説、存送送々五十年

○余素好風氣、桑植等を好す、昔、左様、蓬瀛
の窟、宮あり、昔、後、山師の語、論あり、後、年、の、中
より、此、功、時、を、起、火、の、中、に、入、ん、も、別、り、又、す、と、来
り、あり、と、他、の、山、師、の、語、を、聞、く、も、五、十、二、歳、の、時、
若、く、は、山、師、の、語、を、聞、く、と、見、く、と、す、た、も、二、才、の、母、に、目、地
え、て、訪、ひ、し、こと、山、師、傳、り、も、あり、語、の、由、も、之、れ、に、交
ふ、五、十、二、歳、の、時、山、師、の、若、く、は、山、師、の、語、を、聞、く、と、見、く、と、す、
其、向、に、云、松、瀛、朝、暉、海、平、遠、維、舟、今、の、極、親
行、……、抱、我、父、命、壞、下、海、能、高、的、碗、及、拜、念、
前、……、白、頭、母、子、重、來、訪、存、改、記、五、十、年

松瀛朝暉海平遠維舟今極親行

○移るをいんさるヤ名の横物より追記す、右方大の紙
本は岸物の井と畫し山防七絶を懸し竹の
まきこしとおもしうし思えさう井と草十敷の如
めとのるま(河名)の如く改得も言ふ人の母の如く
山防もこれをもて岩ぬし人物もやん或心せさるし
三物よりえさるアツト感成せしと急しくおせし
ろき一筋を懸しうし、記すことゑん終の意味をこ
んま向入るゑある、これと吾家の井は何物の似画
河に記するを地圖をいふことよふ、寫例の如く
己の家の井と為してぬとゑのめらう、高し山防
さうせしと思はん、さう北橋下村大内の藤巻の
三つ五つ十回とある後れせし、その↑

口

の傍附しあり、記すことゑん終の意味をこ
り、この別名をいふことゑん、追記の如く、竹の
吾家の井と為してぬとゑのめらう、高し山防

吾家の井と為してぬとゑのめらう、高し山防

山防外史

鳩尾をいれた三の字画をえたる中の一は
 味を感したるものは幅三尺許の箋紙横柄
 にて首端たる尾端の如きありたるに
 此高京の尾端の如きありたるに
 俾おめのの如きと法界とを描くこと
 井のりる縁うた端に井の如きあり
 本句と縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに
 縁うた端の如きありたるに

形も奇しやうとて奇く、まことに
 奇也似し候はる由とまのちあり

春城茶話

三樹 市島藤吉氏



三樹 市島藤吉氏

私の親父等は坂に逢へたと謂ふとて又三樹の兄の復二郎(支峰)は久しく郷里へ来て居つて、現に親父が教を受けたりした西縁もあつて、従つて支峰や三樹の話は、私の幼少時代に聞いて居る併し其聞いて居る事柄は、世に知れて居る方が多い。今日三樹の逸事としてお話する事もまた知れて居るが、聊か其當時に目撃せし人の話を、私が直接に聞いたものであるから、それを特にお話して見やう。

三樹が昌平校に居る當時上野不忍の池だ、あつて亂暴をしたと云ふ出来事。何分當時の書生は亂暴で、三樹も其一で、或日のと單身で散歩をして、例の不忍池畔の境内に入り、幾つもの石塔が立つて居るのを池の中へ投げ込んで居る處を東叡山の坊主に見付つて、大勢の坊主が寄つて集つて、捕へて高小手に縛り、高い處へ吊し上げて打擲に及んだ。

つて見たが仲々坊主が聞かない。それから己を得ず急に使を積齋の所へ馳せて、積齋を寄せ、積齋から懇懇に詫言を請はせ、謝りつて歸つたところがある。其積齋と云ふ人は、藤二州の息で、學問は卓絶して居り、人山陽とは兄弟になる。即ち山陽の妻君の妹が積齋に嫁して居るので、親類の關係だ、そのうふは係があるのみならず、積齋は本業に仕へて居つた儒者であつて、當時木とか何とか云ふ縁故がなくば東叡山に託が叶はぬから、積齋が考出して自分の手には終いぬから積齋を呼んで来て助けた、序に積齋の事を話すが、二州と云ふ名あり學問ある人の息子で學問も卓絶して居るが、此人非常の酒豪であつて、家事を構はぬ、所か其妻君がまた非常の大酒家で、婦人にして一升の量があると云ふ程だから、夫婦共々酒を酌して飲んで、毎朝に家に備石の附なく、赤貧洗ふが如き様であつた。



身に牧野齋の所に、積齋の書紙があるが、夫は黙庵に與へた手紙で、其中に詩が書いてある。夫を讀むと積齋が非常に窮して居つた様子か分る。時節方佳不出處。閉身已及二毛初。呻吟懶臥是非病。錢神贈我絕交書。此は鍛冶屋になつて居ると云ふことだ。其是の縁故があるので、黙庵から三樹

の亂暴を聞いて駆付けたと云ふのも無理ならぬ譯である。黙庵が昔茶山の門に入つて居た時分には、山陽は茶山の塾頭をして居つて、黙庵が新塾の書生である處から、時々塾頭に招かれて聲を刺る役目を申付つたものだ。時の山陽は聲を刺る鏡等のある時代でないで、始終書生に刺せられたが、黙庵の一方が一番工合が好いと云ふので、始終黙庵に刺つて貰つ

たのしみ計して御苦勞とはなんのこたといふにはそれは一人のやうにたんとこしらひられる事をいふのだらう。これは江戸わらべのはなしだといふこといまたさなされす候か強て分らぬ様にして、例へば頼義といふのをたのみ狀、江戸わらべも京都の童と云ふ事を逆に書いたのだらうと思ふ。山陽が天下の大勢を論じて國家の爲に辛勞して、偏に國家の利益を謀るなどと言つて居るけれども、勝手次第に計り放り出して居ると云ふ様な事を、當時言へ得るものは、茶山の外になかつたであらう。

京より頼義とやらいふ物がきて、一身の苦勞を持つて四界大へい國民安野んなんとやらいふ事だけな平生

此手紙は塾頭算村翁が久しく珍藏して居られたのであるが、自分から左渡の鳥賊の黒漬を贈つた所が、其忠誠に、墨の縁に此墨蹟を贈る」と云ふので寄せられたものであるが、珍しいもの

の亂暴を聞いて駆付けたと云ふのも無理ならぬ譯である。黙庵が昔茶山の門に入つて居た時分には、山陽は茶山の塾頭をして居つて、黙庵が新塾の書生である處から、時々塾頭に招かれて聲を刺る役目を申付つたものだ。時の山陽は聲を刺る鏡等のある時代でないで、始終書生に刺せられたが、黙庵の一方が一番工合が好いと云ふので、始終黙庵に刺つて貰つ

琴馬

である。さて山陽にて馬琴翁遺墨展覧會をやつた折に、自分の是迄嘗て聞かない面白ものが一つ出て居つた。それは山陽の日本外史を馬琴が鄭重に寫させて終りに自筆で跋文を書いたものである。品になつて、それを見ると用紙の野...

全山陽と馬琴は嘗て互に相見た事はない。山陽には山陽史を寫して世を益するから、自分は其裏を行つて柔な歴史を書くと本領とすつたと言つた。言傳であるが、是は言傳計りてなく事...

あるので盛々申されたものであらうと思はれる。夫に就て一つ話がある。或時馬老が江戸から船に乗つて高松へ歸る途中、場所は一寸忘れたが或繁華...



雅俗 相半録 (二十三)

山陽鎖々談 (一)

日本一の人氣役者 春城學人談 鼠巢庵編 私には幼少から山陽趣味を有つて居た、山陽の事蹟は残りなく探討を遂げた、どう考へても、山陽程の人氣役者は我感にも無い様だ。仁齋だの徂徠だの云ふ學者もあるが、人氣の點に於てはとも山陽に及ばない、藤田東湖...

父春水の衣鉢を傳へ、其威を假つて少壯已に天下の耳目を聳動した日本外史一冊でも、青年子弟の人氣を一身に集むるに澤山であるに、加へて、其書は、又文章と約つた立派なものである。それから、打てば直ちに響く様なあの漢詩、一句讀むと、誰れしも氣が立つて高聲に朗吟して見たくなる。あの勢の好い文字、と付けたりの餘蘊には、書さへ相當に書けたと云ふに至つては、所謂詩酒徹の文人を以て無冠王になれる資格は十二分であつた。

多くの逸話を作らせる、山陽や、香才一世を蓋ふ山陽に、誰の芳醇と來ては鬼に金棒、奇行逸話は酒の一掬づとに湧く。酔ふては放蕩無賴、沙汰の限りを盡くした山陽に、奇抜な逸話が多い。無理はない、鏡聞も隨つて生ずる。此の馬鹿けた所が愛嬌になつて、其の慷慨家たる噴火山の方面と對照され、一層世人の話題に上り易く、爲めに手廣く人氣を博した。



雅俗 相半録 (二十四)

山陽瑣々談 (二)

春城學人談 鼠巢庵編 書簡あるが故に貴し 私が嘗て京都の鳩居堂を訪ふた折、山陽の畫幅を見た。其れは水墨の山水で、山陽が門人後藤松陰に與へたものである。夫れが、後、轉々して、山陽崇拜の土佐の山内容堂侯の手に入り、大變珍藏されて袋も箱書も容堂侯の自筆である。此の畫幅を見るに、山陽は筆意を倪雲林に取つたらしく、素人畫ではあるが、流石に一種の氣韻が生動して居る。...



雅俗
相半録
（二十五）

春城學人談
鼠巢庵編

山陽瑣々談 (3)

書簡の名人としての山陽
手紙の話が出た序に、山陽の手紙の
事に就て述べる。

陽は殊に得意とする處で、天下何人も
之を認めて居る、併し何故に山陽が手
紙の名人かと云ふ事になると、私はこ
ゝに一言せざるを得ぬ。

さへ書き直せば活版摺にして置いても
よい位な手紙を書いたものである。
處が山陽は此の形式を全然打破つた
彼の手紙を見るに、必ず、其時、其事、
其人に當てはまつて、情を盡くして居
る、其の手紙を十通取り出して比べて
見ると十通共に全く味が違つて居る、
所謂意到り筆隨ふの名文は唯一人之を
山陽に見る、大抵の人は文字を使用す
るに非ずして、文字に役せられて居る、
山陽は此點に於て超脱して居る。其の
文字を役するや自由自在、忽ちにして
俗事を叙するかと見れば、忽ちにして
漢文が扱まる。其の漢文の、具合好く
其場に調和した處は實に天衣無縫、妙
を極めて居る。俗文の中に漢文を交へ
る體は、後人皆之を學び、殊
に維新前後大流行となつた、中には堂
々たる文章家もあるが、世話を碎けた
俗體、間に用ゐる無縫の呼吸を得ずし
た者は一人も無い、吉田松陰なども頻
りに之をやつて居るがゴツ／＼して駄
目である、其他之を試みた者は皆失敗
して居る。

放浪生活に依つて備さに辛酸を嘗め盡
くし、世態人情に通達した苦勞人であ
つたからだ、此處が普通の學者文人と
異つた所で、無意識に直覺的に其場に
はまる文句が湧て来る、つまり苦勞人
が直覺と才筆とが巧く抱き合つて天下
一品の名書簡が生れ出したのである。
されば山陽の手紙を讀むと、我れ知
らず其の興味に惹入れられて了ふ、當
時、山陽から手紙を送られた人は、可
し日頃快よく思はぬ人も、其の文面を
披讀しては快感を喚起されて微笑を禁
じ得なかつたらうと思ふ。山陽の手紙
には、人に物を無心したのが少くない、
之を讀んで見ると、對手の方で、どう
しても其の無心に應ぜざるを得ない様
に巧く書かれて居る。そして山陽は、
自分の手紙が後代に残ることを期して
かどわかには知らぬが、どんな無心をす
るにしても、自分の見識地歩を確然然
と占めて居る呼吸は巧みなものであ



雅俗
相半録
（二十六）

春城學人談
鼠巢庵編

山陽瑣々談 (4)

山陽の手紙から思ひ出すのは、此の
書簡の名人を生んだ母親、梅町の書簡
である。全体類家は、代々手紙の名人
揃ひで、何れも山陽には及ばぬが、夫
れく一流の文筆を有つて居る。山陽
の母、即ち春水の室たる梅町又史も、
手紙は却々巧みで、真情流露の筆つき
は男子も及ばぬ妙を得て居た。此事は
已に世評もある事なれど、私が梅町
手紙を多く見た中で特に一ツ趣味の溢
るゝ出色の物を紹介する。

物上げ候へども心底に任せ申さず云
々々」と前置し、杏坪の子息佐一郎（京
都の名工木米のきびしよを贈るに就い
て、山陽の子の除一が、自分が夫れを
欲しいと言つた事など如何にも樂な筆
つきに能く書いて居るときびしよは山
陽世話を致し、漸く手に入れ候、餘一
か羨み、佐一郎様には三ツも木米が有
之に、是はほしくと申候へども、然う
はならぬと申事に候。みやげ物にほと
／＼困り入り候、御憐察被下度候、金
がたんと欲しきものに候、さて、金さ
（有れば、一向心配は致し申さず云々）
と、旅行に金が第一欲しい事をいやみ
なく書いた所が巧い呼吸である、夫れ
から大阪名所、箕面へ遊んだ事や、竹
田、小竹、山陽が同行した事、紅葉を
見、流を見物した事、竹田が紅葉の歌
を作つたら山陽が「悪歌、悪い歌ちや
と申候」など云ふ風流な事迄、殆んど
無駄と云ふものがなく文人の垂涎を禁
じ得ぬ事どもが僅か二尺にも足らぬ手
紙の内に惜しげもなく擁護されて居る
流石に山陽を生むほどの女流の手紙で
あると感じた、左に箕面賞覽の處を抄
録せんか
（前略）廿三日朝出立兵庫迄参とまり



雅俗
相半録
（二十七）

春城學人談
鼠巢庵編

山陽瑣々談 (5)

趣味家としての山陽

（5）

世には、相當に詩を能くし書を能くする人にして、其實甚だ無趣味なるがある。此の如きは所謂學者と言ふ側に殊に多い。

山陽に於ては甚だ他方面の人であつた、幼少の時から軍書軍談を好み、其道に通じて居つた。山陽のおぼさんの縁付いた尾藤二州の處へ、山陽は少少遊びに行つた、處が、二州との間にいつも歴史談や軍談が始まつて遂に夜深かきをする。すると尾藤の夫人が出て来る「また久太郎が長話をして夜ふかしをして困る」と小言を言つた。山陽の歴史趣味は後に日本外史を書いた事に見ても分かる。又其の文章には何に限らず歴史上の例を引いて來て綴を成す、殊に其の詩に於ては歴史上の材料が至つて豊富である、是等に見ても歴史趣味の深かつた事は言ふまでもない。

△山陽の詩と書

又山陽は詩と書に深い趣味を有つた事も勿論で、此の二つにかけては、彼は天才と趣味とを併せ有した。書に就て言へば、所謂讀りの手筋で、一族皆能書家揃ひ、山陽は之を繼承して更に一步を進めたものと云へやう。詩に於ては、彼は一種の天才で、一族及ぶ者はない。彼が詩作に趣群の天分があつた事は、左の一例を見ても分かる。當時武元登々莽か古詩韻絶を著した之は古詩体を作るの法を初めて正式に教へる本である、山陽は其草稿を一す見て早くも會得し、其本の出版ならぬ前に「シ」其法に依つて古詩を作つた、實に敏捷な筆をやつたものであつた。

山陽は詩書の外に書も相應に出來た。敢て本式に習つたのではないが、書の趣味が豊かであつたに加へて彼が胸中の理想の山あり河あり彼は之を描くのだ、本より素人筆ではあるが、一代の才人として蕙香の多い人の書く所故一種の風韻があつた、爲めに其書は廣くもてはやされ、書師の作品以上に尊敬され、時には王侯貴人からも依頼された、處が山陽がつと氣取つて「我は書師に非ず」と列ね付けた事も度々ある。

友人竹田曰く「山陽は執着が深い、一旦手に入れたやうと思ひ立つと如何様にしても目的を達しなれば止まぬ」と。嘗つて山陽は、竹田が他人の爲めに書いたものを無理取りをして「他人の喜ぶ所は、我も亦之を喜ぶ、他人の珍とする所は、我も亦珍とする、他人の者を横取るのも亦一快なり」などと云ふて居る、友人竹田の書に對してさへ右の如き有様故、竹田以上の名書を手に入れんとするに就ては、我が野望に任せて無理なことをしたことも必ず多かつたに相違ない。

此の題語にかけては、山陽は古今獨歩と言はると、竹田が其の精神を簡めた書に「山陽の外一語を著るを許さず」と題して居るのを見ても、山陽が如何に題語に妙を得たるかを知るに足る。當時の學者が書に題するものは皆月並で後等の多くは書を解しない、従つて、題語も實め過ぎたり、書の精神に觸れなかつたりで、餘り要領を得たものはない。獨り山陽は、自ら書を作り又題に長じて居るから、痒い處へ手の届く様かびつたり動かぬ處を題語とする、其古今獨歩たる所以は茲にある。



雅俗
相半録
春城學人談
鼠巢庵編

山陽の執着力は恐るべき者であつたから、其癖は皆珍とするに足る者で、今日あらちらに藏されて居る山陽の舊什を見ると如何にもよい者が多い。

嘗て山陽は、竹田が他人の爲めに書いたものを無理取りをして「他人の喜ぶ所は、我も亦之を喜ぶ、他人の珍とする所は、我も亦珍とする、他人の者を横取るのも亦一快なり」などと云ふて居る、友人竹田の書に對してさへ右の如き有様故、竹田以上の名書を手に入れんとするに就ては、我が野望に任せて無理なことをしたことも必ず多かつたに相違ない。

子
孫

してある所から考へると、生家の本を
拙き来た者で山陽が求めた本でない
車がわかる。
山陽が唐宗八大家文に評語を施した
者が今刻本となつて居る、さすれば八
家文位は所持して居つたであらうと誰
れも思ふも無理ならぬが、實は其原本
も山陽の蔵書ではなかつた。山陽の友
人なる雲華が、各地を巡錫に出かけ
る時、山陽の處へ自分の八家文を持つ
て来て、「君も酒ばかり飲んで居らずと
閉めれば之にも評語を加へたらどう
か」と其本を差し置て別れた。山陽は
始めて其氣になり、評を書き始め遂に
幾年か経て評語が終つた。右の由来は
刻本には記してないが、山陽の家に藏
する自筆の評語本には、朱筆で終りの
一枚に其の意味の事が書いてある。私
の家に頼三樹が寫した同物の者があ
るが、矢張り同じ文言がある、先年頼
家に就き其本も見えた事がある、夫れに
は毎冊雲華の印が捺してあつた。して
見ると、當時世間に有りふれた八大家
文すら山陽は所持し居らざりしことが
わかる、つまり山陽は圖書に對し一向
趣味を有して居らなかつた。

から見ても、山陽は印趣味に深かつた
事が分る。
山陽には又骨董癖も有つた。其の藏
品も可なり有つたらしいが、多くは始
御門の戦で焼失して今は無い。僅か
に残る一二に就いて見るに、彼の骨董
趣味も高かつた事が分る。今日頼家に
残る古銅の花瓶の如きは、唐時代の物
で、珍しい者である、以つて一斑を
知るに足る。其外文房具など一品を得
るにも、山陽は念を入れて心がけた事
は、其の折々手紙にも現はれて居る。
前述の備中の小野家から、何か贈ら
れた時の山陽の書状が、今も小野家に
珍蔵せらる。却々趣味ある手紙で、
贈られた物を書齋に陳列し、夫れに、
自分の誇りとする種々の骨董品、書、
畫、文房具などを取合せて飾り立てた
事が、手紙に細かく書いてある。骨董
に就ては病膏肓に入つて居りはせぬか
と思はるゝ程である。



雅俗
相半録
二二九



雅俗
相半録
二二八

△山陽瑣々談 (7)
趣味家としての山陽(つとぎ)
山陽當時には文人の印刀を弄するこ
とが流行した。山陽も深き印趣味を有
つた一人である。之は血統から來たと
も云へる、山陽の一族中、立齋と云ふ
が有つて家刻には素人を脱し、印人中
にも相當な名を取つた人である、加ふ
るに、親の春水も印刀を弄んだ、春
水の用印は多く自刻である、春水は死
ぬ時遺命して「己れのいたづらに刻し
た印は盡く壊せ、一顆も残すことは
ならぬ」と言つた。遺命であるから家
人も止むなく、折角の記念物を惜しい
ながらに、皆少しづつ刀を入れて、申
譯までにきずつけて遺命に應じた、
夫れが今猶も廣島の頼家に残つて居る
こんな次第で、山陽は系統上印趣味
があつたのである。私は四五年前京都

△山陽瑣々談 (8)
趣味家としての山陽(つとぎ)
猶ほ他にも山陽が廣く趣味を有した
事の一例として洩しがたきは、彼が平
語を語つたといふ事である。人の語り
傳へは、彼は平語に相當の造詣があつ
たといふ、平語の如き者を山陽が如何
なる機會に語つたかと云ふに、重にも
家庭で語つたらしい、山陽の母梅麴の
日記の中に、期間の消息が窺はれる。
香川景樹が歌の相手として梅麴と同席
の機會が多かつたが其の折りに、山陽
は座興として平家を語つた事がチラホ
ラ日記中に見えて居る、梅麴も此の平
語には少しく閉口した氣味で「又變が
平家を語つて人を困らす」といはぬば
かりの筆つきで書いて居る。
元來平語は、宴會の席上などに語る
様な性質のものでない、矢張り家庭で
秋の夜の雅興に語つた位のものであら
う。兎に角山陽は此道に長けて居つた
と見へる、或る人の説には、山陽より
も門下生の某二人の方が遙かに出來
たと云ふが、其人々の名はわからぬ。

の頼家で山陽の遺印を見た。往年始
御門の戦に、頼家の所藏は多く焼失
したが、印文だけは持出して全部残つて
居る。當時印材などは今日と異り、質
朴な粗材が多かつた世に、流石に山陽
は其趣味が深かつた爲め、特に良材を
選んで居る、山陽の用印の中に自刻
の者もある、亦友人の爲めに刻したの
者もある。竹田が苦心の畫を送つたに對
して、山陽が禮をして、「小白石翁の
四字を刻して送つた事もある。上手と
言ふでもないが、矢張り一種の風韻が
ある。
當時細川林谷と云ふ篆刻の名家があ
つた。最初山陽は此の人に餘り感服し
なかつたが、或時、偶々其人の作を見
ていたく其の精技に感服感服ならん
居つたのが、遂に跳ね起きて、林谷の
印を拜し、自分も林谷に托したといふ
話がある、竹田の書いた物の中に出て居る。
蘇氏印略といふ、有名な、支那の印
譜を日本に覆刻した時、山陽は其の序
文を書いた、夫れがどういふ都合か、
載せなかつたが、原稿は今私の家に存
する。確かに此印譜の序文を書くに適
當する文人は山陽の外は無い見等の事

山陽の平語の師は藤井雪室と云ふ人
であつた。此人は京都の某豪商の子と
生れ、道樂に耽つて家業を棄て、文藝
に志し、平家を語るにも堪能であつ
た、山陽も一時は眞面目に此人に就て
學んだものらしいので、琵琶も立派な
ものを持つて居た、其れは「須磨」の銘
があつて、今は京の某寺に納まつて居
る。寺では珍蔵して亥りに人に示さな
い。富岡鐵齋翁が嘗て見た話には、な
か／＼結構な琵琶で、最初は同業者堀
景山の所持であつたのを山陽が繼承し
たものだといふ。個様な結構な琵琶を
持つて居た事から見ても、山陽の骨董
趣味の一斑が窺はれる。
猶ほ山陽はもう一面の琵琶を藏した
其銘は「白浪」と言つた。之が嘗て京都
で賣物に出た事がある、箱書きも山陽
の自筆であつたといふ。處が白浪の二
字が面白くないといふので、人氣が付
かなかつた。今は何うなつたか行衛が
知れない。兎に角是等に見ても、山陽
は普通文人の餘り心掛けない音樂の方
面に迄も趣味を持つた事がわかる。
山陽は酒家であるけれども、煎茶の
趣味もあつたと云はれて居る、平生風

山陽の
海

流を好んだと思はる事、竹田の題跋に、嘗て山陽が竹田の畫を請はん爲め、朝早く己が書齋に種々の飾り付けをなし、それへ竹田を請じて畫を乞ふたことが載つて居る。又書進の際には、毎に新しい花を瓶に挿むたと云ふことと、水仙と梅を特に好んだと云ふことが竹田の題跋に見ゆる。山陽自身も自分の著作の大部分は、水仙と梅のお蔭であると言つて居る。其の意は單に此等の花で精神を喜ばせたばかりでなく、此等の花の開く時期は、歳暮の暮れで世間が忙がはしく、訪客も少ない所から、靜かに著述に耽る事が出来たと云ふのである。して見ると、書齋の名の山紫水明と云ふのも看做ばかり風流であつたのでなく、内容も風流であつた様に思はれる。



雅俗
相半録
（三十一）

春城學人談
鼠巢庵編

を他に預けて利殖を計つた事も疑がな
い。小竹の家に存する幾通の手紙に利殖の事が頻々と出て居る。又、山陽が極めて悪意にして居た備中玉島の豪農小野家に就つて居る手紙を見ても潤筆料の金を托して利殖を計つた内情が明かに載つて居る。表面は落着落着然れど裏面は細心にして金儲の事に手ぬかりが無かつたのである。
山陽は敢て大旅行を試みた。九州の果迄も巡遊した。之を普通に考へると旅費其他の失費は多かつたらうと思はれるが、實は此の巡遊徒爾ならず、此旅行も亦彼が収入を計る一方法であつた。表面山陽は、司馬遷氣取りで天下を跋渉し日本外史の材料を得た様に云ふて居るが、之を反面から見ると、此跋渉も實は潤筆料の増殖運動であつた。苦勞人で、萬事に抜け目のない山陽は京都から九州迄の間に隨所停留場を設けた。其處では門人關係の土地の名望家を鎮臺とした。此の門人の信用と勢力を以て盛んに山陽を賞揚する。同時に山陽の作を周旋する。山陽の隨所に其地に向つて人氣を取る。潤筆料の収入の多かつた事も想像し得らる。

△山陽瑣々談
山陽貧富論
（9）

世間、山陽を見るに、多くは其の青年時代に偏して居る。親の家を脱走して四方に流浪し、放蕩無頼、兩親を困らした。即ち、天才肌の放埒の経歴を見て、彼れは一生家事を顧みず、當時の文人に有りふれた落着一撃張りて、子孫の計などは一向考へなかつたと思ふ者が多い。彼が文章を讀んで見ると如何にも奇抜で痛快で些事に拘泥せぬ豪放の氣が漲溢して居る。文化文政のの潮は、支那の文人氣取りで、豪放落着を最も大切な風格とし、金錢などの話は、表面大の怪物とした。然れば山陽如き豪い態度の人間は本より金錢に淡く、常に貧居して、子孫の爲めにも計を爲さざるものと思はれたも無理は無い。
處が、事實は然らぬ。山陽研究が追々進んで甚だ案外な結論に達した。山陽が何時頃か身後の計を爲したかと云ふに夫は分らないが、没後に未亡人が親戚友人に寄せた手紙に見ると意外に多額の財産を残して居る。勿論あれは山陽の著述に於ては、餘りも



雅俗
相半録
（三十二）

春城學人談
鼠巢庵編

△山陽瑣々談
山陽貧富論（續）
（10）
玉島の小野家などは、質素な家風で、山陽の爲めに利殖の勢を取つたが、敢て多くの金を投じて道架に山陽に書かせる事などはしなかつた。然るに、尾ノ道の橋本に至つては商人肌であるから山陽の爲めに消費を惜しまなかつた。曰く「私は金を出す事は辭さない。唯だ足下の學生の大作が欲しい」と言つて、そして當時非常の高價な金箋を出して山陽の書を書かした。山陽が橋本一家から得た潤筆料でも少なくなかつたらう。かくして山陽は、養中便々を一巡廻して歸る時には、囊中便々たるものがあつた。
山陽が畢生の事業たりし日本外史其他の著述は牛存中にはまだ収入を見る

身後の計が考へ付いたとすれば、相當の資産を作り得る譯であるがそれにしても一顧夕の心掛で出来たものでは無い。
當時の文人達は、皆な詩文によつて衣食したものであるが、多くは其日暮らし同様で餘裕を残すべき程の収入は無かつた。後世に至り其の作に相當の價も付いた様なものは、生前に於て可なり。其間に立つて山陽には生前已に相當の潤筆料を取つた。世人も亦之を與へて惜まず、爭ふて其の作を珍重した。

然れば山陽生前の収入が、既に相當のものであつた事は略々推測せらる。山陽が山陽の潤筆料を定むるに苦心した形跡がある。即ち彼の友人篠崎小竹が、常に山陽の臺所方を勤め、山陽の書讀詩文に對する潤筆料を定むる役目を取つた。山陽は自分の口からは言ひにくいから潤筆料は小竹に聴けと云ふが常であつた。小竹は如才なく立廻り此の作は殊に上出来であるに依つて、少くとも幾らの謝禮をせねばなるまいなどと太鼓を打つた。

詩には行かなかつた、此等は死後子孫のために大なる収入を生じ、今日山陽の孫に當る京都の頼家が、富裕であるのも、畢竟山陽の遺著のお蔭である。山陽にして若し豪放唯だ酒に耽るに當て産を治める意が無かつたらう。潤筆料如何に多くとも、追付く譯のものでない。唯だ山陽は締り屋で貨殖の術に長じたから、多くの産を子孫に残したのである。此事は委しく雑誌日本人に書いた事もあるから、茲には略するが、兎に角山陽も京都人たるを免れな。口や文章には如何にも豪放な人らしく現はれ、酒は灘の醇にあらずんば飲まず、魚は晋湖の鮮にあらずんば食はず」など言つて居るが、之も一つは文章の綾で、實は平生鹽解ばかり食つて居たと云はる。頼家の贈謝と言ふのは當時評判であつた位だ。又文章なども酒を飲む時には門戸を開放した様にあれど、實は晩酌の時には堅く門を鎖して人を入なかつたとも云ふ。山陽は決して不締りな人では無かつた。
山陽の歿後、未亡人梨枝が、第一に廣島の頼家即ち山陽の生家へ送つた手紙、第二、玉島の小野泉藏へ送つた手紙、第三、前中の秋水と云ふ人へ送つ

た手紙に最も詳しく家事上の事が書かれてある。其中に遺産の事も出て居る。秋風に送った手紙には、夫の死を悲しんだ後に、併し幸に、夫は、生前、死後の事を慮り、後を能くして置かれたので、今は別に不自由もない仕合せの境遇である」と語り、目下京都の住宅も、地所は他人の物ながら、邸宅は自らの物である」と告げ「尚ほ、故人歿するも二人の子を養ひ、家格を改めず体面を保つて行くことが出来る」とかどと書いてある。

又其の手紙の中に、山陽が歿して多くの遺産を残した為め、近隣の者は嫉妬心から、種々な事を言ひ立て、い來つて媚を呈した連中迄が、後へ廻つて、色々の隙口を吐く者さへあり、人情反覆を恐るとの意を陳べて居る。是等から察しても山陽が少なからぬ遺産を残した事が分かる。又廣島の實家へ送つた手紙には、家計向きの事を詳しく書き貯金が三口あることを言ひ、止むなく第一の貯金を引出して遣へと運命の次第を書いて居る。

以上の如くであるから一概に山陽を豪放の人と解するは皮相の見である。分の孝養を盡す考である事、今後の生活は、大に儉約を要する事あるが、然し他の方面は如何に節しても母へ對しては十分の事をせねばならぬと、書し、又先妻の子たる餘一に對しては、異腹なれども、夫の歿した上は、其人を主人とも仰ぐと書添へてある、之で見ても頗る温厚な婦人で、流石三樹の如き傑物を育てた母丈であつて、其の確りした心掛けは感ずるに餘りある。かく、夫人は、山陽に嫁した事を不釣合と考へて深く謙遜し、夫を天下第一の人物として我が光榮とする心から、山陽に對しては能く勤めたもので、爲めに一家も平穩に治つたのであらう。山陽は一家の主人としては随分我儘な難物であつたに相違ない、而るに一向風波もなく、平和に往つたのは、世婦人の淑徳の爲めであつたと云ふてよろしからう。若し山陽の内人として一時山陽の夫人たらん野心を抱いた江馬細香女史が、果して山陽と同棲の身となつたとしたら、どんなものであらう。細香女史は醫者の娘で文學にも長じ、山陽の方でも、下心があつたと言はるゝ。然るに其頃は山陽が未だ名を揚げ

蜀山人の狂歌を見て、彼は朝から晩迄笑ひ興じた、と思ふは皮相の見で此人も案外細心の人であつた。



雅俗
相半録
——(三十二)——
春城學人談
鼠巢庵編

△山陽瑣々談 (11)

山陽の室に就ては詳しい事は分らぬ唯だ其名はありと呼び、或は之を梨枝と書し又梨影とも書く、影の字は恐らく山陽が文雅的に選んだものであらう此主人の素性に就ても能くは分らぬ山陽が、其友人小石元瑞と頻々往來した頃、始終酒席に周旋した女中が山陽が所望して、元瑞を親元として強ひて妻に貰つたといふ、此の婦人は容色があつたか否それも分らぬが兎に角心かけの好い美質の女であつた様である。勿論女中境遇の女故教育も無かつたら



雅俗
相半録
——(三十三)——
春城學人談
鼠巢庵編

△山陽瑣々談 (12)

山陽が其師菅茶山の喪に赴いた時の

うが、心掛けが好い爲め晩年には相當の婦人になつた様である。私が嘗て京都の頼家に就て種々山陽の遺墨を見た中に、半紙四ツ折綴の通帳の様なものがある。袋の書き付けは、山陽の子支峰の筆で北堂の書であると思ふ。其を披いて見ると、山陽の請書を筆記したもので、全部假名で書かれ、本字は一つもない。頼家の主人の語るを聞くに、山陽が支峰や三樹に論孟の講義をして聞かせるのを夫人が隣室に在つて傍聴し、内々筆記したものだと云ふ。後で子供等に質問を受けて答が出来ぬでは子供に對し不面目と、女ながら一心に筆記した心掛がそこらに感心である。山陽の歿後夫人が備中の友人秋水と云ふ人に寄せた手紙には、生前の夫に對する態度が能く現はれて居る。自分が賤しい素性ながら、山陽程の夫を持つた事をひどく光榮とし、且つ自分の身分不相應の地位に上つた事を平生切に感謝して居る心根が筆端に現はれて居る。そして、廣島に居る山陽の相に對しては、今度も從來と異ならず

事は他の山陽傳にも載つて居るが其際の逸事に就いて近藤南洲翁が私に語つた事を録する。山陽に茶山の喪に赴いた折師の遺物を貰ひ受けた中に茶山が平生持馴れた杖があつた。之は九節杖の銘があつて竹の九節ある杖である。山陽は之を大切に思ひ、携へ歸る途中、大阪邊で紛失した。山陽驚いて兼て懸念にして居た大鹽中齋、其事を語り搜索力を依頼した。大鹽は急に下僚に命じて遍く搜索した結果、難なく見付かつた。山陽は深く喜び、一詩を送つて大鹽に謝意を述べた。處が其詩は後に或る好事家の手に入つた。其頃其人が近藤の處へ右の詩の一卷を持つて來たのを見ると、別に横巻が添ふて居る。此の横巻には、杖の圖があり、山陽に縁故ある諸大家の題跋もある。却々面白いものであつた。持つて來た人の話に、此の九節杖は今も或る書家の手に残つて居る。初め詩を得た人が杖を其書家に請ふたが、書家はどうしても應じない。その代り杖を畫にして與へた、其れが此の横巻で、其人が、此畫を持廻つて山陽に縁

故ある諸家に題歌を書かせたのだといふ。之が今では好事家間に有名なものとなつて居る。

山陽が樂翁公の知遇を得た事は隠れない事實である。嘗て樂翁公の使者が山陽の京都の居を訪れた時、山陽は酒を設けて厚く之を款待した。使者は頻りに窓外に鴨川の景を賞して、山陽が形勝の地に居を占めた事を賞した。折ふし山陽の母の梅園も出て来て、鴨川に在つたが、使者に向つて語るには「鴨川の景色も好いが、残念な事には京都には杜鵑が居らぬ」と云ふと、使者は之を聞いて「なる程京都には杜鵑が居ない様だが、江戸には澤山居る、私が歸つたら何んとかして送りませう」と云ふた。

卷四である、夫れは有栖川宮から出たものである。山陽は有栖川家の姫君に手本を書いて上げたことがあつて此の手紙には其事が載つて居る、此の大隈家の一巻或は有栖川家へ差出した手本などであるまいか、終りの署名の謹啓であるなどから考へると、どうも左様に思はると。又他の一巻は半切り形の手紙を十數通集めたもので、中には面白いものが澤山有つた。山陽の手紙必らずしも珍らしく無いが此の大隈家所蔵の一巻は逸品であつた。嘗て故森田忠軒が民友社から頼山陽を出版した時、材料を多く此巻から取つた。

趣味がある處から、列々に骨董屋に命じて、大隈侯の旅館に種々の室内裝飾品を持ち込ませた。其時隨行中の半田口元學氏が、書趣味家である處から、多くの物の内山陽手紙の一巻を見て、早くも逸品たるを知り、大隈侯に出陽趣味などあるべきでないから、必らず自分の手に入る者と期して居た。處が、大隈侯歸京の間際に、侯は自ら山の手書骨董品を取分け、さて大ザツバに此の一山いくらと價をマシした、此の大業けな買ひぶりに骨董屋も恐縮したと云ふが、其の買はれた一山の中に此の山陽の書簡も交つたので折角儲てにして居た半田口氏は失望しひどく残念がつたが及ばなかつた、私は數年前同氏と會飲の節此事を聞き其の由來が始めて分つた。

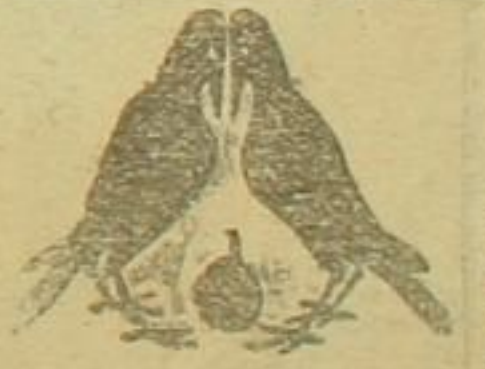
朝吹氏は之を聞いて欲しくて堪らぬ、高くて好いから買つて貰ひ度いと云つて自分で親しく見せずに、百圓の金を無理算段して終に買ひ込んだ、夫れが、古今集の假名帖であつた。氏は之を珍蔵すること多年。嘗つて横濱の富貴樓に富貴家が大隈侯を招待した事があつた、其時床飾りにして右の珍蔵を自慢に持つて行つて床に置いた、處が意外にも大隈侯は、之を見て面白くと感服され、一體誰れの物だと問はれたから、氏は自慢の一軸である由を語ると、大隈侯は、氣に入つたから買ひたいと云はれ、氏も已むなく愛惜し割愛したと云ふ。

朝吹氏は右の如く由來を語り了り、私に向ひ、貴君は折々大隈家へ参らるゝから定めて彼の一巻を見られた事もあらうと云ふ、私は答へて「それは、久しく早覺えて居るが、由來を聞くは今が初めてである、惜しい事には十年ほど前紛失して今は無い」と語ると、朝吹氏はひどく残念がつて居た。

の詩はどんな者か、人多く知らぬ。私は偶々、京都に於て其の稿本を編にしたものを見た事がある、夫れには山陽の孫に當る、頼潔が箱書をして居る。同時に梅園の歌も書かれて居る。就ては未だ此の長篇を知らぬ人の爲めに左に頼潔の題跋共に掲げる。

畫社鵲行謝
白河田内君月堂、月堂以己卯春、訪吾京寓、見吾母、談及杜鵑有無、今茲寄此畫、畫者爲文晁、題詞實爲其君侯樂翁公親筆、吾驚喜出望外、賦此寄答月堂、吾母來自白河關、割雞共舉半杯酒、隔國日指暮春山、母日此間無杜鵑、君云關左到處聞、會惟一樣不如、漢人所悲和人歡、應緣流生楚歌、乍聞相能自古然、君去三年寄信到、併緘一紙寫謝詞、使吾賦親朋慈額、雖不聞聲猶見貌、上有元侯題墨痕、春月併照北堂與、侯是今代裴晉公、知君綠墊侍銀釘、夜聞言及鴨水語、呼史爲寫啼血紅、君不見杜甫入蜀拜此鳥、爲傷世網方亂擾、又不自那雅在洛開此聲、預憂君法海字號、如今文政率畫一、吾自童年記君質、唯願蒼天不變公無疾、杜鵑有無非所恤、吾儕母雖安其果、唯乳將頼鵲春力、不唯此圖比顯與、頼潔の題したる箱書左の如し、(七)頼潔一語、今又觀焉、

不勝歎賞也、梅園編人亦當時咏一首曰
郭公つれなかりしもなかくに
たくひまれなるおとつれぞきく
畫則文晁手筆而題詞者爲樂翁公、故末句及之耳、併錄以告鑑者云、辛亥之六月 頼潔



雅俗
相半錄
春城學人談
鼠巢庵編

△山陽瑣々談 (15)
大隈家に山陽の墨蹟が二巻あつた。一は古今集の序を全部平仮名書きにした一軸である、頗る優美に書かれて終りに年號あり、安藝之臣襲と著してある。山陽の書は多いが、平假名ばかりのものは洵に珍らしい。實に山陽の遺墨中の逸品であつた。

Blank ledger page with 12 vertical columns and a double-line border.

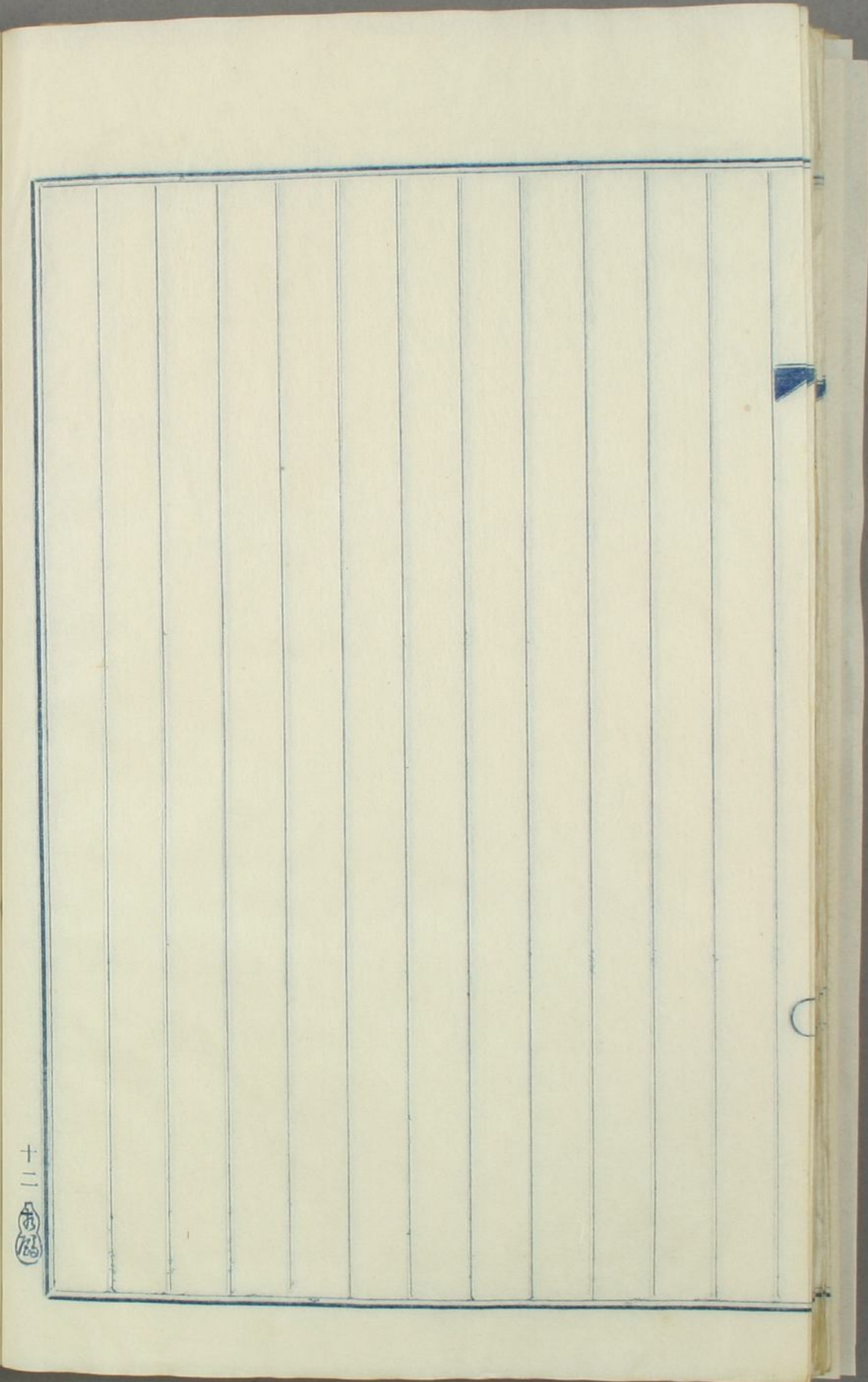
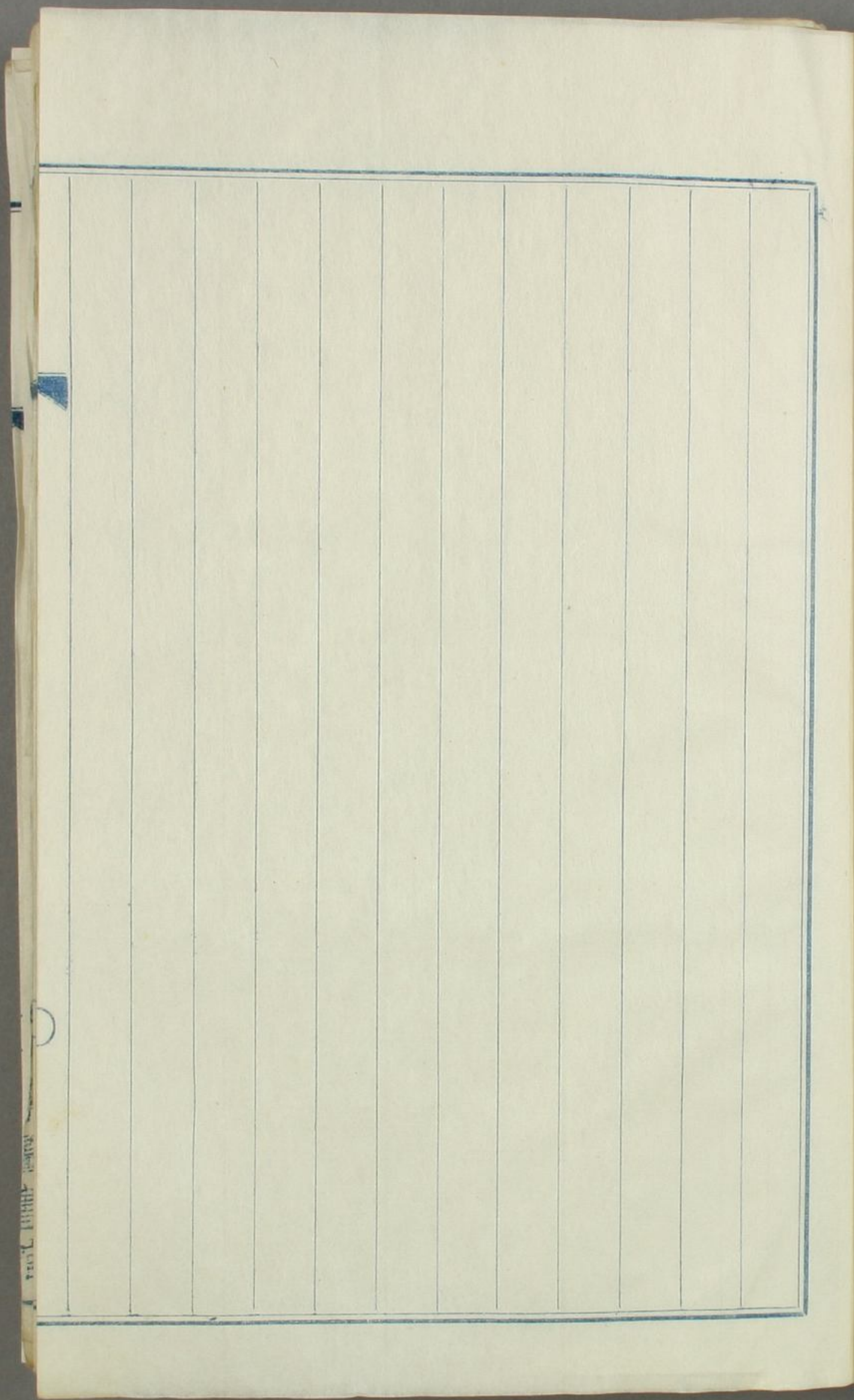
Blank ledger page with 12 vertical columns and a double-line border.

Small vertical text on the left margin of the left page.

十二

十二

Small circular stamp or mark on the right page.



○頼山陽臨終亦く歎息の事聞し細く記し
る山陽死後梨影の書状傳中にも記す所
ありと云々一七〇〇年未だ記す事なし傳
壇の趣ありたや中一 頼山陽の書状を

集をえよまに諸毒瑛々海中一 廣江を印
梨影の書状を一 記す所あり又 載せし
事一七〇〇年見よまに山陽臨終迄に
事ありと併に記す生の心づけを記す
こと一 頼山陽の書状を一 頼山陽の書状を
書せしもの一 山陽傳を頼山陽の書状を
かゆぎりある梨影の書状を一 記す所あり
の事ありと云々一 七〇〇年未だ記す事なし

大山正年八月七日塩原根川橋上にて

去年辛辰九月廿三日に頼山陽歿す此年の
十一月に内人の...

頼山陽の書状を

子ありうつし候夫を又申候と安心いなり申す
た、内内あし被し候所、私おぬをさきよりそ、う
しうにひるは申すかと申すも、申すや夫きうう候
らん、いつとき候、誠りくたしうあるうう候
んと、若し候は、候くも、なんぐとのよは、ん
と氣、めんは、は、し、る、う、う、う、う、う、う、
おい、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
比に何、う、あ、この所、う、う、う、申、は、
う、う、何、あ、は、う、う、う、う、う、う、
候、う、此所、地、う、う、う、う、家、う、家、あ、は、

う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
候、や、う、夫、を、た、の、う、い、う、う、う、
に、い、う、う、又、二、印、三、本、三、印、
う、う、う、う、候、あ、く、は、ん、
か、う、申、も、ま、く、う、も、う、い、
う、う、候、三、才、の、う、ま、
い、候、二、三、本、木、に、は、
ハ、か、あ、二、本、木、あ、
う、う、候、心、
し、候、や、う、申、も、
百、う、き、う、う、
あ、候、う、あ、
ち、う、い、ん、中、
あ、候、う、あ、

じくあまき〜〜〜私にたしかに
申卷、あまき〜、事去る一が有り候節、子
とい一人は四元を世治いり〜申卷、私
か三人は誠のたいき〜、又と四元を〜かくお
世治より候〜大ぬにかた〜候、何れ
本を、誠一をえん候、三人と存候、待入候
誠りく此世の七遊ち、あかん守中〜とある
日々つと〜、左様〜は、あぬあさ
やるせ〜、御さつして〜、其由も、主人
がのう〜、おにもんにさ〜人にも、大の
いりぬうけんか〜、あ〜こん〜の
あうにあは〜、い〜心ばい〜けきの中

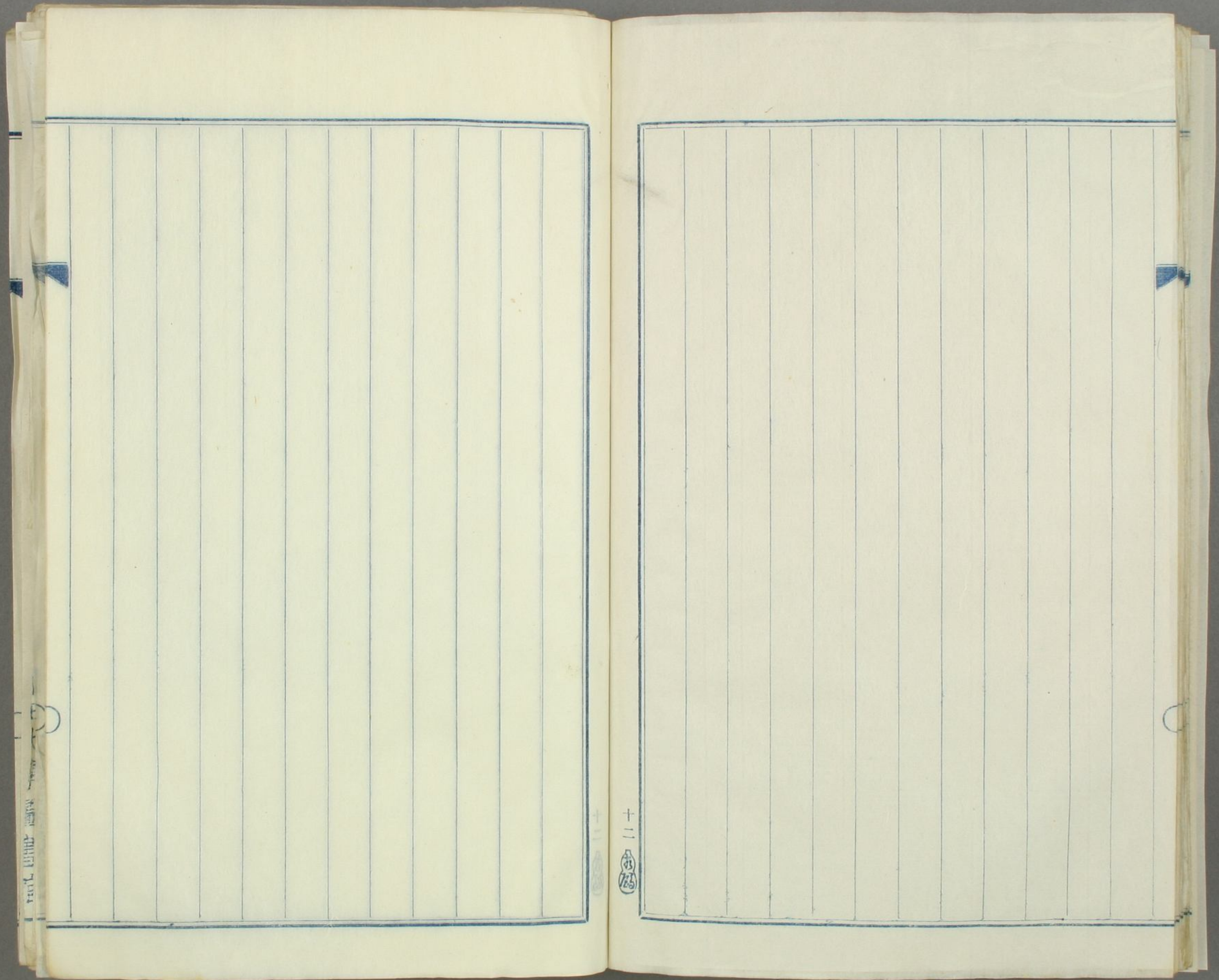
にとい〜候、まの所は〜、あとの所へ
けつ〜と候、候〜、まは〜、い〜、
さう〜、あ〜、あり、めつ〜、申出か〜候、誠
に申わ〜は、御くや〜、殊〜、まを朱お〜
下さん、奉、早〜、に神〜、ま〜、申候、まが
いんをいん知事ふ〜、い〜候、一、本つ〜、あり申候
御んて〜、何れ私〜、御さつして〜
私も十九年の分〜、候、誠、あ〜、か
ちよ〜、候、い〜、あ〜、の所、あ〜、い〜、何れ
私に〜、ま〜、ん、私にお〜、候、
あか〜、十九年の分〜、あ〜、の〜、い
る人をおつ〜、ま〜、其所、あ〜、つ〜、け

何れと云ふこと心はいらぬ何れ
ちやうどさうさうと云ふわけに
よのちと申候大改修候事
中もふかふか又さういふ候大
七の十日も為氣さうさうと云
んさういふ候事
物さういふ候事
ふいふ候事
助おる次第もさういふ候事
候かすさういふ候事
概らん候事
御事候事

さういふ候事
が五月に七候いつこに
どうぞ候事
いさ候事
候とせ候事
先元候事
あま候事
小量候事
とある候事
稿七候事
高申候事

此の現存する世あるもの人未だ詳くはるる事
山功の遺書を後修松陰に託すの事此等ゆゑを
托しつと云ふ目へとも出版の事のみ松陰遺稿
を多分たつこと此書ありあるあることし山功
没後いづくの家事ありたるや勿論ある事
中々家に自分といふこと又其所を轉て
ゆまんの松陰家計もきみ得るもの成る
のこし未だをいとお心せし見たるを又ん山功
うく世に遺るべきことなき家故に松陰一に
人のあつてしと云ふも亦あり又山功没
の節に松陰一もあつてしと云ふも亦あり
梨影の松陰を頼るとする所梨影の人格と松

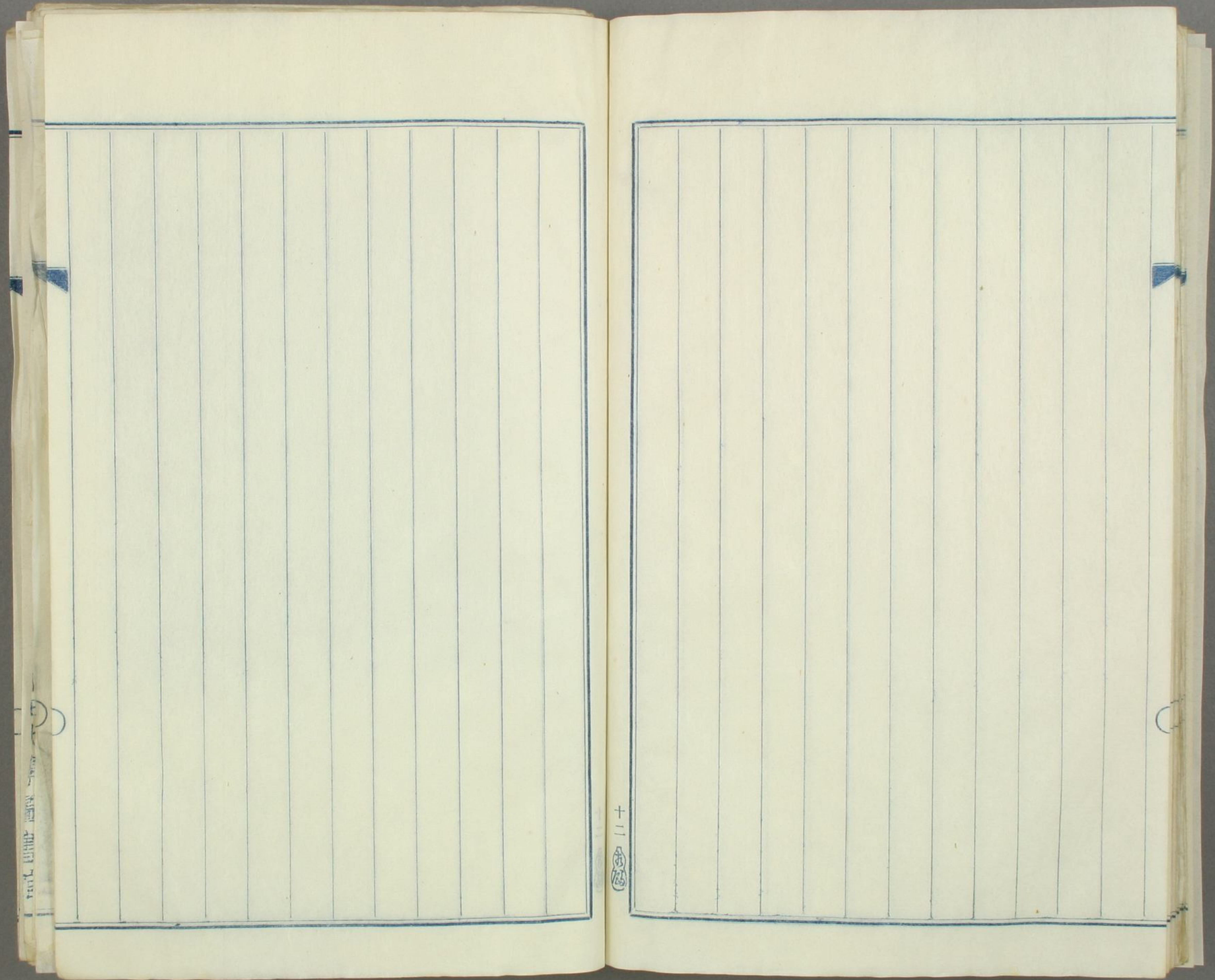
(右得)
人格と係せ見えし山功没後生前恩を多けんその死
後あるを頼むことと離反しつと云ふも亦あり
を言ひつたり梨影を困らせたる状者中々松陰の
もなきあつたを遺してつと云ふも亦あり又山功没
を良人におつたつと云ふも亦あり又山功没
婢といふし梨影の先向うと云ふも亦あり
を善く但し此ゆへに松陰のつと云ふも亦あり
七十九年同義といつと云ふも亦あり松陰の
七角七この由りの状を考へて松陰のつと云ふも
の董ゆもいふと云ふも亦あり又山功没後松陰の
山功の三木三郎をも家に出し京都に松陰二軒を
言ひあつたと云ふも亦あり又山功没後松陰のつと云ふも亦あり



Small, faint text or markings on the left edge of the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

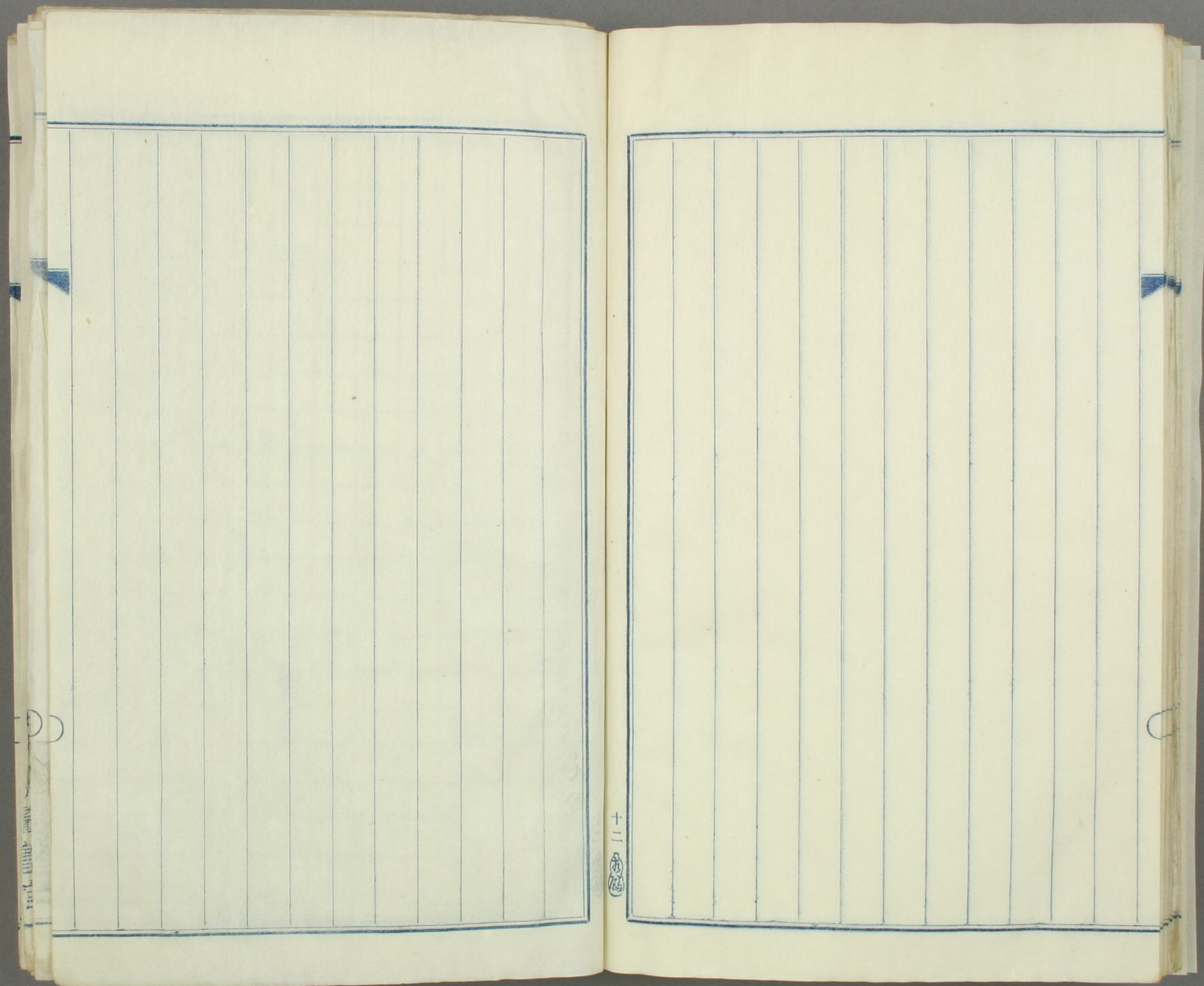
十二
十二





Small, faint text or markings on the left edge of the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

十二
①



rect. 11111111

十二



大槻清準。字子繩。號平泉。稱民治。仙台人。先考磐溪府君堂兄。學昌平校。又遊古賀精里之門。後舉本藩儒員。創建藩學養賢堂。任其學頭者三十餘年。嘉永三年正月十八日歿。年七十八。

文彦滋

○龜井昭陽とは、大なりといふべき道義の士なり。才力亦高く、あめりかやちり、軟久たるなりといへ。せと三太らと称すは、山陽の九州と湯島の折。昭陽は、その中より、昭陽といふより、由緒の著者を示すに、其中より、家史や烽火日誌や録をとくは、山陽を二反を見と烽火の伝むるをいふ志あり。当りその、家史と、記しては、何れも、言ひらうつり、家史と昭陽の最。此是心と志が、日本近代史を出版の文体を倣ふこと、心なるとある。昭陽を家史と記す。

○山陽は文章が宜いから人の説を自分のものとして、旨く文章に作つて了ふ、そして夫れが如何にも山陽の腹から出た様に誰れにでも讀まれる、これが文才の徳と云ふ可きであらう、恐らく其の説の原作者に聞くより、受賣りの山陽の文章で讀む方が、却つて其の意と説を旨く發揮して居たであらう。山陽時代の人で高齡を保つた谷鐵臣の如きは、現に自説を山陽に取られたことは、決して二三に止まらんが、流石に文章が旨いから、人の説を取つたとは思はれんやうに出來て居ると、常に語つたと聞いて居る。山陽は史學にこそは通じて居れ、なか／＼、經書などに涉るほどの餘地は無かつた、實際山陽は經書には通じて居らぬ。然るに文集を見ると、經書の題跋なども見える、是に就いて大阪の近藤元粹老人の話に、山陽は經書に關係する文章を作つたり、引き事をする時には、猪飼敬所の厄介になつたものだ、恐らく文集にある經書の跋の如きも、敬所からの受賣りであらうと話した、或は然らんである。文集に全く經書に關係のあることが無くては學殖の淺薄を表白することになるから、此の弱點を糊塗せんが爲めに、殊に讀みませぬ經書の跋などを作つて、文集に交へたものであらう。

○猪飼敬所は經書には通じて居つたが、餘り人格は高くは無かつた、そこで當時でも兎角の評があつた學者である。山陽も無論敬所などはして居なかつたに相違ないが、自分で利用する場合があるから、如才無く交はつて居たと見える。これに就いて山陽の如才のない性格のほめく一話がある。近藤老人の話に、敬所が還曆の賀筵を智恩院に張つた時、知友門人は多く會つた。敬所は例の獨尊式大氣餘を吐き、天下に學者は自分の外、無いと云はぬ許りに威張り散して居る、時しも山陽は後れ馳せに智恩院に出かけて見ると、例の氣焰最中であるから、態と小蔭に潜んで一席の講談の終るを待つて、席に現はれて挨拶に及ぶと、敬所は山陽に向つて、惜しい事であつた、今ま講釋を終つた所であつた、實はあなたにも聞いて貰ひたかつたと云ふと、山陽は抜からず、實は少しく遅刻したが、御講釋は別室で拜聴いたしました、お妨げをしては

と、玄關に山陽の聲がするので、そら山陽が來たと云ふので、孰れも惶て書きかけの書を片付けて了ひ、素知らぬ風をして居る所へ、山陽は例の垢染みた黒羽二重の服装で遣つて來て、其の隠した袋を捜し出し、己れにも書かせるといきなり數行の文字を、餘地のあらん限り書きつけたので、又た遣られたと皆な々々眉を皺めたと云ふ、夫れが今尚ほ親戚の家に秘藏してあるが、今日では寧ろ山陽の書の添つて居る爲めに値打が重くなつて居るのである。

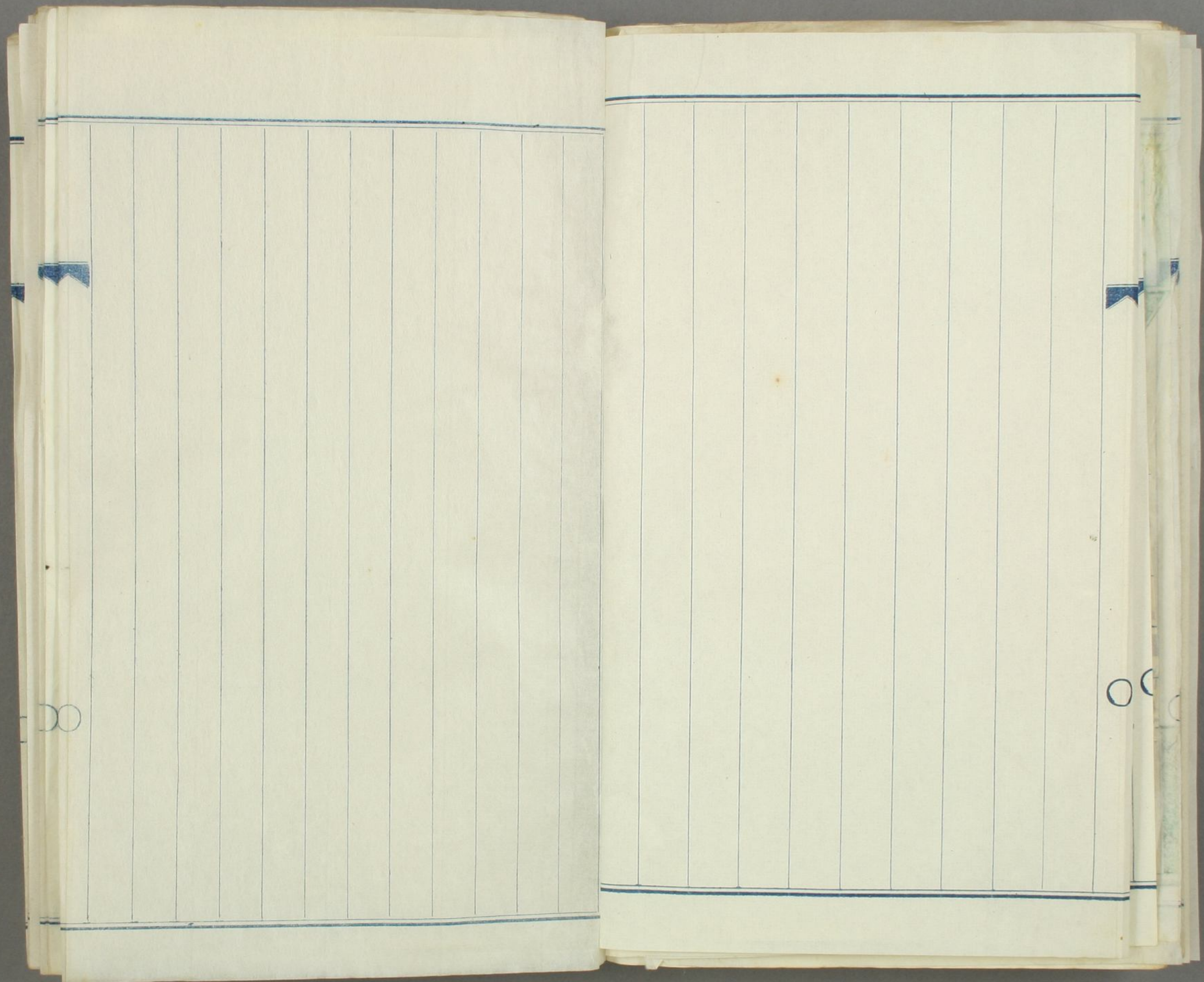
○友人に牧野靜齋と云ふ人がある、此人の祖父に當る人が茶山の廉塾に學んだことがある。其の時分山陽は塾頭を遣つて居つたので、其の困窮時代である。無論囊中無一物で、髯を剃るにも髮結床へ行けぬ、塾生に頼んで貰うのであつたが、靜齋の祖父も屢々剃らせられた、然るに剃るにあたりが柔らかで工合が好いと云ふので、山陽に珍重されたと云ふ話が残つて居る。そんな關係から牧野の家には、山陽の話がいくらか傳はつて居る。山陽の歴史趣味に就いては、尾藤二洲の細君が、山陽の叔母に當る人である。二州も歴史好きであるので、山陽が尾藤の處へ行きさへすると、いつも双方で歴史論が湧く、夫れが爲め時を移して深更に及ぶことがある、さうすると叔母さんが出て來て、又た久太郎がおしやべりをして困る、もう大抵にして御休みなさいと小言を云ふが常であつたと云ふ。又た靜齋は讃岐の高松の人である所から、木村黙老と山陽の逸事に就いても話された。黙老は高松の家老で、馬琴と懇意の關係があつたことは、誰れも知つて居る事實である。ある年木村黙老が、船で江戸へ通ふ途中或る津に

○山陽は豪酒で随分亂暴を遣つて、或は所構はず小便を垂れる、下婢に戯れる、夫れが爲めに謹嚴な人に忌まれたことは確かであるが、但し學問文章見識は、當時に於て既に推重された事も亦た確かである。自分の母方の家に、山陽時代に相當の書を書いた人がある。竹洞梅逸など、友人であつて、朝夕往來をした。無論山陽とも交はつて居たので、此人は山陽の才學見識には服して居つたれど、一面其の亂暴にも困つて居た。此の親戚の書家が京都に遊んで居る頃、一面の七絃琴を製し、或る時竹洞梅逸を招いて、其の袋に合作を試みて居る

碇泊すると、一船の乗組客が皆な争うて上陸した、黙老は船に止つてあたりを見ると、皆な上陸した中に、唯だ一人若い人が居て、脇目も觸らず靜かに讀書をして居るものがある、黙老は之に心づいて、刺を通じて見ると、初めて頼襄と云ふ事が解つて、夫れから後は互に往復する關係が生じたと云ふ。黙老と山陽の關係に就いては、他に聞く所が無いが、恐らく黙老は、山陽の史才に服して居つたに相違無いと思はるゝ事實がある、夫れは外でも無い、讃岐出身の黒木欽堂氏は、曲亭馬琴が寫した日本外史を所持して居る。されば美濃紙の界版の欄心に、日本外史と上頭に刻し、下部に曲亭文庫と刻した、版で用紙を作つて居る所から見ると、態と作つた用紙であることが知れる、そして終りに馬琴が漢文で跋を書いて居る、それを讀んで見ると、きかぬ氣の馬琴も、流石に敬服の意を洩らして居る、扱て此の日本外史は木村黙老の需めに應じて、馬琴から贈つたもので、現に黙老の家から黒木氏に歸した所から考へて見ても、木村も馬琴と同じく、外史にも相當の尊敬を拂つて居たに相違ないやうに思はれる。

これこそ自分と心通を樂むに力の比と云ふと
山陽之平記とてさうゆふが、**愚見**
ひとお骨甲斐とさうして後世に傳へられたる
と云ふは、**有るも山陽の云ふに違ふ、**も俗文の外
史をるゆゑに何の云とさうに、**家史**を世に傳
布しさうに、**昭陽**を往々又云ふは、**一竹の**
馬に云々の文体に、**庶史**を云ふは、**東一之**と
も出まらうの**業**がある、**善道**と云ふは、**東一之**と
稱揚するまじであるが、**とこ**山陽に、**着眼**
點の**甚**れ、**陽**れ、**の**る、**山陽**を其**頃**の

新人と云ふべき程時勢を洞観し、**己**と云ふ
体の體又び、**庶史**と云ふ位もある、**その人**に**古文**
七古又**注**がある、**その**を**理解**せし**出**まらう
扱ふ、**文体**を**己**と云ふ位と**用**ひ、**己**と云ふと、**業**ある
入る、**己**と云ふ、**氷**炭**お**容れぬと**云**ふ、**己**と云ふ
お違ふ、**己**と云ふ、**群**を**己**と云ふ、**己**と云ふ、**己**と云ふ
己、**群**火の**己**と云ふ、**己**と云ふ、**己**と云ふ、**己**と云ふ
己、**己**と云ふ、**己**と云ふ、**己**と云ふ、**己**と云ふ、**己**と云ふ



○次日開：乗じて山陽の題跋を讀み且の抄し一冊成
し初め題跋の刊行本：漏れぬものをおす、而して終
刻本書後集：題跋を讀み感する、山陽の能
文大思、誠見殊にか文：於て之んを見ふ、大体法家、小
文其の如く、もの多し、巧を養ひ自然の如く、無し、山陽

の小品：是至つても皆自然の如く、巧を養ひ、
く、而して自こ、巧を養ひ、
於て山陽法家：題跋す、吾と其の折、漏れ、
信、此、嗟、作、所、の、題、跋、の、如、く、感、ふ、皆、是、ん、天、籟、
山陽の才藻の迸り出する所、他人倣えんと、無かる
也、書後と至つて、刻本三冊あり、往史百家、涉
り、皆、る、論、論、あり、文、後、と、と、長、也、義、深、く、時、輩、後
く、所、と、其、を、異、なり、意、あり、此、の、如、く、其、の、古、後、
の、因、方、：、題、し、る、もの、如、く、爾、り、と、其、も、恐、く、然、る、
事、の、由、著、書、後、に、托、し、て、一、部、の、題、出、を、著、し、し、る、もの、
耶、非、耶、の、山、陽、：、一、部、隨、筆、あり、其、後、題、跋、
即ち是れ、と云ふ、の、説、真、に、高、なり、其、体、道、の、然

んうとおかしらきし
逸事と得ん類

〇〇

○客多而索無聊。皆痛以得字。世間史也。其
中。之。游。此。梅。之。之。傳。有。余。常。之。此。今。閱。歷。
七。質。之。九。美。之。之。能。之。今。如。之。其。之。一。班。之。如。
之。得。字。

游龍梅泉。名邦彦。祥彦。次郎。其先明人。
歸化後世為長崎譯士。文化初。清人以大來。
張萃。末宿崎館。梅泉。之。親善。因。子。其。

畫法。然。所。止。不。多。世。人。鮮。能。知。之。如。僧。織。田。道。高。
幸。春。提。木。下。進。重。法。人。俱。就。之。而。是。清。人。高。
法。從。北。漸。盛。梅。泉。又。如。文。之。與。其。作。賀。儒。臣。古。
賀。教。者。友。善。文。以。初。勅。山。陽。西。游。訪。教。堂。
會。教。者。從。邦。君。之。長。崎。主。梅。泉。家。及。山。陽。至。
長。崎。與。教。者。相。見。梅。泉。亦。彼。之。侍。文。梅。泉。
山。陽。性。尚。傲。長。崎。人。落。其。為。人。而。梅。泉。獨。
善。易。之。後。以。官。書。役。于。江。都。將。歷。訪。諸。名。家。
多。齋。土。宜。首。先。訪。谷。文。晁。通。刺。文。晁。方。作。畫。
近。梅。泉。於。座。且。談。且。画。襟。情。滿。酒。筆。無。滯。
棧。梅。泉。歎。曰。汝。畫。不。日。與。余。同。宗。派。然。其。伎。
未。熟。如。此。其。為。友。也。乃。悉。其。所。齋。土。宜。之。
不。復。訪。他人。其。畫。懷。如此。

○余山陽御免のあの後味とみず軒子の事し
らへん舟と御免の事と見ると後味とみず軒子の事
其の事とみず軒子の事と見ると先流山陰道の由
と京都に土家山陰道の事と見ると先流山陰道の由
後味とみず軒子の事と見ると先流山陰道の由
皇前の御免の事と見ると先流山陰道の由
此山は天下に宣傳し御免の事と見ると先流山陰道の由
阪河の記とみず軒子の事と見ると先流山陰道の由
と舟とみず軒子の事と見ると先流山陰道の由

(の字法)

をゆつてとよまん、吾人の不慮と平素所歎也と品騰
と云へたもの、城路の僅く又車窓より山
の一端を覗、之れを品騰す、と云う早針の極
むありう、所也、余亦少軒子の御免の事と見ると先流山陰道の由
後味とみず軒子の事と見ると先流山陰道の由
余の阪河を往ける山あり、高士淡馬嶺(佐州)
也、其地木露の砂山あり、上物に於て之を物義白
と云ふ、甲州に於て之を御免と云ふ、湖(山陰)
天橋(山陰)北岸に於て之を御免の山あり、と見ると先流山陰道の由
えと云ふ、其実日本名跡の由は入るべきこと、吾郷

四の東國藩系をこ一二あり、此等既と目経歴し
 たりし邪馬流を乞ふ、余の山に眼法しん知心と
 三山の可く、人の邪馬流も往き、なるもの事な
 余の流るるごとく、邪馬流の符あり、なるもの事
 一遊の日あり、余の流るるごとく、余の流るるごとく、期
 待を以て邪馬流の流るるごとく、然るに故ら、
 先望も危えん、概して邪馬流の凡の事と論す
 九の山に、山の形、概して邪馬流の凡の事と論す
 其流の味を別して、其の形の形、概して邪馬流の
 全流に、教養と論す、其の流るるごとく、唯れ流るる
 の故を以て、向雲を、其の流るるごとく、唯れ流るる
 なるもの事、其の流るるごとく、唯れ流るる
 の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 山の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 川の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 一の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 急の念あり、其の流るるごとく、唯れ流るる
 りの流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 余の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 と、其の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 八の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 見ざる、其の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 唱あり、其の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる
 川とせざる、其の流るるごとく、其の流るるごとく、唯れ流るる

新

且つ此の深部馬と山陽の絞河を往々邪馬の終点
と二重の奥に深く秘をえて、其の
間の山を滅すべし、何とぞ造化の秘工
をあらはすやと各々の趣あり、別して四邪
馬河の峯山嶽をあらはすと云ふと、是れ七
模を深部馬河より甚し小也且つ奇峯怪巖
の目もあつたやと七傳、十教を互に山四川
沿岸の間に止まると云ふ、悉しく云ふは難
漢中、桶田駅より柿坂駅の間にさきか、彼の
古洞門、羅漢寺、梵果の寺、皆あり、岳峰立、露
砕仙岩、ボの人口に勝矣、すは法を多く、此の二
河の間に花やと、并、此間の風景、其れを并し

得ると、是れ汽車の速く疾走し、一時間も僅か
早くさき去るを以て見ん、此模の小も知るべし、邪馬
溪の規模を論べ大と云ふ、乃論深部馬河を
包含せし可し、然るに、従来邪馬河を論ずるもの
深部馬を陰のし、規模の大を説く、余の甚だ服
す、能くす不也、賴子の如き中書京洛に任し、是出多
く、関東東北に到る、而して高時邪馬河の支流に
更しく深き邪馬河あると、知るべし、天下の絶勝
と月旦す、もの、此の見たる範圍、孰と云ふ、乃恐
々天下の公論とすべし、然るに、風景美
を秤量し、種々の権衡あり、之れを月旦、乃勝す
と種々の標準あり、規模の大小、其一行、山嶽の

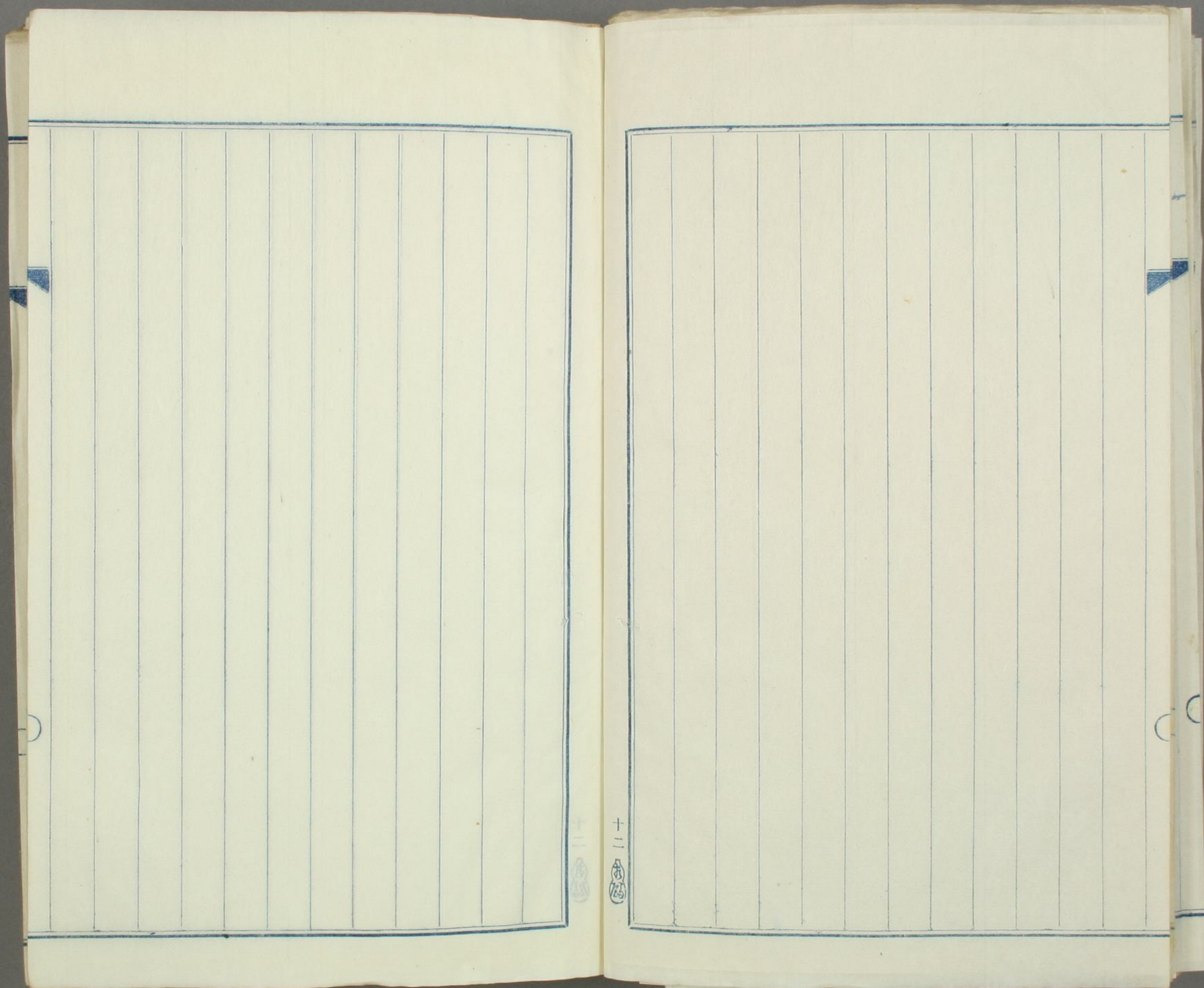
峰深奇峻也又一より、所謂の平凡の雄偉と云ふもの
 七一標準なるん、而して画致のやぶあつても云ふべし又
 一標準なるをも云ふべし、^亂其の画致あると云
 ふ標準なるを、~~規~~規模あるも妨げざるものあり種々
 の雜景點綴して印つて画致を助くるものもある
 秋子の即馬を絶勝と叫ぶもの、恐らく其の標
 準こそあるん歎、表し然りと云ひ、吾人の六因を
 を表すも、^踏踏踏せざるより、彼の深山幽谷の地域抵
 必空まう、雜景の付くさまを、^支支支支の山岳の
 おき甲の御嶽の如き、^口口是也、白雪金洞の地獄の
 かきも唯れ怪巖、^花花の如く、而して即馬に重きとも地
 域廣闊うして田舎う相あつ川あつ橋ある人家あり、

次

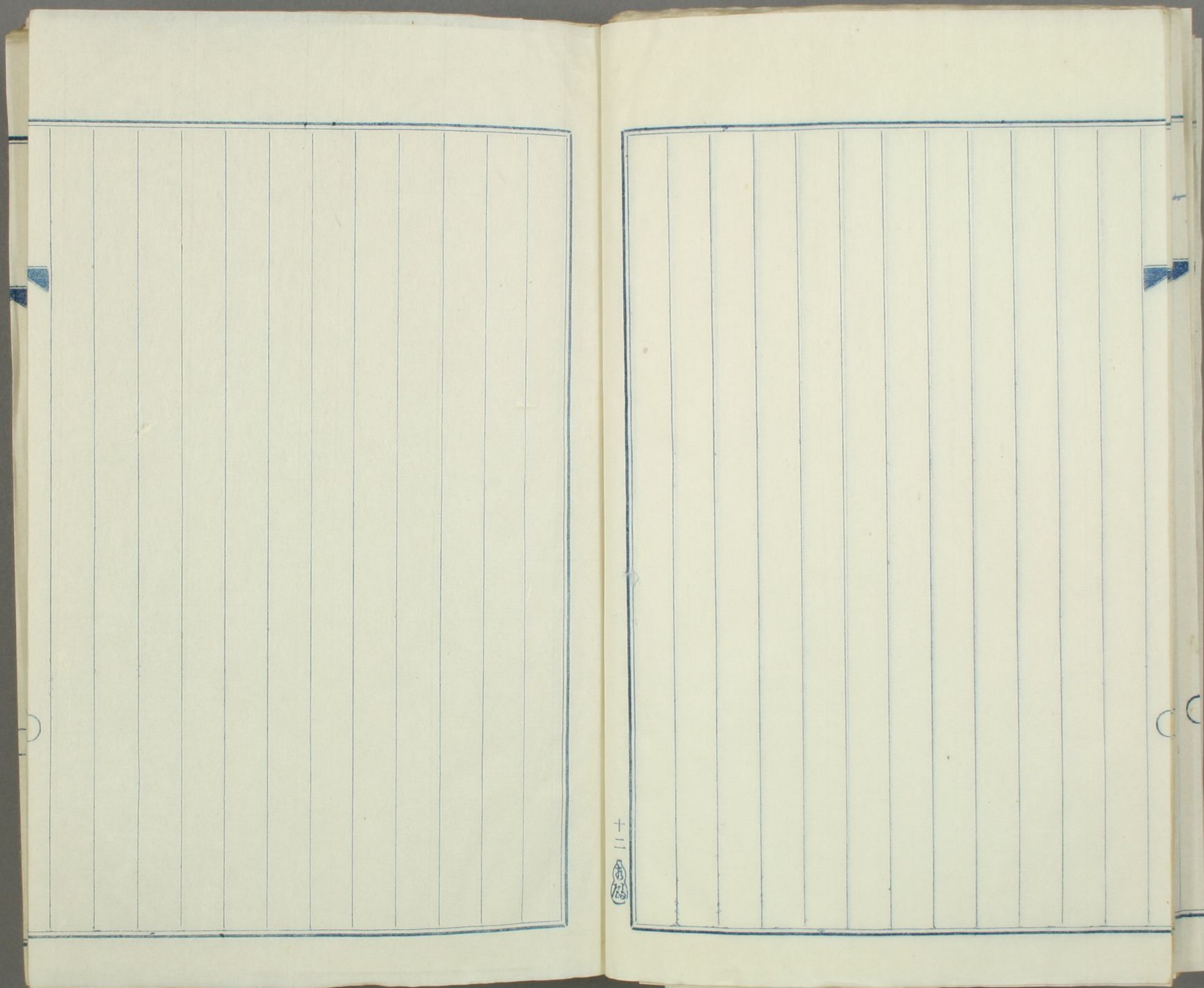
、 、 、

Handwritten text in cursive script, likely a letter or journal entry. The text is written on the right page of an open notebook. The handwriting is dense and fills most of the page. The text is difficult to decipher due to the cursive style and some fading. It appears to be a personal communication or a record of events.

The left page of the notebook is blank, showing only the horizontal ruling lines. There is no text or other markings on this page.



十二
十二



十二
あ
あ

の北山陽書局一冊に寄せ給ふ年不似、山陽四十前
後の山陽書局と推せらる。南文豪の文法古略之
凡を以つて之観あることを得べき歟 十二月七日記

閏月朔之尊也、郡中よりおきて董手お誨所
先似其書其難云々即、文履多福之状也、昔有
是也、も各之思礼の爲、自ら推つてお誨す

臥降心以、弟吾お誨、ハハ、お誨、お誨、お誨、
示禱仰付禱下、奉お誨、お誨、お誨、お誨、
然、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
而、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
記、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
敢、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
之、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
と、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
五、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
申、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
以、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、
情、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、お誨、

交言を中候と存及近引候。以白をそ七急二
 互置て作合ら共義程仰下存候。口聖殿心
 入御境然高説を以心。之授子。御存
 此公七百年又喜下各御達不被成之被存
 然以心處經路。外中其某と下。難後子
 所存候。不知為何状。与比。之と文子心出
 無辨候由側心候。此朴柱。男子のり名別
 而朴柱。本心。御存。其此能事。其心
 在。之と怪候。可一突る。と。御存。是。之
 名。死。先。尊。統。守。知。已。之。言。悻。之。感。愧。僕。四。願
 莫。可。其。語。得。不。免。於。外。郵。自。往。後。陸。續
 不。能。到。也。是以不慮生身。其言。不。

然而為聽之。到之文符一冊是也。御由。御
 厭。親。有。之。候。也。是。又。之。生。心。候。也。御
 其。語。之。擡。者。亂。行。也。其。不。較。と。較。心。海。之
 加。比。傳。之。之。境。何。女。御。滿。後。上。上。處。等。り
 之。之。偏。未。く。之。之。も。へ。に。く。と。其。在。其。悪。某
 幸。之。可。其。向。不。可。辨。ら。し。御。心。候。心。子
 里。此。面。大。に。お。味。た。し。と。其。無。寸。長。唯。愛。人。也
 之。之。也。日本。之。之。と。珍。也。思。ひ。許。存。在。京。河
 其。所。之。文。士。各。自。指。候。所。不。相。能。求。求。益
 之。之。御。境。之。得。由。之。之。及。其。後。之。是。也
 又。之。之。世。流。り。後。之。之。友。之。之。文。也。

又流しに路を方七国... 其に求蓋之心御焔案
神不各振... 換時希... 候所此言非一語
紙神... 也... の...

上巳前一日終下

裏拜

一言を乞

續八大家文讀本序

一言評

余嘗初修國史至於豐臣氏事蓋有投筆而

嘆者豐臣公太閤文出師於海外乎有人或說宜以善能

漢文者從便公笑曰吾將使彼用我文耳嗚呼

彼文為此雜太言無當可以敬文士之陋矣哉今

亦德此亦得非豐臣公所嘆耶且亦德此

便字あり... 換時希... 候所此言非一語

拙書ハハ文言... 以敬言文士其是... 以人意表

世公の言を執す... 此言

西用云々と倒装
句三前云云し
馬と神考ありし
嗚呼此言とぬ
我字の呼び返し
上文の投筆而笑
す。句三意を承
水し木事不當
と断す。及
分ちし其勢
ありあやう也如
何

係武籍、何不以長槍大劍効力國家、而區辨

區於此、我自有文、無須於彼、猶我自有殺白巾、

無須於彼、須於彼者、止於藥物、其他資、

經史之外、儒給、著作、既集、馬與用、用之、

尤者、為文章家言、且別、家文、已多流傳、何必

其家文已多流傳云々句下文
同照云々句下文
けんと小此所
の承けり云々
あし上りの勢
待沈氏選、而今
在我又附益之乎、嗚呼余及而後

考之、有以知其不然也、香德不遇、蹟武之主、而

生在文之世、固將隨時、泮厲、自回報効矣、

擇文武、且文武之相須、久矣、假使豊公、大尉之時

有武弁解文、如香德者、出而輔之、師不必興、

即興、為能得彼之要領、而施我核、宜不如此、

日之失牙、肯廢、視結不解、可知也、夫我非無文、

伏下字句
譬喻也
到此豈豊公

不遇蹟武之主
は豊公の御
考之けん云々
文法則の方
假使の句下
持合の句下
あま

常怒稍
霖以其分
疏解明
温破平

也而终不及於彼取彼補我何為不可苟以我自

有為近乎則雖所謂樂不必須彼之冬春黃

葉之必須冬春黃可以知文之必須黃葉也

矣但夫駢四德六八股之體則其綢繆也琛璣

也多葉而少實是為無用耳至夫辨是非別

利害言之詞的傳之不謬者漢文之用寧

但夫云
語勢地
句已揮志
二暇為
可
則愛口
八
馬とお考
ありし

到此截
量公始
服以真
慶喻切
當也

可瘠哉夫文莫善於漢漢人善用之八家其

最善者也譬之金鐵刀劍彼亦有之而不加

我利用之不如我利而我擊刺為捷人之皆此

然必有專門傳法者彼人之辨是非別利害

歷代所記載皆有可觀而必以八家為法亦

從此而益選於八家者沈氏最吹出最稱

物亦

霜

不可不資於彼亦可

推矣

況

焉

比皆

而

趨

焉

其

煥

精當、李德又折衷宋元的詩法、遂以補其不足

漸次到此
公解
口與一語

今此二者、而後其文法大備、猶言創為歷後各家考較

也然の字を
下らうし
押字にいん
てか

衆論、絕長補短、定為一譜、就為而熟習其於防

可也、轉し
いかにあそ
さか

已制敵不復他求也、抑其起伏用、蓋欲挫敵

尚末教語
盤公家他
惟抑壓之
揚亦足是

此法、文別與刺同為也、然則雖有此法、期於防已制

後進得
揚亦足是

敵而己、文雖有此法、期於辨是此別利害、而也、然不

文武始和
亦徒

謬而已、拘於其法而失其所以為法、則者德之

記元ハ
その名
亦同字者
識合なる

亦、或終為無用矣、余故於其素房、言之、以敬言法

此又ハ
且積分の
一印積益

者、勿使後之英、惟如皇公者、唯弃此也、其人

此又ハ
且積分の
一印積益

大改、米也通篇余意、新章、結構、在正、有抑揚、有

此又ハ
且積分の
一印積益

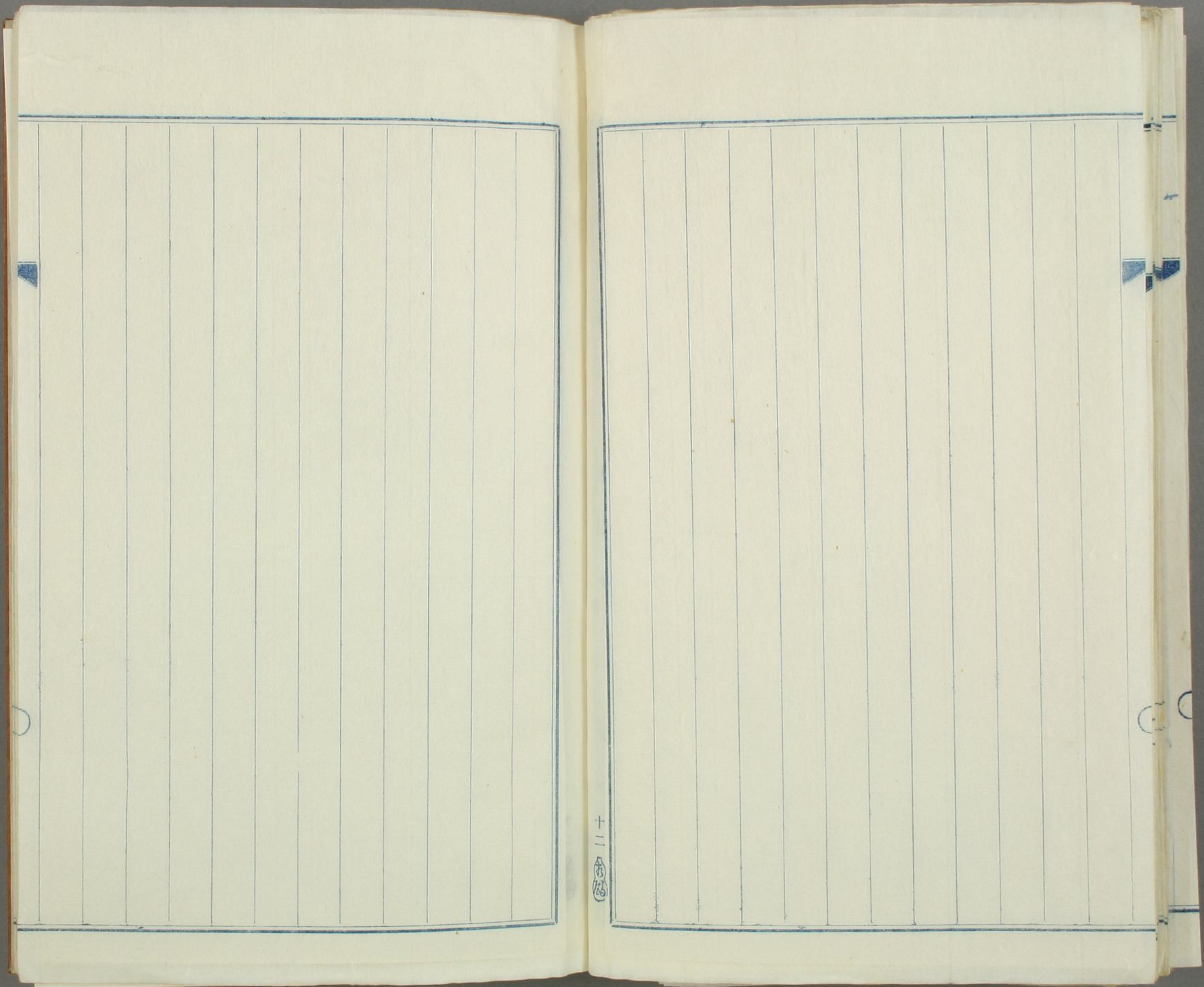
照度、如個在綱、有條不紊、其是志

此又ハ
且積分の
一印積益

手筆、且彼不子、與術之、豊心、以倒敬言文

士山陽筆下、結駝夫、英雄如畫、公若如此、可
畏之甚、作新坦漫評

しか近政、高漸代、次中の体、よ一、高、こ、ま、つ、と、極、ま、る、
か、中、り、こ、此、の、路、を、ぬ、る、依、つ、て、限、を、す、ま、此、好、何、の、
取、す、る、也、此、の、若、者、も、其、の、在、を、探、す、ま、る、
一、高、の、加、草、も、可、を、さ、ふ、不、あ、る、然、れ、も、山、り、多、志、と、
之、れ、に、服、せ、り、其、の、標、を、り、續、ハ、家、又、こ、其、動、を、り、
此、の、序、と、お、比、し、て、新、を、得、り、架、守、続、ハ、字、之、
あ、る、も、今、今、年、一、九、對、此、を、試、こ、ま、る、の、故、也、
と、を、唯、此、此、の、好、を、言、し、豆、く、の、み、余、の、自、言、を、
り、し、る、也、



○ 頼氏の名乗 襄の漢方 山陽の古物
 あらうん じょうも じょうの 車 ぶらうん じょうの あり 古物

○ 頼山陽の名はノボル 山陽の通稱久太郎たる事
 又其名の襄なる事は苟も日本外史を讀み得ん程の
 人の普ねく知る處ならんも之までは其襄は大方音
 讀されてノボルの名のはと反對に訓讀さるゝは知
 名の人の中にて殆ど渡邊華山の名なる登のみの如
 かりき然るに山陽外史の名の襄も全体は矢張華山
 の名の登の讀み聲と同じくノボルと讀むなる由开
 は頼氏が一族にして頼氏が郷貫に程ちかゝる廣島
 市袋町二百三十番地頼源次郎といへる人の家の襖
 の修繕よりして見はれたれ即ち古びたる貼り交せ
 の尺牘にして最も證とするに足るべければ未知の
 人の爲にもと其の全文を左に

今度久太郎に實名を付け遣し候間そのもとの
 ざもとへよびよせ候て別紙の通りを申付可被申
 候字は冠つけ可申候大阪へも申遣し可被申候襄
 の一字にて候名乗にしてよみ候へば「ノボル」
 「ノボリ」にてはなし此通り可被申付候禮服しか
 るべし
 二月十三日
 お静ごのへ
 惟 完
 「惟完」とは即ち山陽外史の父たる頼春水其人にし
 て名あての「静」とあるは梅颯と號せし人にて屢々
 山陽外史が詩抄中に見ゆる即ち外史の生母、又文
 中「大阪へも……」とあるは恐らく飯岡義齋の事な
 らん襄の字をノボルと訓する堯典に所謂る「懐山
 襄」の襄の字の意味より出でしにや

○大政もこの國樂を題を多能徳元びひひと云ふ。何ん
と思ふてそのハハ和代の有像をいふ。よく思ふに
中：山陽の遺跡着千を藪に。ア。此の
所：本江十と帯おを捨てん心。果しと木坊
と。物：元よとと送う。既ちしろう。不坊
みう山陽の癖を紙ん少也。●十敷の方中
着：山陽の性格と政味とを元る。毎舞集：忍
ひす。茲：収むと云ふ。



頼山陽の手紙

木崎愛吉

大八木父子に宛てたる十一通

越前の高島正君、曾て予が爲に同國高島茂平君の珍襲せらる、山陽手來帳を寫送(二十通)せらる、宛名は悉く大八木氏なり。山陽門人大八木木工の家に傳はりしものなるべく、縫殿あるは木工の父にして、士眞あるは木工自身なるべし云へり。單に大八木あるは、その何れなるかを知らず。こゝにその數通を抜萃す。

(一) 有馬行の不在中

送老母、有馬迄參候留守へ、御使被下、其の節之御詩稿、早々拜閱仕り置候處、如何御聞遣被成候哉、餘程遠行に御聞被成候ふに相見候、僅三四日の事に御座候、御道理にて久々御使被下、今日は桂川の香魚數籃、被掛御心頭、遠方之處、忝なく存候、今日晚酌、早々拜味可仕、相樂み

(二) 藏書は門外不出

拜誦、御安佳奉慶候。詩文皆々おもしろく、御上り目見へ申候。御簡居早々御明被成候へばよろしく申すは、尋常俗情也、小生は今少長かれしに存候、其内益御上り可被成

被存候。村愚亦妙なるべし、奴肩苦重、遠方大儀に存候、午飯食はせ申候、可隙入候、御叱り被成まじく候。明史は大部に候、近來の刻の元明史畧、大抵よくいたし有之候、又乾隆之明綱目十二冊は、翻刻有之に覺候、書肆に被命候は、直に持參可仕候、是第一よろしく候。僕所藏は門外不出云三章之約あり、且無可借候外事は、何なりとも可命應候是は以後ても御免可被下候、呵々。

にいたし置度候也。令息御來招、忝なく存候、即豚犬差上候、乍例御世話なるべし、餘明晩際貴面候、頓首。

二月九日 大八木士眞 足下 裏 拜 復

(三) 洗ひ豆腐

和田、畠山二臣論、別ておもしろく候、あの様の事、以て有之べし、精出して御書試可被成候、世間無用の文には、可勝候。(藏書を貸さぬといふ事は、頼家の家法なりし見ゆ。)

栗子の分餉、扱々見事、ウマク□□事に候、此物大好物ながら難獲、今日遂願候、厚謝仕り候。御身分の事、得斗御定置可被成、先日御心添申通に、終身之事、且子孫之計に候ゆへ、講席三度缺候位にかへらし不申候、餘面盡。

再々昨朝はよくぞ裁御出、しかし草々之義に存候、昨日は御約束し處、御出無之、獨にて參り候、久々振にて逢ひ候門人有之、朱雀丹波やにて、大に馳走に遇候、御出有之候へば妙なりし、遺憾之事に候、連はもより盛也、丹波屋池の分も妙也。

向々、詩おもしろく候、私も作可申、存居候。以來御作、此通に御録示にてよろしく候へども、跡を御さち以て、ちらさぬ様に可被成候、或は一冊子に御トチ追々御録示にてよろしき歎。

今夕なご、ちこ緩々御來話可被下候、しかし、洗豆腐位也。小づか御ねだり可申候、アノ脇差には、故人精神聚會有之様

今朝は例のまたせにて、御歸路ひもしく可有之に察し申候、

朝一つ宛、茶粥に入たべ候は、解宿醉之効能御座候珍品也
難獲もの故、少々御す分仕り候、阿々。

十月 朔

尚々、昨夜あまり腹ふくれ、無致方、三郎に劇談、至
夜半、三郎歸り申候、獨座對燈、今朝の下讀致了り、
東國通鑑百濟高麗の亡び候處迄、涉獵仕り候。
くれぐれも御家内様へもよろしく申上度、黒たけは先
づ其方にて御あづかり可被下、あまりいへば、無勿
體候。

大八木様

(これも同年なるべし。大八木の宅は他の手紙に室町四
條下るこあり、新居未考。三郎は兄玉旗山なり、こし
六月朔、加賀より入京入門せしなり。)

(八) 栗の餅は大供様へ

鹿肉又々黍なく存候。正統記論。如何さま左様ニ存候。附
价候。譲りもの亦附价候。代はいつにてもよし。
栗(自注、稷の誤)の餅(同、食の誤)あつらへ、つかせ申候。
あわはよき品のよし也。朝の茶粥に一つ宛、御入、可被召
上候、御小兒様に云は古し、大供様に上候也。
十一月廿五日

頼

大八木様

(九) 詩で御容約り

人日之雪可觀、如何御渡り候哉。存居候處、御華翰、併して
御約之縁、一雙、大に鮮新に相見、丁度鳥肉盡候處にて、
大慶此事に御座候。御移居も相定、僕舊居のよし、因縁不淺
候。權窓之鴻跡は非僕所爲、其詩は三樹村にての詩也、他人
所爲に被存候。何にもせよ、御落着、且近成妙に候。今夕此
亮ひらき可申、御來話所待候。小早川金吾之詩も、別に一
首仕置候、只今汚覽に存候へども、是にて釣可申、先留置候也
七くさの朝 襄 復

士信賢兄

尚々、あなごの拂紙のよし、鴨肉雞羹にて可上、
家中申居候。

(この手紙にて見れば、大八木の新居は、山陽の舊居一
條木屋町らしく想はる。)

(十) 醉眠後の平曲と讀書

昨夕は何もなきに、能くぞ哉御話被成候、例の睡眠中に御歸
被成候、それより起座、平家一曲仕、又讀書至四更候。
○玆然か候事御約申候へども、家内いつ出候も難計様に存
候由故、是は得罷り出不申旨也。
○一ノ井(自注、季慶同居の新田福禪の末弟)文書しらへ遣

(十一) ゆかへの残着を携へて

昨日は御苦勞ニ存候、御送り着けの上、御庖丁はおもしろく
御座候。今日、九月節盡のよし、團山も大造りに候へば
近所梅はたけあたりへ可參、昨夕のこりものでもほり込
可持候。喜一郎様御遣ひ可被成候。貴下も私話件に御出被
下候は、望外に候、八時過半に申す頃、少々例より早き方
可然。

九月二十日

大八木様

(喜一郎は士眞、又士信、即ち木工その人ならん。)

頼山陽の手紙

頼

頼
山
陽
の
手
紙

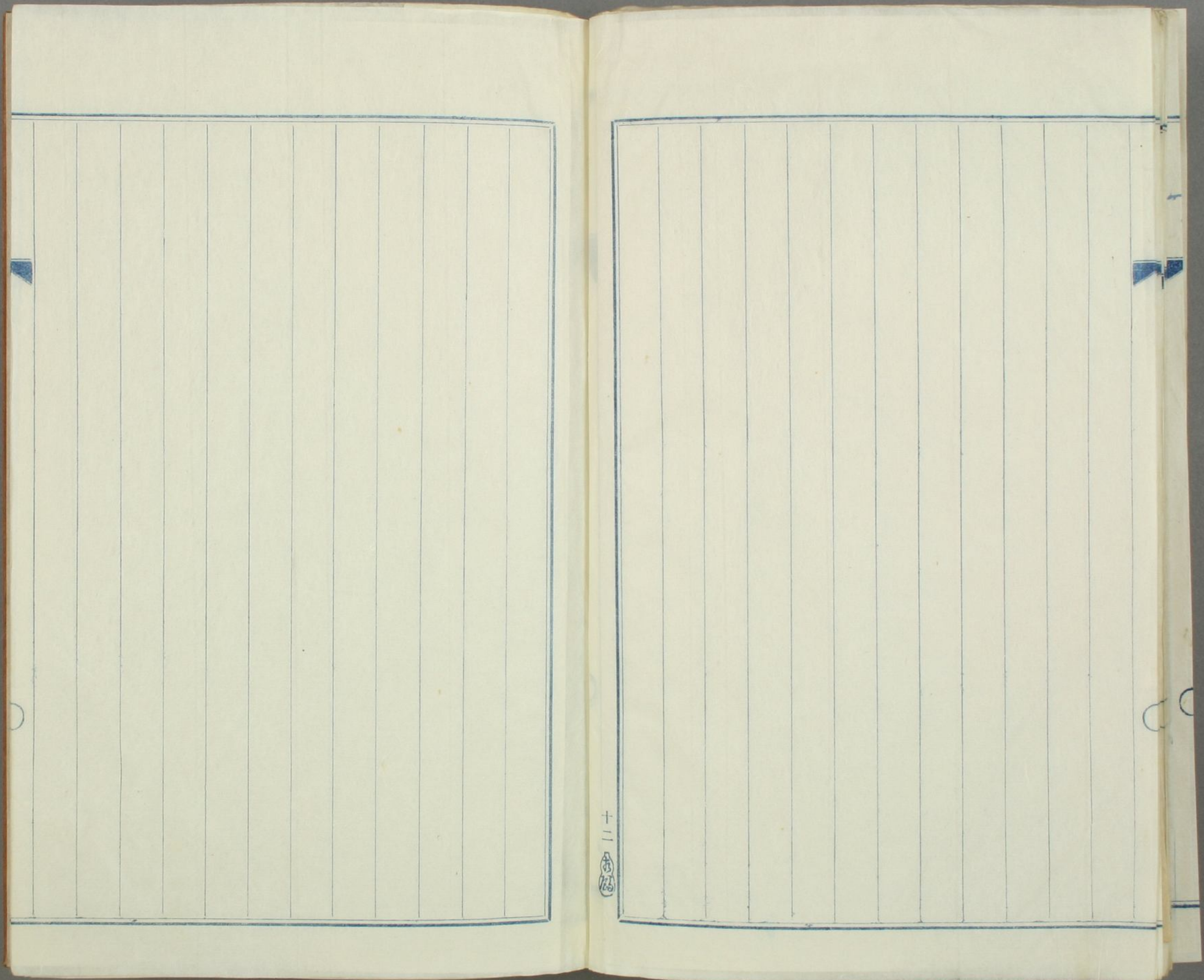
一
〇

一〇

○十七日終に兼尾十卷の二款の印譜を購し文晁
印譜の首端に親友峯の題字あり松雨の二字
とあり款云ぬ流辰辰号と兼尾のぬ流五子五
月款元緒の題あり曰く

高祖春水先生將歿遺命毀其受印王父素

菴先生六余埋之而看時作印譜以欲親戚知
舊而後後命然亦存於家二十九款夫二先生
遺墨世人稱揚之珍為之近年最盛家至其
偽難判於是誰客欲據印以辨之未乞譜者
多而元緒心期春水先生百年由忘判其譜
以欲之故存辭不與今茲五子春偶開匣
見其竹印四粒患蝕因思自先生逝正九十
七年矣其所存既不全而有此言不速作譜恐
不能窺其一斑乃押二先生遺印且徵舊譜
信需者刻者姓名而其不詳者缺之彙為二卷
以弘欲風於士鳴守二先生於翰墨抑緒的
耳其高祖後者蓋有所存矣



十二



○左に物言ふ初に未尾頼重の珍作健之助
の真跡に無証し、京師も在り大津に在りて、
いふ所より未の二家奪を彦成し終に田向
を遺せり、
し其の事ゆゑに遺徳を

のし未尾のむ意証の落せり一証をいふし

頼子成所を健元路真跡余一臨流涙
不己酒間敷批之、子成後互許不許三
間、已出京抵大津、脚、其家奪之信不味
自抑、途中回馬再訪子成、空領囊以
購之、子成竟不允、東帰之後猶摸胸中
因書此四絶句以贈子成

一見倪書神龍先半途回馬真敵靡故人通寶君何
怯忍使淵杖室予悽

葵書日換鴻鐘、此是狂奴態未室、今日一況
不得始知人子有窮道

天地之間物有主奪之無理奪吾款、向人柱自誇唯

美、墨守、空梯、得、方、全
空、空、夢、寐、未、忘、情、自、天、米、家、吾、再、生、即、被、僕、夫、多
罵、我、不、成、一、事、又、愆、程

山、易、後、多、此、句、を、後、に、而、時、墨、守、方、及、に、
至、今、有、能、悟、と、云、ふ、者、有、ら、ず、山、易、の、氣、義、を、
六、米、の、難、と、一、般、也

三月十日記

楠公書較工用墨墨肥為以自鈔一行曆法借示
一井氏之書當時藉馬控惚乃覃思此等其雅
真不可測也又菊池武敏自奉切狀請舟田義
昌薦書皆忠義之蹟裝潢為家以資敬仰
云近有獲西海田原氏家傳文書未示者中有足
利高氏指揮半紙書報和真義討直久書
書頗軟媚可人蓋蓋雄書也又有今川了俊
感狀亦為半紙該辭大倭當時足利切臣凌
轍諸族者可想余所得此二者綴于卷尾每
展視唾罵一番亦足快也

一此の流儀
子
白

日本外史の俗語
長川東洲の日本外史文法論に曰く外史談言と云ふ事

極て老邦の本色を存せんと要す故に俚言俗談其まを
直用す平氏記中の公面可憎。源氏記中の長袖者及
ひ飲食者先し舞。九郎之貳舞。又野猪而食者。是
利記中の今日在る明日在る。後田記中の騰生毛の
類皆是る。云山易言あり凡そ史傳用套語用二賦
頌語用議論語用二俗語皆大病。但叙二言語處
可酌量用之邦人往々犯此病而不省、唯常漢史無
之俗語謂漢土俚言也、如邦俗語却有直用之見
本色者、凡此非精度精切者、不可其語此、伯事傳ノ
書後見

あり、
一又、
刻本の、
此に因りて、
一、
山の、
は、
先、

標記はけし内字と見せし

一は三指の部の合美(芳華)に

三指の部の杜野の合美(芳華)を合

假せしもの合美(芳華)に未書あり

三指の子部なり但世凡の合美(芳華)

と國司かめおえし先年考る所の

三指の子部の合美(芳華)に未書あり

先刻の字は川右直に而存る事山崎三

指の字本三指撰布し抄本の好

事系丸田極位の書本今はお

とあり保坂の子・寺・古おやんは冥入

なりと定まらばけり

一は山陽子抄の浙西の家以鈔(唐本)に
 行海の墨きく様外に記入あり一見せし
 べふし山陽子に見えんと再三考
 考しるに其去る行録のありし
 其考考花の外二十八年の行
 本をくしこもて懐せりあこりて
 山陽の行の多々其様異ありかたに
 其の行の多々其様異ありかたに
 其の行の多々其様異ありかたに

千紙の
 有樂社

我々が従新以來文物制度を泰西に學べる、概して英、佛、
 本の諸國に於て居る、食を以て見れば、斯く少
 の大國のみに限るは宜しくないと思ふ。勿論同じ事を研究
 すべきが、研究の事物巨し、偏に入り既に海軍専門に就いて
 た今日では大國にて學び得べからざる事だ、知るべき事
 得らるゝ様な便宜がないでもない。
 獨逸の如きは、我佛より年々多し、其の如きは、
 の類も三度、毛織りかき、
 多くなつて結果、同じ工場へ一年に幾人も押しつけて、
 大に先方の疑惑と不快を増して居る。爲めに支那人には開放
 しても、日本人へは開放せぬといふ様な噂さへ流布されて居

品せる或る織物に狎の縮があつたのを見て大に賞めたが、其次に唐獅子の置物を見た時、「此狎は自分の狎にそっくりだ」其時余は茲でこそ講釋を返してやらんと「聞き給へ、これは狎では御坐らぬ獅子である。全體狎なるものは支那人が狗を此想像的獅子に似る様に進化せしめたものである」と尤もらしく説いたら、高慢な女史も流石に感服して「成る程さうでなくはならぬ。斯んなことはダーウインも知らなかつたでせう」と降参した。余は出鱈目を喋舌つたのであるがペダンチックな女史は其後愛狎家の仲間へ大に吹き立てたに違ひない。

英人

英人は愉快なる國民ではない。徳川家康、武田信玄、流の民族だ。大國民である。愛すべからず、恐るべき國民である。吾東北の人民を英人とすれば、越後人は獨逸人に比しても可い。謙信とカイゼルは多少似た點もあるが寧ろカイゼルの方が越後人的であらう。江戸兒が佛蘭西人なら、大阪より九州にかけての人民は南歐人の肌合であらう。

頼山陽に關する一話一言

市島 春城

○自分は山陽の名聲の最も盛んな頃に、漢學教育を受けたために、青年の頃から山陽趣味を持つて居た。今日は眞逆に崇めて居るが、昔し山陽の事とし云へば、耳を傾けた習

慣が今でも残つて居つて、山陽に關係あるものや、場所に接すると、一寸覗きこむ氣になる。

○一昨年と昨年は屢々關西に出掛けたので、夫れとなしに山陽研究をする機會を得た。京都では山陽の相續人を訪問し、備中では山陽の懇意であつた人を訪ね、又た大阪では山陽の事蹟に委しい老儒から、いろいろの話を聞いた。

○折角のお需めであるから、一番山陽の事を話して見やうと思ふが、併し話は纏まりがつくと思はぬ。到底断片的の話たるを免れぬ、御承知の通り山陽の事は、世間に割合によく解つて居る、瑣事と雖も幾んど洩れなく傳はつて居る。實は夫れ以上のお話をすることは餘り容易で無い、唯だ自分の話で山陽の半面が、幾何か髣髴たる事が出来れば、夫れでよいのであるが、夫れも覺束ないやうである。

○京都に頼支峰の跡があるが、これが京都に於ける山陽の跡である。山陽の居つた三木樹の山紫水明莊を守護して居るのは、即ち支峰の相續人である。此人は頼潔、俗稱龍三と云ふ人で、自分の親が嘗て支峰が國へ来たころ、師として本を教はつた關係もある所から訪ねて見たが、邸宅はなかく立派なもので、恐らく山陽が生前にも此位ぬな家に住むことが出来なだらうと感じた位だ。今の龍三と云ふ人は、京都附近の豪家の子で、支峰の門人であつたのを養子としたのである。

○龍三と云ふ人が、今日の如き相當の邸宅を備へて、相當の暮しをして居るのは、云ふまでも無く山陽の御蔭である。日本外史其他山陽著述の版權料と云ふものは、なか／＼莫大なるもので、支峰の生前其版權がどこかに質か何かに入居つた

○備中邊には山陽の遺蹟がいくつもある、中には山陽の窮困時代の遺蹟を存して居る、備中で誰も知つて居る名利西大寺の、石の樓門の柱には、寄附者の名が多く刻まれて居るが、これが山陽の書である、權兵衛、太郎兵衛の名を書かされた山陽は、恐らく流浪時代の山陽であらうが、山陽の爲めには不名譽の紀念碑と云はざるを得ない。

○山陽が茶山の廉塾に預けられた頃は、山陽の血氣時代で、茶山も取扱ひに餘程困まつたらしい、その山陽が後に京都に門戸を張り、文名一世を風靡するに至つた、茶山も之れを聞いては、今昔の感に堪へなかつた、併し茶山の腹ではナニ小癪など云ふ氣があつたに相違無い、こゝに其の證據物がある、齋庭篁村翁は茶山の書簡を多く藏して居らるゝが、先年自分に贈られた書簡の内に、山陽の事を云々した一通の茶山の書簡がある、これは無落款で文章も隠語を用ゐて居るものゝ、確かに茶山の筆に相違ないものである、これにはこんな事が

認めてある、京華には頼狀(頼襄)と云ふものが居る、これが治國平天下、國家安のなんだと云ふて居るげな、傍らに野郎が居て、それは酒を飲んで子供衆を澤山拵らへる事であらうと云つたが、そんな評判を御聞きなさらぬかと云ふ様な文章である。云ふまでも無く山陽の、エラそうな經綸的氣焰を聞き、片腹痛く思つて、冷罵を試みたものである、山陽の弱點を知り抜いて居る茶山ならではの、こんな嘲罵は發し得ぬ譯である。但し茶山も山陽の文章の高さを認めたに相違ないと思ふ仔細は、茶山が黄葉夕陽村舎の詩稿を刊行せんとする時に、山陽に評を囑した事實に見ても分明である。茶山は此の評語のある稿本を春水に示した、其の時春水から茶山に與へた書簡が、越後の某家に存して居る、夫れを見ると、「評は多分頼襄であらうが、中にはあらずもがなと思ふものもある。一層皆な省かれては如何」と云ふやうなことが書いてある。

○序に話すが、茶山の廉塾は備中の神邊と云ふ村に、今も儼然と存して居る、自分は未だ訪ねて見ぬが、友人が訪ねた模様を聞くに、廉塾は母屋を離れて別に建て居る、山陽の起臥の室は、母屋の方にあり、こゝが其の室だと廣くもない部屋に案内されたあたりを見ると、先代茶山先生の額や幅などは掲げて無く、却つて山陽の書が勿體らし、掲げてあるのを見て、今昔の感に撲れたと語つた。

主従と君臣

枝吉神陽は佐賀の儒員にて、伯爵島根の兄なり、恒に鶴島閑叟侯に侍坐し得意に名分を詳論す、曰く侯と予とは主従にして君臣にあらず君は天津日嗣に在せば一ありて二なし侯も予も齊しく臣と稱して仕へ奉るべきなり。

支峰の遺蹟

冊袋に入れてあるのを示された。之は袋の表には支峰の筆で、北堂の筆蹟であると断つてある。中を開けて見ると、山陽の講義(論語や孟子の)を、筆記したものである。是が中々面白、こんなことは其家でなければ傳はらぬものである。龍三氏の説明によれば、山陽は子供等に論語孟子の講義をするあとで解らぬ時に、おつかさんに尋ねても、おつかさんまるで答へに困る様では、子供に對して面目が無いと云ふ所から、いつも隣室で開書をしたのがこれであると云ふ、みな假名ばかりの筆記で、甚だ覺束ない筆ではあるが、併しなかなか達者に書いてある。これは梨影と云ふ夫人の書であることは、云ふまでも無い。此の梨影は小石元瑞の女中であつたのを、山陽が酒間貫ひ受けて室としたと云はれて居る、勿論素養の深からう筈が無い、然しその心がけのよい事は、此の筆記した事を以てもわかる様に思はれる。

○山陽の草稿の最も振つたのは、大巻物に表装されて、一卷残つて居る。これは垂涎三尺たらざるを得なかつた。唐紙半切位の五六分四方位のな行書に書いた文稿が七八篇、皆な同じ體裁のもので張込んである。皆な山陽遺稿中の名文ばかりで、縦横に雌黄が施してあるが、其の改削がなかく、云ふ可らざる趣味を添へて居る。これなどは實に逸品である。○此外に山陽の書の美事に感じたものは、日本の國畫しを行書體に大書した手本である。美濃紙を縦に二字宛書いたもので、是は三樹が幼時書きなぐつたものとの事であつた。所々に(子春)の印も見える。三樹が書きあぐんで六ヶしい字を塗抹した所や、人形などの樂書もあつて、手習手本であること

は、躍如として居るが、之れも珍とすべきものがある。

○山陽が骨董趣味を有して居つたことは、確かであるが、それを窺ふ材料は無いかと調べて見た。すると大抵焼け失せて何も存じて居らぬが、唯だ火災の時、何をさし置いてもこれだけは持出したのは、山陽の遺印である。これが立派な支那製の箱に入れてあつて、總て儼然と五十顆餘り、支峰のと共に保存されて居る。夫れを見ると、當時印材などは疎悪な頃なのであるに、割合に好く選擇してある、其邊から見ると、いくらか骨董趣味のある所も見える。外に古銅の花餅を示された。龍の高彫りのしてあるもので、唐代の年號が切つてある。龍三氏の話に、山陽の遺愛品の存して居るのは、僅かにこれのみである。是も兵燹に罹つた焚餘のものである。銅の上部が鎔解したのを、後年京都の名匠藏六に補作を依頼した處、藏六は快よく承諾した、併し其後十年餘も出かきぬので催促に及ぶと、材料の蒐集に手間が取れるのだと云ふ、さらば其の材料は何かと聞くと、藏六は答へて、唐餅を補ふには唐銅を以てせねばならぬ、其の唐錢を集めるのに苦心をして居るのだと云つた、なるほど、思つて其意に任せ十數年を経たら補修が始めて出來上つた、夫れが之れだと云ふから能く見ると、如何にも好く補つてあるので、名匠の手腕に今更乍ら感じたが、此の一品は確かに山陽の骨董趣味と鑑識の一端を窺ふの料とすべきものと思ふ。

○これ等が頼家の家を訪うて、見聞した事實の一斑で、間接に山陽の性格を説明する材料となるのであらうと思ふ。自分の遺憾に思ふ事は、山紫水明莊を未だ訪はぬ一事である。此の

書室は頼家の最も珍とすべきもので、これを見ずして山陽を語ると云ふは、實に押が強いと非難されても致し方が無い。扱て今の頼家が、此の書室を取り戻した、其際の事に就いて、餘り人の知らぬ山陽の逸事が現はれた。前に云うた通、其時分京都に判事をして居た某と云ふ人が中に立つて、いろいろ周旋した結果、此の紀念物が元に戻ることになつた、其の時頼家では其の禮にとて、山陽の草稿一紙を送つた、其の草稿は天下一品と云うて其人は珍藏して居ると云ふことだが、夫れが何かと云へば勅書の草案のやうなものと云ふ、無論漢文で野に遺賢ありと云ふやうな冒頭であると云ふが、自分は見た譯で無いから、委しく語る譯には行かぬ。頼家には此の稿が二通存して居ると云ふので、一通を與へたと云ふ事である。これを語つた人は備前の知人で、山陽に縁故の深い人である。此の漢文は勅書に擬したものか、夫れとも内々命を受けたものか、夫れは推察が付き兼ねるが、兎に角天下一品と云うて誇るに足るべき變つたものである。

○山陽の草履の類、昔は、大荷物に表裏されて、一寒
凍つて居る。これは、唐紙三尺たらずるを履なかつた。唐紙半
幅位の五寸四方位のな行書、書いた文様が七八分、昔は
同じ體裁のもので張込んでゐた。昔は山陽道稿中の名文はか
りて、唐紙に張られてゐた。其の文様がなかつた。云
ふ可らざる趣味を説いて居る。これなどは、國に逸品である。
○此外に山陽の書の名、昔は、日本の國書しを行
書體に大書した手本である。唐紙に二字宛書いたもの
で、是は三樹が幼時書きなかつたものとの事であつた。唐紙
に書かれたもの、三樹が書きなかつたもの、手習手本であること
味した所や、人形などの樂書もあつて、手習手本であること

山陽才田甫を才た説はぬ一事である。此の

と態と今まで差控へた次第でと、答へると、敬所は欣然として
流石に頼君だ、よく私の氣質を知つて居らる、誠に敬服であ
ると挨拶したと云ふ、之れは敬所の爲人を知ると共に、山陽
の如才の無い性格を知る幅強なる材料である。

○山陽は、兎角文章からのみ窺はれて、其文章の如く豪放磊
落跌宕な性格を備へた人と推察さるゝが例である。是も無理
のないことではあるが、餘り文章通りの人とのみ考へるのは
間違ひを生ずる。文章の巧妙な人は、兎角文章で己れを裝飾
する場合が少なくない、山陽のどの文章を讀んで見ても、苟
くも人に下るなどの卑屈な文字が無い、どんな手紙を見ても、
うまく繕つて書いてある。これが文章の徳である。此點か
ら見ると學者の文章は婦女子の紅粉と一般、醜を蔽ふべき第
一の道具とも云ふて宜しいものであらうが、殊に山陽のやう
に筆が縦横であつては、どんな拙でも掩ふことが出来る、此
處の處はさう云ふ風に哲學者流を氣取つて觀察しなければ、
あの人の眞面目は能く解らぬのである。こんな風に考へて見
ると、酒は伊丹の醇にあらざれば飲まずと云ふのも、或は當
てにならぬ様に思はれるし、魚は琵琶湖の鮮にあらすんば食
はずなど云ふのも、或は文章の花であるかも知れぬ。近藤老
人の話に山陽は頗るしわん坊で、晩酌時刻になると、堅く門
を閉じて人を寄せ附けなかつたと語つた。是はあの豪放な、
始終酒の相手ばかりを待つて居たらしい人の性格とは大層違
ふ様に聞えるが、京都式のしわん坊は山陽の内實であつたか
も知れぬ。同じく近藤老人の話に、某と云ふ老人の知人の親
が、或る時酔歩蹠珊として歸つて來る途中、山陽をよく知る

な、がしに出會つた、何處できこしめしたと聞くと、今ま頼
の處で馳走になつて歸る處だと云ふを聞き、そんなら必らず
鹽竈が下物に出たらうと云ふと、誠に其の通りだ、貴方はど
うして夫れを知つて居るか問ふと、其の人は笑ひ乍ら、頼
の鹽竈は有名なものだと云ふこともある。魚類の不自由な京
都で、鰯を下物とするからと云うて、一概にしわん坊とも断
じ得られぬが、夫れにしても琵琶湖の鮮にあらざれば食は
すと云ふ先生の下物としては少しく格が下り過ぎる様にも思
はれる。

○山陽のしわん坊の話に就いては、推測ばかりで無く、確か
に然うと断言した者もある。夫れは大坂の書肆鹿田靜七の母
である。此婦人は篠崎小竹の侍女を勤めたもので、五十年前
に歿したが、好く山陽と小竹の事を知つて居た、此の老嫗の
説でも、山陽はしわん坊だと云ふて居る、毎年京都の祇園祭
に、浪華の篠崎家を頼家から招待するが例となつて居たが、
大抵は断つて行かない、然るに或る年毎々のことであるから
行かぬも悪からうと云ふので、小竹の夫人が鹿田の母なる此
侍女を連れて、京都の頼家を三本樹に訪うて見ると、暑中の
折柄であるから、冷素麵か馳走として出た、其の素麵に魚の
切身の煮たのが上に載つて居る、小竹夫人が箸をつけて見る
と、此の魚肉は腐敗して居るので、胸が悪くなつて、どんな
事にも食ふことが出来ぬ、去りとして主人の手前吐き出すこと
もならず、篠崎の奥さんは實に困られたことがあると、山陽
の吝嗇な一例として此事實を語つた。僅かに此の一例と鹽竈
の例とを以てしわん坊とも断じ得まいが、全體京都は儉素風

をなして居る所で、浪華あたりや江戸に較べて見ると、甚だしい徑庭があるから、餘程此等の事情を酌量してかゝらぬと正鶴を失するであらう、どの道山陽も京都文人氣質を免かれなかつたことは、略ぼ察せられるであらう。

○京都文人は昔も今も内方がつましく、金錢には締りが好い、山陽も詩文を見れば豪放にして、一向無頓着に酒ばかり飲み家計などに意を注がなかつたらしくも見えるが、實際はなかく、さうで無く、世渡りには上手であつたらしく思はれる事實がいろいろある。但し手紙一本書くにも、例の縦横の筆で自家の見識を害せず、野卑に見えぬ様に書いて居るから、皮相では分らぬ、自分の友人の所蔵して居る山陽の書簡で、灘の或る酒屋へ、酒の無心を云うた文句の尙々書に「平生個様の事云はぬ男遣故にこそ」など氣取つて居る。個様に書けば野卑な情も見えず、文章も味があるから、人も快く無心に應ずる氣を起す、これが山陽の能文の徳、兼ねて如才の無い處である。

○山陽が俗牘を以て長じて居ることは有名であるが、兼ねて其の文情の人を動かすに妙を得て居た好標本は、備中の長尾村の小野家に存する、二三の書簡であらう。此の小野家は、備中で有名な豪家で、山陽が松月亭の記を書いた、其の亭の主人公小野泉藏は、誰も知つて居る人である、此の泉藏と云ふ人は、小野家の分家で、其本家は小野櫛翁と云ふ人である、此人は至つて歴史を好む所から、山陽を厚遇し、山陽は郷里へ歸る途中、必らず此家に宿泊した、恰かも尾の道の橋本元吉を、歸省の途次の足溜りとしたと同じ工合に、小野家に泊

る妙は、幾んど人を酔はしむる魔力を有して居る、櫛翁に對して氣兼ねをして、巧みに取り入つて居る所が、あちらこちらに見えるが、今ま其の一二を云へば、自分も近來は金溜めの主義になつたと云ひ、潤筆はどうぞ利殖を願いたいと云ひ節酒の勤めに對しては、近來祇園へ出掛けるにも、瓢の代りに茶盞を携へて行くなどあつて、誰が見てもうそとしか讀めぬ所もある、又た櫛翁から贈つた文具を謝する手紙の内には陳列の模様が目に見るごとく書いてある、床には親から譲られた研と餅、机には何と何、扱て頂戴の文具は何と配して、殊に趣を發揮したなど、贈つた人に花を持たせ、人をそらさぬ處は、如何にも如才のないものであつて、飽まで對手の氣を呑み込み、びつたり夫れに箱まる様に書く所、なか／＼下に置けぬものであることがわかる、山陽は血氣時代に放蕩もやれば、流浪もし、随分親や親類に難義をかけた人で、従つて浮世の酸味は充分に嘗めた、夫れだけ到底村學究などが、夢にも知らぬ世故に通じて居る、是によつて之を見れば、彼の國字牘に長じて居るのも怪むに足らぬが、山陽其人の地金は、此の國字牘こそ、赤裸々に白状するものであらう。

○山陽は堂々たる文章を以て、人を眩暈し、生計の途などは、無頓着と見せかけて、其の實はなかく、如才なく立廻つたもの、やうに見える、が唯だ彼の手段は、文章を以て野卑な處を蔽ふと同じ方法に依り、間接に人を利用して自家を廣告し潤筆を圖つたと思はれる事實もある。山陽の友人篠崎小竹の如きは、山陽の臺所に取つては最も大切な人であつたことは確かな事實と認められて居る。小竹の家に傳はる書簡は、實

つたものである、小野家は豪農、橋本は豪商、各々其の性格が變つて居る、橋本は盛んに馳走して、潤筆料を澤山出すに反し、小野家はじみで有合の肴で酒を侷め、潤筆料を餘り出さぬ、其の代りに面倒な注文もせぬのみか、時には山陽の放縱を戒しめ、無駄な費用を節す可し、酒も飲み過ぎては可かぬ位かな説法も遣つた、又は潤筆料を預つて遣つて利殖を圖つて遣つたこともある、山陽も櫛翁に對しては、ちと我儘を抑へ、可成其の機嫌を損ねぬ様につとめた氣味が見える、此點は橋本元吉に對すると、全く態度が違つて居た、扱て右様の關係であるから、其家に傳はつて居る山陽の書簡も、世間に有り觸れのものとは大いに趣を異にし、山陽の眞の性格がよく現はれて居る。

○自分の小野家を訪ねた際には、兩家で山陽の長簡二三通を讀んだばかりで、寫を取る暇が無かつたので、遺憾乍ら茲に其の文章を示すことが出来ぬ、せめて其の書き振りを不完全なからざつと、こゝに云うて見ようなら、山陽は例の漢文を俗文の中に交へて幾んど縫目のわからの様な工合に、よく調和してあつて、例の奔放な筆で、軟かい中に見識が見えて居る、斯れは誰れも知つて居る如くであるが、少し頭の上らぬ櫛翁などに對しては、いつも流儀の書き振りでは、見識を張り過ぎる嫌ひがあるから、そこが巧みに和らげてある。先づ例の豪らうな書き振りで筆を起し、二三行にして、氣が付いたと云ふ鹽梅で、忽ち碎け、これは眞下に云ふ事では無かつたと斷はり、又た忽ちにエラそうな筆になると、又た碎けて何かと言ひ草を工風して和らげ、地步を占めながら當りを和げ

に山陽の秘密を語るもので、たとへば其の多くは金錢の事に關係して居る如きも夫れである、其中には或は窮迫を訴へた書狀もあれば、金の無心を云つて居るものもある、又は潤筆の相場を論じて居るものもあると云ふ次第で、小竹は商業地たる浪華の人であるのみならず、商賈の家に生れた人だけあつて、商賈氣も無いでは無い、家にも多少の金はあつたし、旁々小竹は山陽の爲めに、臺所役をつとめたのである。人の山陽に書を請はんとする時は、多く小竹に就いて謝儀を質し、或は書を齎らして小竹に示し、此には幾許の謝金を贈る可きやなど、相談したことも一再では無い、小竹は其度毎に、友人の爲に必らず有利な取計らひをしたことは、蔽ふ可らざる事實である。

○山陽は郷里廣島へ屢々往復した、これは父母を見る爲めでもあつたらうが、又た或る時期からは、收入を圖る目的で往來したやうでもある。其の往復の停留所とも云ふ可きは、長尾の小野、尾の道の橋本を最として、大部方々に小停車場が出来て居る、屢々往來し、暫らく滞在して居る間には、おのづから門人も出来る、其の門人が皆な山陽の吹聴をするから、到る處潤筆の道が開ける、備中の浦上春琴の如き、浦上玉堂の子で、名門の子であるから、備中では人も彼此珍重かつた畫家だが、詩文は山陽に學んだ、山陽は特に念を入れて詩文を添削して遣つた、春琴も山陽を師としたから、隨つて山陽を其邊に吹聴するやうになつた、長尾の友人田邊碧堂は、此事實を語つて云ふには、山陽もなか／＼世渡りに妙を得て居つた、春琴に身を入れて詩文の指導をしたのは全く自分を賣

らん爲めの手に外ならずと云つた、此評は或は酷かも知らんが、春琴と同郷で且つ山陽を屢々宿した小野家と同村の碧堂の評であるから、強ち根據の無い説でもあるまい。

○田邊碧堂は、知られて居る現代の詩人だ、此人の家は備中の長尾で山陽が招月亭の記を撰んで遣つた、小野泉藏の家の真向ふである。自分は碧堂に伴はれて小野泉藏の家の、今の主人小野節と云ふ人を訪うた。生憎不在であつたから、家に入らず、唯其の周囲を徘徊して招月亭を外都から見だが、一向に質素な構造で、取り分けて云ふ程の家では無い。唯だ田野を見晴らして、一望千里の概がある、月を賞するには成るほど恰當の位置である、亭を招月と命じたのも、偶然ではないと感した、亭の直ぐ前に一帯の川が流れて居る、飛越し得可き程の幅の川で、ハタ川と云ふ名から考へると、畑の用水であることは、言ふまでも無い、夫れを山陽は唐様に秦川と云うて居る。秦川など、云ふと、いんな立派な川かと思ふが、實は畑の用水で、水も餘りに奇麗では無い。あだし事は扱て措いて、長尾では小野の家と田邊の家とが相對峙した豪家である、山陽の遊んだ頃の兩家の主人はどうかと云ふと、田邊家は武を尙んで専ら朱子學を脩め、小野家は文人風で詩歌を作り、歴史などに耽つた、香川景樹も此邊に來たことがある、其時分小野家の番頭の息子が、和歌に天才があると云ふので學ばせた、夫れが有名な木下幸文で、其家は田邊の筋向ふにあつたのが、今は潰れたと云ふ、扱て兩家の好尚が斯の如く違ふのであるが、山陽は田邊の方には餘り喜ばれなかつた、勿論これにはいくらか原因もある、山陽が小野家に寄宿して

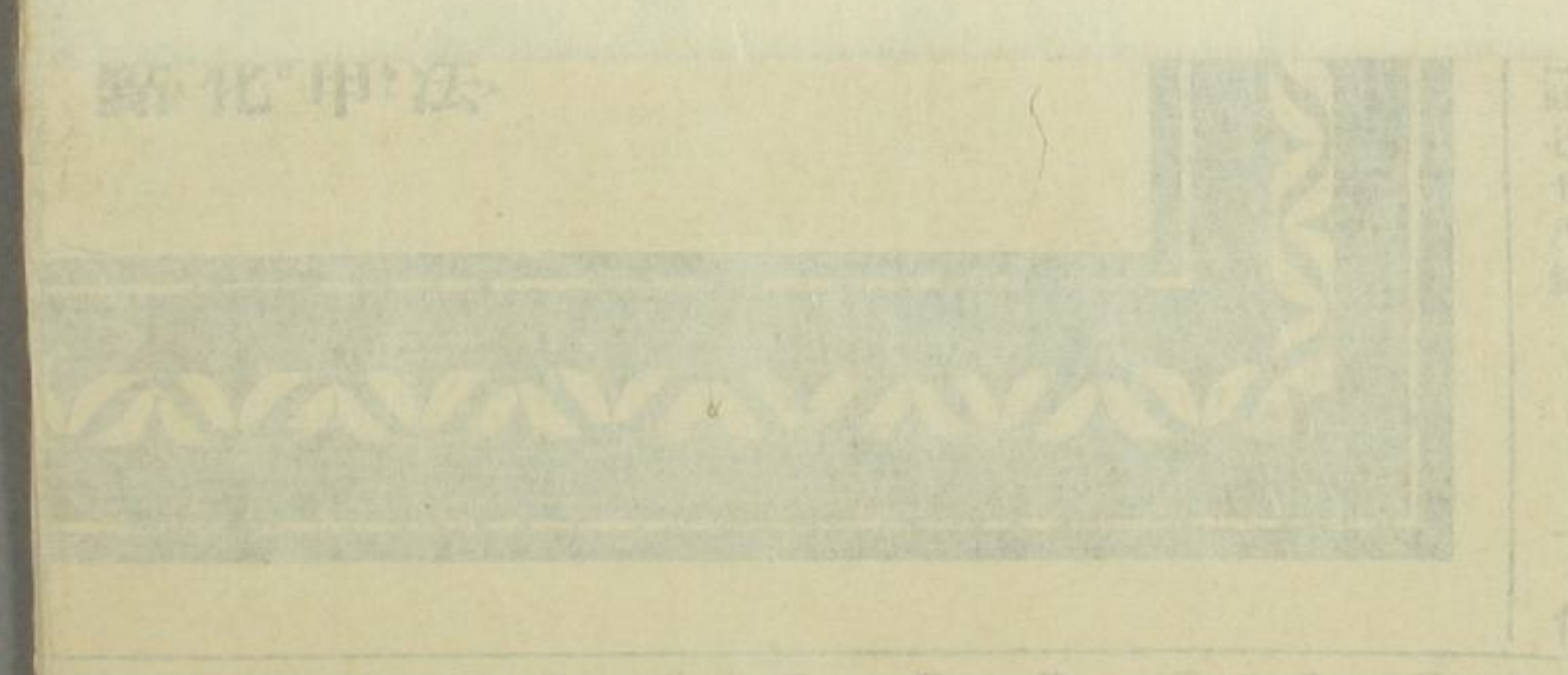
居る中、日々酒を被むり、或は椽先から放尿し、或は婢に戯る、など、持前の癖を盛んに出した所から、田邊の如き尙武的朱子學者は、側らに山陽の失態を聞いて、爪弾きをして餘り親まなかつたらしい、全體が一郷に覇を争ふ豪族の對峙する處には、意氣張りづくで一方の好む所は、一方の嫌ふ所となるは珍らしからぬ事で、こんな事情もいくらかあつたが、田邊の家には山陽の墨蹟が餘りに傳はつて居らぬ。併し堂號は矢張り山陽の撰にかゝり、映碧堂と書した額面が、今も存して居る、今の田邊の號の碧堂と云ふのは、これから來たのである。

○長尾の小野の本家は、堂々たる富豪で、座敷及庭園も立派なものである。山陽が此家に宿をして居つたと思ふと、一層面白味が感せられる、座敷の障子を開けて見ると、椽側がある、こゝに山陽が酔餘放尿を遣つた處だと、案内した碧堂が語つた、成るほど家は山陽時代から、祝融の災のあつた其儘であるから、夫れに相違が無い、庭は苔蒸して、一樹一石皆な寂びを帯びて居る。小高い處に富士に酷似した、長く大きな自然石があつて、風致がいかに好い、小野家の主人樸翁は、山陽に囑して樓記を書かした、此の亭は富峰がある所から、移山亭と云ふ名が付けてある、夫れは誰が命じたか知らんが、山陽の書いた移山亭記は、座敷の入口に掲げてある。此記文は山陽遺稿に載つて居るから、誰れも知つて居るが、さて其の境に至り其の石を見、樸翁の人となり聞き、夫れから之を讀むと一種の感興を覺える。此記文の冒頭に、庭園の風致などに就ては、諸家既に盡して居るから、自分は贅せ

ぬ、自分は歴史を以て任ずるもので、主人も亦た史家であるから、請ふ史實を擧げて論せんと、意外の意匠で文章を書いたる面目が、いかにも躍如として居る。山陽は更に語を續いで、群雄割據の戰國時代には、土地を切り取り、甲を乙に移すなどは掌の裡に在つたが、偕て如何なる豪傑も、富士には閉口して皆な態々拜見に出懸けた、誰々も某々もあの折この折に、富嶽を見に往つたといくつも史實を擧げ、個様な富嶽を移して庭中のもとする主人の得意知る可しなど云ふ鹽梅に文を行つて居るが、流石は才子だと感せられる。

山陽の藩士は、本も餘りに奇麗では無い。...

山陽の藩士は、本も餘りに奇麗では無い。...



山陽の藩士は、本も餘りに奇麗では無い。...



山陽が晩年、肺患に罹つて斃れたと隠れもない事實である。併し山陽本人は自らの病を何んと思つて居つたか一寸分らぬ。處が、茲に山陽自身が肺患であると知つた証據の一通の手紙がある。夫は朝吹英二氏の珍談で、儒中の知人(微嚮)に與へたものだ、日附けは七月晦日としてある。即ち死前四日に當る。

此の手紙で見ると、人は自分を大酒家故、胃血だらうといふが、然うではない、嘔き氣があつて血が出るのでなく、咳をして血が出るから肺患に相違ないと云ふてゐる。又「血如痰き物の外赤法多く出て候」と書き、猶ほ又「六月十二日より吐血の症に罹り醫は、其だ重しといふ。いろく療治すれども、四五日位で止まり、十四五日ぶりに再發吐血し、又二日ばかり止みて、又十日ぶりに三度發し」と記して居る。更らに又「昨冬旅行中、咳出で煙草の味なし」と記し「十中八九は

死を得るを覺悟し候」と書いて居る。右の文意に見ても、人は胃血といふも、自らは然らずと判斷した事が分る。又病氣と氣の付いたのは、昨冬、即ち半歳前からで、そろ／＼咳が出たので然うと知つた様である。流石朝吹氏の山陽も、此の手紙には極めて悲愴の色をあらはし、一讀流愴の感ありしむる。

「お頼みの揮毫は、先方に對して、貴下の顔を描ぶさぬ様、病をつとめて書くが、屏風の方は、とても書けそうもない、若し命あらば書く」といふ様な心細い文句も見へる。終りには「再遊期し難し、縦令逢ふも昔日の如く蕪飲する能はず恨むべし」と漢文に書いて居る。

尙ほ此手紙の中には、「此病に罹つてから、酒も煙草も止めたが、保命酒に燒酎を和してちびり／＼飲んで居ると云ふ様な事もある、流石に酒は全然廢し切れたかつたと思える、此の手紙は山陽の病中の消息を語る風竟の材料であるから、自分も原文を寫して所持し居れどこには略する。



雅俗
相半錄
一三四一
春城學人談
鼠巢庵編

△山陽瑣々談 (13)
山陽が郷里を出奔して勘當の身となり放浪多年後遂に京都に居を定めた。其れから凡そ二年歳つて親の春水が、官暇を得て廣島から大阪へ遊びに來た其時山陽は、始めて父に面會が叶つた、其時の模様は、當時山陽が母に寄せた手紙に委しく載つて居る。

其の文言の大要をここに摘んで云へば、久々で父上に拜謁のお許を得て實に喜びに堪へない、唯だ遺憾なるは、父上の御逗留が短かい爲め、お膝元にひととお附添が出来なかつた、お歸りの時には、是非二三宿もお供申上たいと思つたが、父上の思召の程も計りがたかつた爲め、僅かに西の宮迄お見送り申上げ、其處で愈よお別れの時は何

院
五日
臨時汽車
新運轉事務所

大井正雪
天久保多左衛門
益田金三郎
伊達騷動

岩見武美傳
笹野名槍傳
伊達騷動
怪談
佐賀の櫻
天長庵坊
村長庵坊

分別情堪へがたく、遂にお暇も申上げず、自分はフイと脱げて歸つたこと、失禮の段誠に恐れ入る、自分も京都へ来て未だ二年にしかならぬ。家の内も不自由勝ちで、心一杯の御馳走も出来かね遺憾に堪へない。ある。

山陽も此の機會に勸當が始めて許された、久しく郷里を離れて、歸りたいにも歸る事も出来なかつたのが、此の勸當許可の爲め、歸心矢の如くなつた。母に向つて、是非一度廣島へ歸つて見たいがどういふものか、歸つた處で、内證にして滞在も長くはしまし、廣島表では、自分は備中に居る事になつて居るのだから、近間の處を一寸歸郷したとしたり別に仔細もあるまい、又是非歸る事になれば、途中茶山先生を訪ふてお詫びも申上げたいと其の切なる情、手に取る如く書いて居る。

此の手紙は久須美氏の架中にあるが山陽傳に載つて居るや否や今調べるの暇がない、若し缺けてあるとすれば、補修に便強の材料である。

山陽の晩年、春水已に歿した後、廣島の母や杏坪あたりから是非國へ歸れと切なる勸めがあつたので、山陽は折

角京都に根據を据ゑた今になつて廣島へ歸る氣もないが、折角の勸めに對し無下に拒絶もならず、婉曲に文を舞はし却て母を京都に呼び迎へるの返事を出した、此手紙も久須美氏方にある。

其文面の大略を擧ぐれば、折角のお勸め故、私も愈々歸國の心支度もして居る、就ては速かに自分の居るべく家作をさがしてほしい。場所が好き、細の附いた處なら、家などは粗末でも宜しい、賣物の下屋敷でもなからうか、母上のためであらうと申歸國したい、急がない様で、實は急ぐ、爲めに高價に買ふ様な事にもならうが、そんな事には換へられぬ、とある。

右は手紙の前半の文句で、如何にも山陽が眞實、歸國と決した様でもあるが、彼は決して内心歸國と決したので、はなかつた。此處が山陽一流の兵法で、先づ母や叔父の勸めに心底賛成した様に見せ、其意に従ふべきを述べて置いて、大れから愈々本音を吐くのである。

即ち與ふるは取るの筆路一轉して、併し考へて見ると、私が今更ら廣島の家に歸る事は亡大人の思召に合ふや否やも計りかぬる、就ては恐れながら、母

上には死んだと思つて、寧ろ京都へお引越しになつては如何、自分も今では折角京都に根據も出来た事であるから可成は長く京都に居たい。考もある。

彼は愈々本音を吐いた。却々如才のない。するい筆法である。併し母もおいふれと京都に来る事も出来にくい事情がある。當時の國情婦人たりとも矢鶴に藩を立去る事が出来なかつた、それに付き山陽は一計を案じ、母上御上に就いては藩への手續きも面倒なるべき故、百日の上へ暇を願ひ、期日盡くれば又追願をなし百日、百日と重ねて遂に京都永住も出来るとの意を書き添へてある。

かくして山陽は到底歸國の意がなく廣島へ行かずに一生京都の人となつたのである。



雅俗
相半録
——(三十五)——
春城學人談
鼠巢庵編

あゝさあをあしむま原知へるま
あんくがまら宮月せよこさ
あゝさなま花の物も喜ゆま
●まをまはるにの遊海あり此の物
なまの具は遊海中にるやの井ま
山のな物のつ人お山す山す物の
つ新子、元二の傳、遊人の法はね

修後、考之、其の覚りて、其の
傳、其の信ず、其のよ、其のま、其の
あ、其のあ、其のあ、其のあ、
よ、其のよ、其のよ、其のよ、
い、其のい、其のい、其のい、
川、其の川、其の川、其の川、
そ、其のそ、其のそ、其のそ、

い
に
は

い

に
は

い
に
は

五峯の考、中、其の考、其の考、其の考、
其の考、其の考、其の考、其の考、
其の考、其の考、其の考、其の考、
其の考、其の考、其の考、其の考、
其の考、其の考、其の考、其の考、

取せしより其の故々を都山を所打す
 近來坊写の流ありて其の本の多敷と山
 田のりいり出ししもの

ばかり接ぎ足した跡がある、しかし、
 夫れが全然同じ紙で、一旦切つたもの
 を再び接ぎ足した様に思はれた。
 之は何うしたものかと訊ねると、鳩
 居堂主人は、之には山陽の添手紙が付
 いて居ると云ふて見せた。漢文で書か
 れた名文章である、夫は左の如きもの
 である、

拙稿山水、既詩用覺其下微長、截
 去之、已而試貼之壁一觀、其山麓區
 一尺餘、位置在心、乘機揮毫而畫之、
 大小與畫其合否也。截而後覺之、天
 機之不可安排也。此詩文亦然、猶在
 粘接而後命筆、其好、好、好、
 世、世、世、
 即此此文意は、山陽が詩題題して
 から偶と筆の方が微し長いと思つて之
 を一寸ばかり截り去つた。初し改めて
 之を壁に貼つて見ると下を截つた爲め
 に畫いた山の麓が逼つて餘韻も勢を
 失つて居る事に氣付いた、矢張り最初
 畫いた時、機に乗じて筆を採つたのが
 適度を得たのである。之を松陰に
 送るに、截つた紙を添へて、他日表装
 する時には、之を接ぎ足せと手紙を添
 へたのである、勿率の際に書いた書簡
 ながら印々名である。最初無意論に
 取つて位置が正しいので、截つたのは
 るかつた事を人世の事端に推及して

「大慶のを排すべからざる此の如し、
 詩文亦、然りと記し」之を録して以
 て後日の話柄に備ふ」と言つた處は、
 門人に天地至妙の理を教へたのである
 右の手紙も立派に表装されて此畫幅
 に添はつて同じ箱に藏められて居た。
 私には之を見て大いに興を感じた、此の
 幅は、此の書簡に附帯してあるために
 三千五百圓と云ふ市價を呼んで居る。
 併し實を云ふと疵物である、疵が呼び
 物になつて却て價を増すとは妙である
 が、それには全く添へられて居る書簡
 の働きてある。容堂侯の如き豪奢の人
 が之を珍重した所以も、亦此の疵に一
 種の趣味を感じたからに相違ない。
 此に於てか自分は平素思つて居る事
 の的確なることを感じた。手紙と云ふ
 ものは大切なものである。單に用を濟
 ませば夫れで反古にすべきものではな
 い。多少なりと趣味的の性質を帯んだ
 ものは勿論、又は何等かの記念とすべ
 きものは、必ず保存さるべきものであ
 る。手紙は最も得らざる記録である。
 不用意の間に眞事實を語り、後日に至
 つて大變な益を爲す、況んや、或る物
 に添ひられた手紙は其物を説明するた
 めに捨つ可らざるものである。右の山
 陽の書簡も、若し此の手紙が無かつた

ら、つまり疵物として、格別價を有
 たぬであらう、此一箇の保存されてき
 る爲めに山陽の布目躍動して大變に
 味が加はり却つて珍寶となる、私は平
 生手紙の保存を主張して居るものであ
 るが、此の逸話など書簡保存の必要を
 適切に語る者ではないか。

